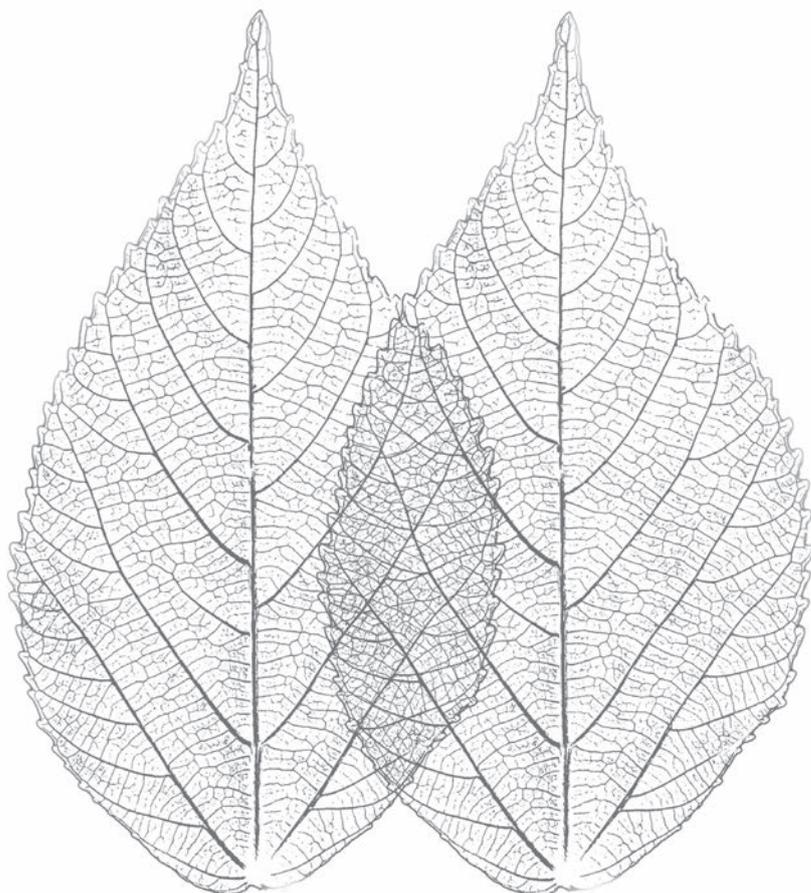


人環レビュー

2024

教育・研究活動に係る自己点検・評価報告書



人環レビュー

教育・研究活動に係る自己点検・評価報告書

- 第1部 学部・研究科等における教育研究活動の状況
第2部 資料編

令和7年9月

京都大学
大学院 人間・環境学研究科 総合人間学部

**第1部 学部・研究科等における
教育研究活動の状況** — 4

本自己点検・評価の目的 — 5

【1】総合人間学部 教育に関する状況 — 7

1.総合人間学部の教育目的と特徴 — 7

2.教育の水準 — 8

分析項目(1)教育活動の状況 — 8

1.1 学位授与方針	8
1.2 教育課程方針	8
1.3 教育課程の編成、授業科目の内容	8
1.4 授業形態、学習指導法	9
1.5 履修指導、支援	10
1.6 成績評価	10
1.7 卒業判定	11
1.8 学生の受入	11
1.9 教育の国際性	12
1.10 地域連携による教育活動	12
1.11 教育の質の保証・向上	13
1.12 学際的教育の推進	13
分析項目(1) 教育活動の状況 自己判定	14

分析項目(2)教育成果の状況 — 15

2.1 卒業率、資格取得等	15
2.2 就職、進学	15
2.3 卒業時の学生からの意見聴取	15
2.4 卒業生からの意見聴取	16
2.5 就職先等からの意見聴取	16
分析項目(2) 教育成果の状況 自己判定	17

【2】人間・環境学研究科 教育に関する状況 — 18

1.人間・環境学研究科の教育目的と特徴 — 18

2.教育の水準 — 19

分析項目(1)教育活動の状況 — 19

1.1 学位授与方針	19
1.2 教育課程方針	19
1.3 教育課程の編成、授業科目の内容	19
1.4 授業形態、学習指導法	20
1.5 履修指導、支援	21
1.6 成績評価	22
1.7 修了判定	22
1.8 学生の受入	23
1.9 教育の国際性	23
1.10 地域連携による教育活動	24
1.11 教育の質の保証・向上	24
1.12 学際的教育の推進	24
1.13 リカレント教育の推進	25
分析項目(1) 教育活動の状況 自己判定	27

分析項目(2)教育成果の状況 — 28

2.1 修了率、資格取得等	28
2.2 就職、進学	28
2.3 修了時の学生からの意見聴取	29
2.4 修了生からの意見聴取	29
2.5 就職先等からの意見聴取	29
分析項目(2) 教育成果の状況 自己判定	31

【3】人間・環境学研究科 研究活動に関する状況 — 32

1.総合人間学部・人間・環境学研究科の研究目的と特徴 — 32

2.研究の水準 — 33

分析項目(1)研究活動の状況 — 33

1.1 研究の実施体制及び支援・推進体制	33
1.2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上	33
1.3 論文・著書・特許・学会発表など	34
1.4 研究資金	34
1.5 地域連携による研究活動	35
1.6 国際的な連携による研究活動	35
1.7 研究成果の発信／研究資料等の共同利用	36
1.8 総合的領域の振興	36
1.9 学術コミュニティへの貢献	36
1.10 その他(研究業績に対する受賞)	36
分析項目(1) 研究活動の状況 自己判定	38

分析項目(2)研究成果の状況 — 39

2.1.研究業績	39
分析項目(2) 研究成果の状況 自己判定	40



第2部 資料編 — **42**

1. 理念・研究教育体制 — **44**

【資料 1-1】人間・環境学研究科 教育研究上の目的と教育の方針 45

① 人間・環境学研究科 教育研究上の目的 45

② 人間・環境学研究科 ディプロマ・ポリシー 45

③ 人間・環境学研究科 カリキュラム・ポリシー 45

④ 人間・環境学研究科 アドミッション・ポリシー 46

⑤ 人間・環境学研究科 カリキュラム体系 47

【資料 1-2】総合人間学部 教育研究上の目的と方針 48

① 総合人間学部 教育研究上の目的 48

② 総合人間学部 ディプロマ・ポリシー 48

③ 総合人間学部 カリキュラム・ポリシー 48

④ 総合人間学部 アドミッション・ポリシー 49

⑤ 総合人間学部 カリキュラム体系 49

⑥ 総合人間学部 入学から卒業まで 50

【資料 1-3】沿革 51

【資料 1-4】組織の変遷 52

【資料 1-5】① 研究教育組織 (2022(R4) 年 4 月 1 日現在) 53

【資料 1-5】② 研究教育組織 (2023(R5) 年 4 月 1 日現在) 54

【資料 1-5】③ 研究教育組織 (2024(R6) 年 4 月 1 日現在) 55

【資料 1-6】他部局ならびに学外諸機関との協力体制 56

【資料 1-7】管理運営組織 57

【資料 1-8】教職員数の推移 58

【資料 1-9】教員の年齢構成 59

2. 総合人間学部 — **60**

【資料 2-1】学生数の推移 61

【資料 2-2】入学状況 61

【資料 2-3】転学部 (転入・転出) の状況 61

【資料 2-4】留年・休学・退学の状況 62

【資料 2-5】修業年限内卒業率と「標準修業年限×1.5」年内卒業率 62

【資料 2-6】卒業生の進路 62

【資料 2-7】就職状況 63

【資料 2-8】資格取得状況 64

【資料 2-9】留学生の受入状況 64

【資料 2-10】日本人学生の留学状況 65

【資料 2-11】外国の大学において修得した単位の認定状況 65

【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果 66

【資料 2-13】総合人間学部 授業評価アンケート結果 67

【資料 2-14】① 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 1 回生 69

【資料 2-14】② 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 2 回生 70

【資料 2-14】③ 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 3 回生 71

【資料 2-14】④ 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 4 回生 72

【資料 2-14】⑤ 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 卒業生 73

【資料 2-15】総合人間学部 卒業生 (卒業後 3 年目) アンケート結果 75

3. 人間・環境学研究科 — **76**

【資料 3-1】学生数の推移 77

【資料 3-2】入学状況 77

【資料 3-3】研究生在籍数 78

【資料 3-4】留年・休学・退学の状況 78

【資料 3-5】他研究科への聴講の状況 78

【資料 3-6】修士課程 学位授与の状況 79

【資料 3-7】修士課程 標準修業年限内修了率と「標準修業年限×1.5」年内修了率 79

【資料 3-8】修士課程修了者の進路 79

【資料 3-9】修士課程修了者の就職状況 80

【資料 3-10】博士後期課程 学位授与の状況 81

【資料 3-11】博士後期課程 標準修業年限内修了率と「標準修業年限×1.5」年内修了率 81

【資料 3-12】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路 81

【資料 3-13】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の就職状況 82

【資料 3-14】教員免許状資格取得状況 83

【資料 3-15】日本学術振興会特別研究員の受入状況 83

【資料 3-16】留学生の受入状況 83

【資料 3-17】日本人学生の留学状況 84

【資料 3-18】人間・環境学研究科 授業評価アンケート結果 85

【資料 3-19】修士課程 M2 学生アンケート結果 87

【資料 3-20】修士課程修了時アンケート結果 89

【資料 3-21】博士後期課程修了 (認定退学) 時 アンケート結果 91

【資料 3-22】修士課程 修了生 (修了後 3 年目) アンケート結果 93

【資料 3-23】博士後期課程 修了生 (認定退学含む) (修了後 3 年目) アンケート結果 94

4. 教育研究指導体制 — **96**

【資料 4-1】履修指導について 97

【資料 4-2】附属学術越境センター・学際教育研究部の活動 98

【資料 4-3】「総人のミカタ」講義リスト 101

【資料 4-4】他大学・公的機関および企業との共同研究 102

【資料 4-5】他大学・公的研究機関の共同利用施設・設備の利用に関わる研究課題採択数 102

【資料 4-6】 地域での兼業一覧（非公開）……………	102
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況①【科学研究費助成事業】 ……………	103
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況②【寄付金】 ……	103
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況③【共同研究】 ……	103
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況④【受託研究】 ……	104
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況⑤【特許】 ……	104
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況⑥【全体版】 ……	104
【資料 4-8】 学生の学会発表者数 ……	104
【資料 4-9】 学生の論文掲載数 ……	104
【資料 4-10】 学生・修了生が獲得した助成金等 ……	105
【資料 4-11】 若手研究者出版助成による刊行物 ……	106
【資料 4-12】 学生・修了生の受賞状況 ……	107
【資料 4-13】 学生相談室の利用件数 ……	108
【資料 4-14】 京都大学学際融合教育研究推進センターにおける 参画ユニット ……	108
【資料 4-15】 教員の受賞（2020(令和2)～2024(令和6)年度） ……………	109

5. 国際交流	— 110
【資料 5-1】 出身地域別留学生受入数（人間・環境学研究科） ……………	111
【資料 5-2】 外国人研究者等の受入状況 ……	111
【資料 5-3】 招へい外国人学者による国際交流セミナー 開催状況 ……	112
【資料 5-4】 海外渡航研究者 ……	113
【資料 5-5】 部局間学術交流協定締結先一覧 ……	113
【資料 5-6】 国際的な共同研究・研究ネットワーク・ 研究者交流 ……	113
6. 施設・設備	— 114
【資料 6-1】 使用目的別 室数と保有面積 ……	115
【資料 6-2】 使用形態別 室数と保有面積 ……	115
7. 社会との交流・公開	— 116
【資料 7-1】 公開講座開催状況 ……	117
【資料 7-2】 本研究科関係発行元による学術誌 ……	118
【資料 7-3】 出張講義・訪問受入状況 ……	119
【資料 7-4】 学びコーディネーターによる出前授業 ……	119
【資料 7-5】 京都大学の卒業生と教育に係る アンケート実施結果（令和5年）より抜粋 ……	120

第1部 学部・研究科等における教育研究活動の状況

本自己点検・評価の目的	—	5	1.6 成績評価	22
			1.7 修了判定	22
【1】総合人間学部 教育に関する状況	—	7	1.8 学生の受入	23
			1.9 教育の国際性	23
1. 総合人間学部の教育目的と特徴	—	7	1.10 地域連携による教育活動	24
2. 教育の水準	—	8	1.11 教育の質の保証・向上	24
分析項目 (1) 教育活動の状況	—	8	1.12 学際的教育の推進	24
1.1 学位授与方針		8	1.13 リカレント教育の推進	25
1.2 教育課程方針		8	分析項目 (1) 教育活動の状況 自己判定	27
1.3 教育課程の編成、授業科目の内容		8		
1.4 授業形態、学習指導法		9	分析項目 (2) 教育成果の状況	— 28
1.5 履修指導、支援		10	2.1 修了率、資格取得等	28
1.6 成績評価		10	2.2 就職、進学	28
1.7 卒業判定		11	2.3 修了時の学生からの意見聴取	29
1.8 学生の受入		11	2.4 修了生からの意見聴取	29
1.9 教育の国際性		12	2.5 就職先等からの意見聴取	29
1.10 地域連携による教育活動		12	分析項目 (2) 教育成果の状況 自己判定	31
1.11 教育の質の保証・向上		13		
1.12 学際的教育の推進		13	【3】人間・環境学研究科 研究活動に関する状況—	32
分析項目 (1) 教育活動の状況 自己判定		14	1. 総合人間学部・人間・環境学研究科の研究目的と特徴	— 32
			2. 研究の水準	— 33
分析項目 (2) 教育成果の状況	—	15	分析項目 (1) 研究活動の状況	— 33
2.1 卒業率、資格取得等		15	1.1 研究の実施体制及び支援・推進体制	33
2.2 就職、進学		15	1.2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上	33
2.3 卒業時の学生からの意見聴取		15	1.3 論文・著書・特許・学会発表など	34
2.4 卒業生からの意見聴取		16	1.4 研究資金	34
2.5 就職先等からの意見聴取		16	1.5 地域連携による研究活動	35
分析項目 (2) 教育成果の状況 自己判定		17	1.6 国際的な連携による研究活動	35
			1.7 研究成果の発信／研究資料等の共同利用	36
【2】人間・環境学研究科 教育に関する状況	—	18	1.8 総合的領域の振興	36
			1.9 学術コミュニティへの貢献	36
1. 人間・環境学研究科の教育目的と特徴	—	18	1.10 その他（研究業績に対する受賞）	36
2. 教育の水準	—	19	分析項目 (1) 研究活動の状況 自己判定	38
分析項目 (1) 教育活動の状況	—	19		
1.1 学位授与方針		19	分析項目 (2) 研究成果の状況	— 39
1.2 教育課程方針		19	2.1 研究業績	39
1.3 教育課程の編成、授業科目の内容		19	分析項目 (2) 研究成果の状況 自己判定	40
1.4 授業形態、学習指導法		20		
1.5 履修指導、支援		21		

● 本自己点検・評価の目的

- ・本報告書において実施した教育・研究に係る自己点検・評価は、教育研究に係る状況について点検・評価し、それに基づいた改善を行うものとして本研究科が独自に実施しているものである。
- ・本報告書では、令和2年度から令和6年度までの教育研究に係る状況について本研究科が行った自己点検・評価の結果を第1部として取りまとめ、その資料を第2部としてまとめた。

自己点検・評価の実施方法

- ・評価対象期間：令和2年から令和6年度
- ・評価項目：教育・研究ともに、活動及び成果の状況ごとに分析を行った。

現況調査表の項目一覧表

区分	分析項目	記載項目
教育	(1) 教育活動の状況	1.1 学位授与方針 1.2 教育課程方針 1.3 教育課程の編成、授業科目の内容 1.4 授業形態、学習指導法 1.5 履修指導、支援 1.6 成績評価 1.7 卒業判定 1.8 学生の受入 1.9 教育の国際性 1.10 地域連携による教育活動 1.11 教育の質の保証・向上 1.12 学際的教育の推進
	(2) 教育成果の状況	2.1 卒業率、資格取得等 2.2 就職、進学 2.3 卒業時の学生からの意見聴取 2.4 卒業生からの意見聴取 2.5 就職先等からの意見聴取
研究	(1) 研究活動の状況	1.1 研究の実施体制及び支援・推進体制 1.2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上 1.3 論文・著書・特許・学会発表など 1.4 研究資金 1.5 地域連携による研究活動 1.6 国際的な連携による研究活動 1.7 研究成果の発信／研究資料等の共同利用 1.8 総合的領域の振興 1.9 学術コミュニティへの貢献
	(2) 研究成果の状況	2.1. 研究業績

- ・なお、記載項目は、当該記載項目を分析するに当たり必要と認められる「基本的な記載事項」と、優れた取組やそれらの成果を記述した「評価対象期間に係る特記事項」から構成し、「基本的な記載事項」の分析は根拠資料・データで行った。

・判定

研究科の目的に照らして、取組や活動、成果の状況がどの程度の質にあるのか、第3期中期目標期間の教育研究評価との比較も含め、分析項目ごとに下記区分により判定した。

判定区分	判断基準
S 特筆すべき高い質にある	学部・研究科等の（教育／研究）上の目的に照らして、取組や活動、成果の状況が非常に優れていると判断される場合
A 高い質にある	学部・研究科等の（教育／研究）上の目的に照らして、取組や活動、成果の状況が優れていると判断される場合
B 相応の質にある	学部・研究科等の（教育／研究）上の目的に照らして、取組や活動、成果の状況が相応であると判断される場合
C 質の向上が求められる	それぞれの学部・研究科等の（教育／研究）上の目的に照らして、取組や活動、成果の状況が不十分であると判断される場合

【1】総合人間学部 教育に関する状況

1. 総合人間学部の教育目的と特徴

本学部の教育は自然科学、社会科学、人文科学の各領域を専門とする教員の緊密な連携によって担われており、科学技術の急速な発展や国際化の深化によって大きく変化する 21 世紀の社会に対し、持続的かつ創造的に対処しうる人材を育成することを目的としている。

本学部は令和 5 年度までは 1 学科（総合人間学科）5 学系制をとっていたが、令和 6 年度から大学院人間・環境学研究科にあわせて、10 講座制とした。いずれも、文系・理系 2 系統で入学した学生が、自由に自らの専門を選択できることを保証し、主専攻として専門的な学識を深めることができる。また同時に、広い視野を持ち創造性豊かな人間を育成する目的で副専攻の制度を設けている。この制度は、「教養教育を充実させるとともに、専門的基礎知識と総合的判断力並びに国際性を養う」という本学の「教育の質の向上に関する目標」に沿ったものであり、幅広い理解力をもつ人材の育成を目指している。

なお、総合人間学部は平成 15 年に京都大学大学院人間・環境学研究科と一体化し、原則として人間・環境学研究科の教員が総合人間学部の学部教育を担当し、研究指導教員となっている。

2. 教育の水準

分析項目 (1) 教育活動の状況

1.1 学位授与方針

【基本的な記載事項】

- 公表された学位授与方針

- ・京都大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/gakubu/di-policy>

- ・総合人間学部のディプロマ・ポリシー

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/education/diploma/soujin>

- ・『令和6年度総合人間学部便覧（令和5年度以前入学用）』『同（令和6年度以降入学用）』p4 ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

1.2 教育課程方針

【基本的な記載事項】

- 公表された教育課程方針

- ・京都大学教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/gakubu/cu-policy>

- ・総合人間学部のカリキュラム・ポリシー

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/education/gakubu-cu/soujin>

- ・『令和6年度総合人間学部便覧（令和5年度以前入学用）』『同（令和6年度以降入学用）』p4「カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）」

1.3 教育課程の編成、授業科目の内容

【基本的な記載事項】

- 体系性が確認できる資料

- ・総合人間学部 コースツリー

<https://www.h.kyoto-u.ac.jp/about/ug/curriculum/>

- ・『令和6年度総合人間学部便覧（令和5年度以前入学用）』p5-9「総合人間学部コース・ツリー」

- ・『令和6年度総合人間学部便覧（令和6年度以降入学用）』p5「総合人間学部コースツリー」

- ・『令和6年度（2024）履修モデル&教員プロフィール<学系版>』履修モデル

※【人間科学系】(p3,9,13,17,21,25)、【認知情報学系】(p29, 35, 39, 43, 49, 55, 61)、【国際文明学系】(p65, 69, 73, 77, 81, 85, 89, 93, 99, 105)、【文化環境学系】(p109, 113, 117, 121, 125, 129, 133, 137, 141, 145)、【自然科学系】(p149, 157, 165, 173)

- ・『令和6年度（2024）履修モデル&教員プロフィール<講座版>』履修モデル

※【1 数理・情報科学講座】(p3, 9)、【2 人間・社会・思想講座】(p15, 21, 25, 29, 33)、【3 芸術文化講座】(p37, 41, 45, 49, 53, 57)、【4 認知・行動・健康科学講座】(p61, 67, 71)、【5 言語科学講座】(p75, 81)、【6 東アジア文明講座】(p85, 89, 93, 99, 103, 107)、【7 共生世界講座】(p111, 115, 119, 123, 127, 131, 135, 139)、【8 文化・地域環境講座】(p143, 147, 151)、【9 物質科学講座】(p155, 163)、【10 地球・生命環境講座】(p171, 179)

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本学部は、令和5年度までは1学科（総合人間学科）5学系制をとり、令和6年度以降は1学科10講座制をとっており、一般入試（文系入試・理系入試）、特色入試のいずれで合格した学生も自由に専門を選択できるようになっている。主専攻として専門的な学識を深めるとともに、広い視野を持ち創造性豊かな人間を育成する目的で主専攻以外の専攻を必修とする制度（副専攻制度）を設け、卒業時には学位記とは別に副専攻名を記した認定書を発行している。また本学部では、他学部の授業科目を履修した場合、指導教員の認定のもと、主専攻科目として卒業要件単位数に含めることができるようになっている。さらに、生命科学研究所、情報学研究所など、他部局からの協力教員にも授業を担当いただき、カリキュラム全体の体系性を高めると同時に、

学生の視点からは多様なバックグラウンドの教員から知識を得られる仕組みとなっている。以上の仕組みにより、自らの専門を深めるとともに、多様な科目を選択し、幅広い知識を獲得できるように配慮されている。

- 平成 30 年度以降の入学に対して、教育学部、文学部と協働して、公認心理師受験の要件となっている「大学における必要な科目」(25 科目)の提供を開始した。総合人間学部からは 17 コマ(13 科目)(令和元年度)が提供されている。これにより、本学部在学中に受験要件科目の取得が可能になり、卒業後に大学院修士課程に進学するか、あるいは特定の機関で実務経験を 2 年ないし 3 年積むことで、受験資格が得られることになり、資格取得希望学生の利便性を向上させた。(『令和 6 年度総合人間学部便覧(令和 6 年度以降入学者用)(令和 6 年度以降入学者用)』※ p50「公認心理士となる資格の取得について」)
- 教養・共通教育を担当する国際高等教育院の企画評価専門委員会に、総合人間学部からは 6 名の教員が加わり、カリキュラムの作成に深く関わっている。また総合人間学部のほぼすべての教員が国際高等教育院における教養・共通教育の講義・演習・実習等の実施を担っており、総合人間学部の教育課程方針及び学位授与方針と整合的な教養・共通教育体系になっている。

1.4 授業形態、学習指導法

【基本的な記載事項】

- 1 年間の授業を行う期間が確認できる資料

- ・アカデミックカレンダー(標準)

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/calendar>

- ・『令和 6 年度総合人間学部便覧(令和 5 年度以前入学者用)』、『同(令和 6 年度以降入学者用)』pi「令和 6(2024)年度 総合人間学部学年暦」

- シラバスの全件、全項目が確認できる資料、学生便覧等関係資料

- ・シラバス https://www.k.kyoto-u.ac.jp/external/open_syllabus/top

【評価対象期間に係る特記事項】

- 専門外の人に研究内容をわかりやすく語るコミュニケーション能力と、多様かつ総合的な視点で物事を観る能力を培うことを目的とし、平成 28 年度から卒業予定者が自らの研究内容を異分野の教員に語る「研究を他者に語る」という取り組みを開始し、令和 3 年度以降必修化した。令和 6 年度に実施されたアンケート調査では、本制度に意義があると答えた学生は 71.7%であり、ディプロマ・ポリシーに掲げているプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の発達に大いに寄与していると判断される。また令和 5 年度に京都大学本部によって実施された企業・官公庁等向けアンケート調査によると、総合人間学部の卒業生は、京都大学全体の卒業生・修了生にくらべて、「国際性、異文化理解力」、「企画力、創造性」、「課題解決力」、「思考力、判断力」などの能力が十分に備わっているとする回答が、京大全体の平均よりおおむね 7~10% 以上高くなっており、とりわけ「多角的視点、広い視野」については 15% 近く平均より高くなっている。この結果についても、「研究を他者に語る」の試みが貢献している可能性がある。(『令和 6 年度総合人間学部便覧(令和 5 年度以前入学者用)』p11「研究を他者に語る」、『同(令和 6 年度以降入学者用)』p7「研究を他者に語る」、【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果)
- 総合人間学部生と人間・環境学研究院院生の交流の場として、平成 29 年度から人間・環境学研究院院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」が実施されており、本学部もこの取り組みを支援している。これは、多様な分野の大学院生がリレー式で、自らの学修経験とともに自らの研究を初学者である学部生にわかりやすく解説するものである。本取り組みは、特に学部の 1・2 回生に対して研究のロールモデルを提示するとともに、研究マインドの醸成にもつながっている。また模擬講義については実際には全学の学生が聴講できるようになっており、多分野の学生の交流の場となっている。なお、この成果の一部が『〈京大発〉専門分野の越え方』(ナカニシヤ出版)として令和 5 年度に、特にこの企画に関わりの深い卒業生らが執筆者となり、出版されている。(【資料 4-3】「総人のミカタ」講義リスト)
- 物理学・化学・生物学・地球科学からなる多分野の教員が、同一の水域・地域を対象に自然科学的構造と動態を多面的・複合的に学ぶことを目的とする学際融合科目「総合フィールド演習」を提供してきた。本演習は、事前講義、フィールド実習(三重大学附属練習船水丸乗船実習・植物フィールド調査・地学巡検実習)、事後実習、総合討論からなり、他の大学等に例を見ない分野横断的な特色ある理系総合演習科目となっている。文系学生や他学部学生を含め例年 20 名程度の学生が参加し、参加学生からの高い評価を得てきた。ただ新型コロナにより令和 2~令和 4 年度は中止し、令和 5 年度から 10 名の定員で再開した。令和 6 年度から 20 名の定員に戻している。

- 令和2年度以降、一人の教員が担当できる卒業論文指導の学生数を原則3名以下に制限した。これにより少人数教育体制の確保を図っている。

1.5 履修指導、支援

【基本的な記載事項】

- 履修指導の実施状況が確認できる資料（【資料4-1】履修指導について）
- 学習相談の実施状況が確認できる資料（【資料4-13】学生相談室の利用件数（学部生））
- 社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組が確認できる資料
- 履修上特別な支援を要する学生等に対する学習支援の状況が確認できる資料
 - ・『令和6年度総合人間学部便覧 令和5年度以前入学者用』※ p11 総合人間学部の教育制度について
 - ・『令和6年度総合人間学部便覧 令和6年度以降入学者用』※ p6 総合人間学部の教育制度について
 - ・『令和6年度履修モデル&教員プロフィール<学系版><講座版>』オフィスアワーの記載（教員プロフィール欄）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 教員名、専門分野、オフィスアワー、講義担当科目などを記載した冊子『履修モデル&教員プロフィール』を全学生に配付している。この冊子では、各教員が、みずからのもとで卒業研究を行う場合に修得が望ましい科目を示している。これにより、学生の科目履修方針の決定を早期かつ計画的に進められるようになっている。（『令和6年度履修モデル&教員プロフィール<学系版><講座版>』オフィスアワーの記載（教員プロフィール欄））
- 新入生が早期に学部の雰囲気や生活に溶け込むことができる環境作りを目的に、学生有志が企画し、毎年4月初旬に行われている宿泊行事（新入生合宿）に、総合人間学部も協力してきた。令和2年度以降は新型コロナのため宿泊行事は中止となっているが、そのかわりに令和3年度以降は新入生歓迎交流会を毎年4月に開催している。令和5年には、大文字山など、京大周辺を散策し、その後、総合人間学部棟で懇親会を行った。また令和6年度からは、新入生合宿が再開され、ほとんどの新入生が参加するとともに、多くの上回生および複数の教員が参加している。
- 1回生については5～6人に対して1人の教員を担任として配置し、履修指導を含めさまざまな相談に対応する体制を整えている。また2・3回生に対しては、学生が自ら希望して教員を選ぶことができるアドバイザー教員制度を設け、科目履修・学習等の相談を行えるようにしている。さらに語学の修得単位数などが少ない学生には、担任あるいはアドバイザー教員から連絡し、面談を行うなど、常に学生と緊密な連絡を取って、早期に相談・支援できる環境を作っている。
- 従来、学生・教員交流イベント「人間・環境学フォーラム」を春と秋に開催してきたが、新型コロナの流行により令和2年度は中止とした。だが令和3年度以降は、オンラインを用いたり、飲食をともなわずに対面で行ったり（大文字山登山など）、さまざまな工夫をして実施してきた。令和5年度には、9月に、1回生向けの学系分属説明会のタイミングで「秋の交流会」を開催し、学生50名程度、教員30名程度が参加した。10月には大文字山登山を企画し、その後、懇親会を行った。この催しには教員・学生あわせて40名程度が参加している。以上の活動により、履修や進路等について、学生が教員や上回生に対して、気軽に相談できる環境を提供している。
- 平成28年度から、学業や進路、日常生活の悩みなどを幅広く相談できる場として、部局独自に「学生相談室」を設け、臨床心理士を配置した。対応件数は、令和2年度49件、令和3年度64件、令和4年度72件、令和5年度72件、令和6年度60件、となっており、学生ニーズに十分に対応している。さらに令和元年度からは、臨床心理士の配置を週2日から3日に増やすとともに、英語およびフランス語で相談に対応できる特定准教授（1名）（定員外）を配置し、相談サポート体制を充実させた。なお同特定准教授は令和5年10月から専任教員（定員内の准教授）となり、今後も継続的に英語およびフランス語による相談が可能となった。（【資料4-13】学生相談室の利用件数「主訴の内訳（学部生）」）

1.6 成績評価

【基本的な記載事項】

- 成績評価基準
- 成績評価の分布表
- 学生からの成績評価に関する申立ての手続きや学生への周知等が明示されている資料
 - ・『令和6年度総合人間学部便覧 令和5年度以前入学者用』p20-21「成績について」（成績表の開示について／成績評価につ

いて／GAP 制度)

- ・『令和 6 年度総合人間学部便覧 令和 6 年度以降入学者用』p15-16 同上

【評価対象期間に係る特記事項】

- 毎年、成績分布表が教務委員会に報告され、成績分布に極端な偏り等がないかどうかチェックを行っている。
- 平成 28 年度以降の入学者を対象に GPA (Grade Point Average) 制度を導入した。成績表には、不合格となった科目も含めた全ての履修単位に係る成績、「学期 GPA」及び「累積 GPA」を記載しており、学生が自らの GPA を把握することを容易にしている。これにより学生の自律的な学修の促進及び学生に対する学修指導等に活用する仕組みを整えている。
- 全学共通科目について、履修コマ数につき 1 開講期の上限を 20 コマとする CAP 制を導入した。これにより、学生による無理な履修計画の回避を図っている。さらに、令和元年度に上限コマ数の見直しを行い、単位認定の実質化を図っている。

1.7 卒業判定

【基本的な記載事項】

- 卒業又は修了の要件を定めた規定
- 卒業又は修了判定に関する教授会等の審議及び学長など組織的な関わり方を含めて卒業（修了）判定の手順が確認できる資料
 - ・『令和 6 年度総合人間学部便覧 令和 5 年度以前入学者用』p13-14「卒業判定基準単位表」・p21「卒業論文・卒業研究について」
 - ・『令和 6 年度総合人間学部便覧 令和 6 年度以降入学者用』p9「卒業判定基準単位表」・p16「卒業論文・卒業研究について」

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本学部では、卒業論文の執筆・提出が必須とされ、卒業要件のひとつとなっており、学生は、その内容について公開の場（卒業論文発表会）で発表を行い、主査と副査によって公平かつ厳格に評価される仕組みが整備されている。
- 卒業予定者が、自らの研究の内容や意義について、専門分野が異なる教員にわかり易く話す「研究を他者に語る」が、令和 3 年度入学者から卒業要件として必修化されている。本プログラムは、ディプロマ・ポリシーに即した人材の育成・輩出に貢献している。

1.8 学生の受入

【基本的な記載事項】

- 学生受入方針が確認できる資料
- 入学者選抜確定志願状況における志願倍率
- 入学定員充足率
- 女性学生の割合、社会人学生の割合、留学生の割合、受験者倍率、入学定員充足率
 - ・【資料 2-1】学生数の推移（総合人間学部）
 - ・【資料 2-2】入学状況（総合人間学部）（志願状況）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本学部の入学者選抜は、京都大学の一般入試において文系試験と理系試験に分けて実施され、多様な基礎的学力が測られている。入学後は入試方式に関わらずどの専門にも進むことができる。
- 本学部独自の特色入試を平成 28 年度入学者より開始し、令和 2 年度以降、毎年 4～5 名の学生を受け入れている。本学部の特色入試は、京都大学において唯一、記述試験を課しており、「総合」や「文理融合」の意義を理解して積極的に学習を進めようとする学生を確保すべく、高等学校における学びの成果、基礎学力とともに、文系と理系の総合的な思考力・表現力を評価することを目的としている。
- 京都大学吉田カレッジ (Kyoto iUP (Kyoto University International Undergraduate Program)) について、平成 29 年度の予備教育履修者選抜から参画してきた。令和 2 年度に 1 名、令和 3 年度に 1 名、令和 5 年度に 1 名の正規課程入学生を受け入れた。
- 学生の多様なニーズに対応して、他学部からの転学部生を受け入れてきた。令和 2 年度・令和 3 年度はそれぞれ 7 名の転学部生を受け入れた。ただ、令和 4 年度以降、定員管理が収容定員を基準として実施されるようになったため、令和 4 年度に 5 名、令和 6 年度に 2 名と、転学部生の受け入れは事実上難しくなっている。なお、総合人間学部から他学部へ転学部する学生は毎年ほとんどいない。（【資料 2-3】転学部（転入・転出）の状況）

- 国費外国人留学生については定員外として扱い、特別選考により入学を認めるなど、受け入れ態勢の整備を図ってきた。新型コロナのため人数は減少したものの、令和2～令和6年度の国費留学生の受け入れは8名となっている。(【資料 2-9】留学生の受入状況)
- 社会からの要請に配慮して、本学卒業生(卒業見込者を含む)は、本学部の第3年次への編入学を認めている。また同様の観点から、科目等履修生、特別聴講学生として入学を志望する者には、教授会の議を経て入学を許可している。令和2～令和6年度の第3年次編入学者、科目等履修生、特別聴講学生(大学間学生交流協定に基づく短期留学生など)は、それぞれ、25名、19名、24名、18名、18名であり高い水準を維持している(内訳 学士入学者:1,0,1,0,0、転入者:7,7,5,0,2、科目等履修生:12,11,11,12,14、特別聴講学生:5,1,7,6,2)。(【資料 2-2】入学状況(学士入学者)、【資料 2-3】転学部(転入・転出)の状況、【資料 2-1】学生数の推移(科目等履修生)、【資料 2-9】留学生の受入状況(特別聴講学生))
- 適切な入学者を確保すべく、オープンキャンパスを通じた広報活動に力を入れている。教員だけで企画し、教員が一方向的に話をするだけでなく、学生の企画を一部実施したり、在学生・教員と個別相談する場を設けたり、複数の研究室を実際に訪問できるようにしたり、さまざまな試みを行ってきた。新型コロナが深刻な時期はオンラインを活用することで対応してきた。令和4年度にはオンラインで実施し169名が交流会に参加した。令和5年度からは対面で実施し、令和5年度、令和6年度ともに約600名の参加者があった。

1.9 教育の国際性

【基本的な記載事項】

- 協定等に基づく留学期間別日本人留学生数
- 留学生の割合、海外派遣率

【評価対象期間に係る特記事項】

- 外国の大学に留学して単位を修得した学生は、平成28年度～令和元年度で、年平均7.7名いた。令和2年度以降は新型コロナにより減少したものの、令和5年度は3名、令和6年度は12名の学生が外国の大学で修得した単位が卒業要件単位として認められた。
- これまでは大学間学生交流協定に基づき毎年10～15名程度の学部生を海外の大学に派遣してきたが、新型コロナにより減少した。だが、令和4年度は5名(うち1名はオンライン)、令和5年度、令和6年度はそれぞれ13名、14名の学生を派遣しており、その数は回復しつつある。
- 京都大学国際教育プログラムおよび大学間学生交流協定に基づき、外国人留学生を受け入れてきたが、新型コロナにより大幅に減少した。だが、令和2～令和6年度で、合計25名の外国人留学生を受け入れており、教育の国際性に貢献している。
- 本学の国際化を目的とした「グローバル化に対応した教学マネジメントのための組織改革」プログラムなどを活用し、外国人教員の積極的な雇用を行っている。令和元年から令和3年においては、3名の外国人教員を雇用し、教育研究の国際化を図った。
- 多様な学術的文化的背景をもった外国人研究者を毎年複数名、3～6ヶ月間、客員教授または客員准教授として招聘し、学生の教育・研究指導、国際交流(国際交流セミナー等)を通して、教育研究の国際性および本学局教員の研究活動の活性化を行っている。新型コロナのためやや減少したものの、令和2～令和6年で16名の客員教員を招聘した。

1.10 地域連携による教育活動

【基本的な記載事項】(特になし)

【評価対象期間に係る特記事項】

- 平成28年度から、一般向けの公開講座を京都大学オープンキャンパスの日程にあわせて開催している。新型コロナのため、令和2・令和3年度については録画したものをWebで公開したが、令和4・令和5年度については、オンラインと対面のハイブリッドで開催した。令和5年度には92名が会場に会場に、オンラインでの参加者も46名にのぼっている。令和6年度は対面のみで開催し、88名が会場に会場に。(【資料 7-1】公開講座開催状況)
- 高大・中大連携として、総合人間学部(高等学校や中学校の生徒の訪問を受け入れ、学部生との交流、模擬講義の提供、研究室の見学等を行ってきた。新型コロナの流行により一時期減少し、令和2年度にはわずか1件となったが、令和3年度には4件、令和4年度には15件、令和5年度には19件、受け入れを行い、順調に増えつつある。また、中高生を対象とした出張講義、オ

オンライン講義も積極的に行っており、令和2～令和6年度において、出張講義についてはそれぞれ、9件、8件、11件、17件、15件実施した。またオンライン講義については令和2～令和5年度において、それぞれ3件、5件、3件、2件実施した。〔【資料7-3】出張講義・訪問受入状況〕

1.11 教育の質の保証・向上

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本部局は全学共通教育の実施担当部局のひとつであり、全学共通教育の企画・実施組織である国際高等教育院と緊密に連携しながら、全学共通教育の質の向上に取り組んできた。令和元年度から、国際高等教育院と共催で、教養教育実践研究会を毎年実施してきた。新型コロナの時期もオンラインによって開催し、多数の教員が参加している。
- 在学生および修了生に対して授業評価アンケート調査を実施している。アンケート結果のうち特に教育の質の保証・向上につながる点については、教務委員会で確認したうえで、運営会議でその内容について議論し、研究科会議などで情報共有を行い、教員間で意見交換をしている。〔【資料2-13】総合人間学部 授業評価アンケート結果〕

1.12 学際的教育の推進

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 高い学際性を備えた人材を育成するため、文系または理系として受験した学生が、入学後に自由に専門を選択することができる。選択後は、専門的な学識を深める主専攻のみならず、他の専攻を一つ選択して必修とする制度（副専攻制度）を設けており、卒業時には学位記とは別に副専攻名を記した認定書が発行される。令和2～令和6年度の卒業時アンケートでは、副専攻に対して「得るものがあつた」とする回答は85.0～97.0%で、平均すると92.3%であり、本学部の理念のひとつである学際教育が実現していることが窺える。〔【資料2-14】総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 ⑤卒業生〕
- また、本学部では、他の学部と共同で授業を開講しているものもあり、他学部の学生との交流を通じて教育の学際性を高めることに寄与すると考えられる。さらに上述のとおり、他部局の教員にも協力教員として授業を担当していただくとともに、他学部で取得した単位を卒業要件単位に含めることができるようになっている。こうしたさまざまな工夫により、学際的な教育をさらに充実させるように努めている。
- 本部局には、学際教育を推進する組織として以前から学際教育研究部が存在したが、これを、令和5年度4月に、人間・環境学研究科の組織再編にあわせて、学術越境センターへと発展させた。センター化することにより併任教員だけでなく、令和6年度には2名のセンター専任教員が配置され、これまで以上に学際教育の充実を図ることができた。
- 学際教育研究部では、以前から学内外で開催されるシンポジウムなどの主催・共催・協賛などを行ってきた。新型コロナの流行が落ち着いた令和4年度は合計4件の共催・協賛を行っている。また、総合人間学部で令和3年度より必修化された「研究を他者に語る」の仕組みの構築および試行も学際教育研究部で行っている。なお、令和5年度からは、学術越境センターとして生まれ変わり、令和5年度には、学術講演会などを3件主催するとともに、国際シンポジウムや学会大会の共催・協賛などを4件行っている。令和6年度には、一般公開講演を3回行った。〔【資料4-2】附属学術越境センター・学際教育研究部の活動〕

分析項目 (1) 教育活動の状況 自己判定

〔自己判定〕

A 高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現していると判断できる。

学部の特徴である学際的教育を実質化するべく、「研究を他者に語る」を必修化し、「学際教育研究部」を「学術越境センター」に格上げし、「総人のミカタ」などを支援するなど、さまざまな努力を行ってきた。また、学生相談室やアドバイザー制度、各種の交流会などによって、学生の支援を積極的に行ってきた。令和6年度には、本学部の強みをさらに強化すべく、カリキュラム再編の具体的プランを策定済みで、実施を予定している

分析項目（２） 教育成果の状況

2.1 卒業率、資格取得等

【基本的な記載事項】

- 標準修業年限内卒業（修了）率
- 「標準修業年限×1.5」年内卒業（修了）率
- 留年率、退学率、休学率、卒業・修了者のうち標準修業年限内卒業・修了率、卒業・修了者のうち標準修業年限×1.5年以内での卒業・修了率、受験者数に対する資格取得率、卒業・修了者に対する資格取得率
 - ・【資料 2-4】留年・休学・退学の状況
 - ・【資料 2-5】修業年限内卒業率と「標準修業年限×1.5」年内卒業率

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和 2～令和 6 年度の標準修業年限×1.5 年以内での卒業率は、おおむね 90% 以上と高水準を維持している。標準修業年限内卒業率は、令和 2～令和 6 年度で 54.6%、74.8%、65.9%、63.8%、68.3% である。以上のとおり、年限内卒業率は増加傾向にあり、卒業率の改善に向けての取り組みである担任制やアドバイザー制度による個別指導、学生相談室の開設（平成 28 年度）、「人間・環境学フォーラム」における教員・学生交流会の開催などが貢献していると考えられる。
- 学部生による各賞受賞は令和 2～令和 6 年度で 15 件である。筆頭著者での学会発表件数は 11 件、論文発表件数は 8 件である。（【資料 4-8】学生の学会発表者数 【資料 4-9】学生の論文掲載数）
- 平成 28 年度より「研究を他者に語る」を試行的に実施し、令和 3 年度以降、全員必修としている。令和 6 年度に卒業した学生アンケートからも「有意義だった」とする回答が 70% を超えており、カリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーに沿った教育成果を得ている。（【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果）

2.2 就職、進学

【基本的な記載事項】

- 進学率、卒業・修了者に占める就職者の割合、職業別就職率、産業別就職率
 - ・【資料 2-6】卒業生の進路
 - ・【資料 2-7】就職状況
 - ・【資料 2-8】資格取得状況

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和 2～令和 6 年度では、大学院修士課程への進学率は 37.8%、41.7%、35.8%、36.8%、31.5% で、平均するとそのうち 65.3% が人間・環境学研究科に進学している。卒業者に占める就職者の割合は毎年 50% 程度で、就職先は、情報通信業、金融業、サービス業をはじめ幅広い業種に及んでおり、総合人間学部の学際性を反映している。

2.3 卒業時の学生からの意見聴取

【基本的な記載事項】

- 学生からの意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
 - ・【資料 2-14】総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 ⑤卒業生
 - ・【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和 2～令和 6 年度に実施した卒業時のアンケートでは、授業、卒業論文・研究において、「得るものがあつた」とする回答は毎年ほぼ 96% 以上であり、高い水準を維持している。（【資料 2-14】総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 ⑤卒業生）
- 令和 2～令和 6 年度に実施した卒業時のアンケートでは、本学部の理念である学際教育を目指す副専攻制度に対して、「得るものがあつた」とする回答はほぼ 92% 以上であり、高い水準で目的が実現されている。
- 「研究を他者に語る」を令和 3 年度以降の入学者について必修化しているが、令和 5 年度卒業生の 76.8%、令和 6 年度卒業生

の71.7%が、この制度について「有意義だった」と回答している。（【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果）

2.4 卒業生からの意見聴取

【基本的な記載事項】

- 卒業（修了）後、一定年限を経過した卒業（修了）生についての意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
- ・【資料 2-15】総合人間学部 卒業生（卒業後3年目）アンケート結果

【評価対象期間に係る特記事項】

- 卒業後3年経過した卒業生を対象とするアンケート調査を令和5年度に実施した（令和2年度卒業生対象）結果、在学中に培った「幅広い教養・知識」が役に立ったとする卒業生は87.1%であった。さらに80.6%が卒業論文・卒業研究を通して学んだことが役に立っていると評価しており、総合人間学部の特徴である副専攻制度については77.5%の卒業生が、令和6年度のアンケート調査では75.0%の卒業生が「得るものがあった」と回答している。（【資料 2-15】総合人間学部 卒業生（卒業後3年目）アンケート結果）

2.5 就職先等からの意見聴取

【基本的な記載事項】

- 就職先や進学先等の関係者への意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
- ・【資料 7-5】京都大学の卒業生と教育に係るアンケート実施結果（令和5年）より抜粋

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和5年度に京都大学本部によって実施された企業・官公庁等向けアンケート調査によると、総合人間学部の卒業生は、京都大学全体の卒業生・修了生にくらべて、以下の能力について特に高く評価されている。すなわち、「国際性、異文化理解力」、「企画力、創造性」、「課題解決力」、「思考力、判断力」、「責任感」、「多角的視点、広い視野」、「説明力」、「実行力」、である。これらの能力が十分に備わっていると回答が、京大全体の平均よりおおむね7～10%以上高くなっている。とりわけ「多角的視点、広い視野」については、15%近く平均より高くなっており、本学部の学際的教育が仕事などでも活かされていることがわかる。以上のことから、本学部のカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーが十全に実現していると判断される。（【資料 7-5】京都大学の卒業生と教育に係るアンケート実施結果（令和5年）より抜粋）

分析項目（2） 教育成果の状況 自己判定

〔自己判定〕

A 高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められると判断できる。

上述の取り組みにより、高い教育成果があがっていると判断される。この成果は、修業年限内卒業率が改善傾向にあること、また卒業先・進学先が広範な分野にわたっていること、などに示されている。さらには、卒業時アンケートおよび卒業後アンケート、さらには卒業生の就職先へのアンケート結果からも、教育成果が十分に上がっていると、満足度も高いと判断することができる。

【2】人間・環境学研究科 教育に関する状況

1. 人間・環境学研究科の教育目的と特徴

人間・環境学研究科は令和4年度まで、3専攻14講座の体制で教育を行ってきたが、令和5年4月に組織再編を行い、1専攻10講座の体制とした。これにより、学生はみずからの専門をより深めることができるようになるとともに、他の学問分野の教員・学生との交流も容易になり、学術上の「越境」がより活発化されることが期待される。

本研究科では、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の越境を通して、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、近い将来だけではなく遠い未来をも見据えた先駆的研究の推進、教育研究における国際連携の強化、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えた総合的な産学官連携に資する研究と教育によって、人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することを目的としている。本研究科から輩出される人物像としては、「大学教員として学際知を領域外の他者にわかりやすく伝達する人物」「人文・社会科学と自然科学の融合による新学術領域創成の要となる人物」「産業界、行政組織において学際的専門知と現場を架橋して社会課題の解決に貢献する人物」「海外の大学や国際組織において異なる文化圏・言語圏の人々に学際知を伝える人物」を想定し、高度な専門的能力と独創的な研究能力を備え、国際的にも活躍できる人材を育成していく。本研究科の特徴の一つに、「人間・環境学専攻」という1専攻のみからなる構成をとっていることがある。その目指すところは、学生が自律的に研究力を伸ばすことができる教育研究環境を整備するとともに、異なる分野の専門家と協働して問題を解決する学術越境経験を積ませることを通じて学術架橋力を備えた人物を育成すること、狭い専門分野に閉じることなく、自身の専門知を相対化することができる視野の広い学際知を備えた人物を養成すること、専門の枠にとらわれずに学知の本質を伝える力である教養知を養成することにある。本学の基本理念には、研究においては、「研究の自由と自主を基礎に、高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行う」「総合大学として、基礎研究と応用研究、文科系と理科系の研究の多様な発展と統合を図る」、教育においては、「多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる」「教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する」ことが謳われている。本研究科の教育目的はそれに呼応するものである。

本研究科の教育研究には、学内他部局の併任・流動・協力教員のほか、学外機関も参画している。外部に対してオープンな教育研究も本研究科の特徴の一つである。学内外の大学生や社会人に広く門戸を開くとともに、留学生を多く受け入れている。

なお、人間・環境学研究科は平成15年に京都大学総合人間学部と一体化され、人間・環境学研究科の教員は総合人間学部の学部教育・研究指導も行っている。

2. 教育の水準

分析項目(1) 教育活動の状況

1.1 学位授与方針

【基本的な記載事項】

- 公表された学位授与方針
 - ・京都大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/gakubu/di-policy>
 - ・人間・環境学研究科 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー（学位授与基準含む））
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/graduate/daigakuin/diploma/jinkan>
 - ・『令和6年度学生便覧』※ p2 ディプロマ・ポリシー

1.2 教育課程方針

【基本的な記載事項】

- 公表された教育課程方針
 - ・京都大学教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/gakubu/cu-policy>
 - ・人間・環境学研究科 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/graduate/daigakuin/dagakuin-cu/ningen-kankyou>
 - ・『令和6年度学生便覧』※ p1 カリキュラム・ポリシー

1.3 教育課程の編成、授業科目の内容

【基本的な記載事項】

- 体系性が確認できる資料
 - ・人間・環境学研究科 コースツリー
<https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/260jinkan-course-tree2023-6e967ab2a6e0672b0c4de6311439f6c7.pdf>
- 研究指導、学位論文（特定課題研究の成果を含む。）指導体制が確認できる資料
 - ・『令和6年度学生便覧』
 - ※ p17 「研究科規程 第4 授業 研究指導及び学修方法（第6条～第8条）」
 - p28 「公認心理師の資格取得について」
 - p29 「修了要件（1）修士課程」
 - p30 「修了要件（2）博士後期課程」
 - p32 「研究指導について」
 - p34 「人間・環境学研究科のカリキュラム」

【評価対象期間に係る特記事項】

- 研究科を横断して実施される「研究科横断型教育プログラム」に積極的に参画し（令和5年度は10プログラム、令和6年度は、6プログラム）、学際的、複合的な研究課題に対して、大学院生が本研究科の専門教育に加えて、広い視野を持ち、新しい学問領域を創造できるような研究能力（俯瞰力と独創力）を備えるための学修機会を整備した。毎年数名の学生がこれらのプログラムに参加している。（【資料4-14】京都大学学際融合教育研究推進センターにおける参画ユニット）
- 本研究科は、国立文化財機構 京都国立博物館および同 奈良文化財研究所から客員教員を招いており、学生の指導に当たってもらっている。また、京都大学の他の部局（地球環境学学・人文科学研究所・人と社会の未来研究院など）からの協力教員も数多く存在し、本研究科の専任教員だけでは担当できない分野についても科目を提供してもらうことで、より充実した教育・研究体制をとっている。
- 平成27年3月に制定された「京都大学研究公正推進アクションプラン」に基づき、論文執筆予定の修士課程および博士後期課程の学生に、全学共通科目（大学院共通科目）「研究倫理・研究公正」の受講あるいはチュートリアルの実施を義務づけていたが、

令和3年度以降の入学者については両方を義務付けている。また、令和5年度以降の入学者については、チュートリアルを単位化した。これにより人間・環境学研究科のすべての院生が、研究公正について深く学ぶ体制が整えられた。

- 平成30年度以降の入学者に対して、公認心理師の大学院カリキュラムを設置し、450時間の実習を含む、「大学院における必要な科目」(10科目)のすべての提供を開始した。これにより修了後に受験資格が得られることとなった。
- 本研究科では、他研究科で修得した単位も一定の範囲内で、修了単位として認めることができるようになっている。これにより、本研究科だけでは提供できない専門的な科目を履修できるとともに、他研究科の教員・院生と交流し、学び合うことができるようになっている。令和4年度には延べ123人の院生が他研究科の授業に参加している。【資料3-5】他研究科への聴講の状況
- 博士後期課程の学生の教育能力の向上を目指し、全学生に対して、全学共通教育科目の講義の一回分を担当する「教養教育実習」を行うか、あるいは「学際研究演習」を行うことを必修化している。「教養教育実習」は、教養教育に自負と責任感を持ち、初学者に対して学問の面白さをわかりやすく伝える能力または初学者に対して学知をわかりやすく伝える能力の向上を目的としている。また、「学際研究演習」は、初学者や一般の人々、あるいは他の研究領域の研究者に自らの研究内容をわかりやすく伝える能力の向上を目的とするものである。またこれらは令和5年度からは単位として認められるようになっている。なお、令和2年度修了者に対して令和5年度に行ったアンケート調査によると、修士課程修了者については、「人間・環境学研究科での学習により身に着いた、修了後に役に立った能力」として、「幅広い教養・知識」(100%)、「企画力・総合的思考力」(100%)、「たくましさ(問題解決能力)」(83.3%)をあげる学生が顕著に多かった。また博士後期課程修了者(認定退学者含む)に対するアンケート結果では、「専門的な知識と技術」(88.9%)、「幅広い教養・知識」(66.7%)、「企画力・総合的思考力」(55.6%)をあげる学生が多かった。以上の結果は、教養教育実習などの試みが実を結んでいる可能性を示している。【資料3-20】修士課程修了時アンケート結果
- 令和5年度の組織再編にともなって、令和5年度以降の修士課程入学者に対して「学術越境基礎」および「研究を他者と語る」を必修科目とした。「学術越境基礎」では、さまざまな分野の教員の講義を受けることで、人間・環境学研究科の全体像を知るとともに、さまざまな分野の知に触れることで自らの専門分野のあり方を問い直す機会となることを目指している。「研究を他者と語る」は修士2回生を対象とするものであり、自分自身の研究の内容について専門分野の異なる他の院生とディスカッションを行うことにより、分野を越えた対話の経験を通して学術越境に対する意識の涵養を図るものである。令和6年度から実際に実施をおこなっている。
- 学術越境センターは、学術越境プログラムへの申請の支援、学生に向けての学術越境に対する意欲の喚起を目的として、大学院授業科目として「学術越境研究計画1」(修士1回生向け)、「学術越境研究計画2」(修士2回生向け)を開講している。令和5年度は初年度であるため、修士1・2回生合同で授業を実施した。学術越境プログラムの紹介と演習、国際交流イベントの開催、修了生による講演、学術越境プログラムの説明会などを実施し、16名の受講者があった。令和6年度は学年ごとに分け、修士1回生に対して「学術越境研究計画1」、修士2回生に対して「学術越境研究計画2」を開講し、それぞれ10名、1名の受講者があった。令和6年度は授業内容の周知などの問題で受講者が減少したが、令和7年度はそれらを改善し、研究計画1は16名、研究計画2は8名の受講者となっている。研究計画1ではPhase1の申請に向けた活動、研究計画2ではPhase2の申請に向けた活動を中心に進めている。

1.4 授業形態、学習指導法

【基本的な記載事項】

- 1年間の授業を行う期間が確認できる資料
 - ・アカデミックカレンダー(標準)
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/calendar>
 - ・『令和6年度学生便覧』『令和6年度人間・環境学研究科学事日程』
- シラバスの全件、全項目が確認できる資料、学生便覧等関係資料
 - ・シラバス https://www.k.kyoto-u.ac.jp/external/open_syllabus/top

【評価対象期間に係る特記事項】

- 大学院生の教育・研究能力の向上などを目的として、人間・環境学研究科院生が自主的に平成29年度から開講している総合人学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」に対して、研究科として、講義計画の作成、講義室の提供等の支援をしている。本取り組みは、学部生、特に1・2回生に対して研究のロールモデルを提示することに留まらず、大学院生の教育能力の向上にも

大きく貢献している。(【資料 4-3】「総人のミカタ」講義リスト)

- 博士後期課程の学生の教育能力の向上を目指し、全学生に対して、全学共通教育科目の講義の一回分を担当する「教養教育実習」を行うか、あるいは「学際研究演習」を行うことを義務化している。「教養教育実習」は、教養教育に自負と責任感を持ち、初学者に対して学問の面白さをわかりやすく伝える能力または初学者に対して学知をわかりやすく伝える能力の向上を目的としている。また、「学際研究演習」は、初学者や一般の人々、あるいは他の研究領域の研究者に自らの研究内容をわかりやすく伝える能力の向上を目的とするものである。またこれらは、令和 5 年度以降、単位として認められるようになっている。なお、令和 2 年度修了者に対して令和 5 年度に行ったアンケート調査によると、修士課程修了者については、「人間・環境学研究科での学習により身に着いた、修了後に役に立った能力」として、「幅広い教養・知識」(100%)、「企画力・総合的思考力」(100%)、「たくましさ(問題解決能力)」(83.3%)をあげる学生が顕著に多かった。また博士後期課程修了者(認定退学者含む)に対するアンケート結果では、「専門的な知識と技術」(88.9%)、「幅広い教養・知識」(66.7%)、「企画力・総合的思考力」(55.6%)をあげる学生が多かった。以上の結果は、教養教育実習などの試みが実を結んでいる可能性を示している。(【資料 3-21】博士後期課程修了(認定退学)時アンケート結果)
- 「課題研究レポート様式」を見直し、修士課程、博士後期課程学生の研究指導および研究進捗状況をより詳細に把握できるようにした。さらに、課題研究レポート様式の内容をオンライン入力・閲覧できるシステムを構築した。単に学生がみずからの研究状況を記載するだけでなく、それに対して教員がコメントすることになっており、適切なフィードバックが実現できるよう工夫されている。(『令和 6 年度学生便覧』p32「VII. 研究指導について > (1) 課題研究レポートについて」)
- 平成 28 年度より物理学・化学・生物学・地球科学からなる多分野の教員が、同一の水域・地域を対象に自然科学的構造と動態を多面的・複合的に学ぶことを目的とする学際融合科目「総合フィールド特別演習」を提供している。本演習は、事前講義、フィールド実習(三重大学附属練習船勢水丸乗船実習・植物フィールド調査・地学巡検実習)、事後実習、総合討論からなり、他の大学等に例を見ない分野横断的な特色ある理系総合演習科目であり、参加学生からは高い評価を得てきた。令和 2～令和 4 年度は新型コロナのため中止されていたが、令和 5 年度からは再開されている。

1.5 履修指導、支援

【基本的な記載事項】

- 履修指導の実施状況が確認できる資料
- 学習相談の実施状況が確認できる資料
- 社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組が確認できる資料
- 履修上特別な支援を要する学生等に対する学習支援の状況が確認できる資料
 - ・『令和 6 年度学生便覧』※ p32「VII. 研究指導について」
 - ・【資料 4-1】履修指導について

【評価対象期間に係る特記事項】

- 人間・環境学研究科では、指導教員に加えて副指導教員をおき、研究指導の充実を図っている。また副指導教員とは別に、すべての学生が、自身が希望する教員をアドバイザーとして指名することになっている。学生はアドバイザーに対して、指導教員・副指導教員には相談しづらいことを相談したり、また研究以外の悩みなどについて気軽に話したりできるようになっており、研究科として、研究に限定されない幅広い学生支援体制を構築している。
- 平成 28 年度から、学業や進路、日常生活の悩みなどを幅広く相談できる場として、「学生相談室」を設け、臨床心理士を配置した。人間・環境学研究科の学生に対する対応件数は、令和 2 年度 50 件、令和 3 年度 43 件、令和 4 年度 48 件、令和 5 年度 60 件、令和 6 年度 53 件、となっており、学生からのニーズに対応できていると評価できる。さらに令和元年度からは臨床心理士の配置を週 2 日から 3 日とするとともに、英語およびフランス語で相談に対応できる特定准教授(1 名)(定員外)を配置した。なお、本特定准教授は、令和 5 年 10 月から本研究科の専任教員(定員内の准教授)なり、今後も継続的に英語およびフランス語による相談ができることとなった。(【資料 4-13】学生相談室の利用件数「主訴の内訳(大学院生)」)
- 本研究科では、研究科全体として、学術誌『人間・環境学』を発刊し、教員・院生に発表の場を提供している。当該雑誌の審査は、単なる査読に留まらず、複数の教員により論文の書き方や内容へのコメント、度重なる修正アドバイスなどの教育的査読が行われる。これにより学生の論文執筆に対する集団指導体制ともいえるサポートを行っている。また『人間・環境学』以外にも、特定の分野・領域に応じた学内紀要が複数発刊されている(『社会システム研究』、『人間存在論』、『あいだ／生成』、『文芸表象論集』、

『ドイツ文学研究』、『地域と環境』、『英文学評論』など)。これらの研究科内部の紀要に対しても多くの院生が投稿しており、貴重な研究発表および教育指導の場・機会となっている。また、これらの取り組みにより修了率の向上を図っている。(【資料 7-2】本研究科関係発行元による学術誌)

- 留学生担当の教員を配置し、留学生の相談や交流に関わるイベントを開催するだけでなく、留学生に対するチューターについても十分な数を配置し、留学生の学習・生活に関わる支援を行なっている。令和 5 年度前期では、留学生 29 名（学部生 4 名・大学院生 25 名）に対して、大学院生チューター 27 名（延べ人数）、後期では、留学生 33 名（学部生 5 名・大学院生 28 名）に対して、大学院生チューター 26 名（延べ人数）、令和 6 年度前期では、留学生 37 名（学部生 6 名・大学院生 31 名）に対して、大学院生チューター 37 名（延べ人数）が留学生への支援を行っている。
- 京都大学本部などからの案内のあった就職セミナーやインターンシップの案内などを、KULASIS や掲示板を利用して、学生に周知し、参加を促している。

1.6 成績評価

【基本的な記載事項】

- 成績評価基準
- 成績評価の分布表
- 学生からの成績評価に関する申立ての手続きや学生への周知等が明示されている資料
 - ・『令和 6 年度学生便覧』※ p31 「III. 成績評価基準」、p33 「IX. 成績確認」

【評価対象期間に係る特記事項】

- 成績評価の基準をより厳密に定めた。本研究科の成績（修士論文の成績も含む）は、問題把握の的確性・概念理解の的確性・必要十分な知識・問題解決の企画力・着想の独創性・判断的思考力・論述の論理性・使用言語の運用能力・持続的努力・課題の達成度、の各基準に従って、優・良・可・不可で判定されている。
- 成績分布につき可視化を進めるため、成績分布表が作成され、大学院教務委員会に報告され情報共有・改善が促されている。

1.7 修了判定

【基本的な記載事項】

- 卒業又は修了の要件を定めた規定
- 卒業又は修了判定に関する教授会等の審議及び学長など組織的な関わり方を含めて卒業（修了）判定の手順が確認できる資料
- 学位論文の審査に係る手続き及び評価の基準
- 修了判定に関する教授会等の審議及び学長など組織的な関わり方が確認できる資料
- 学位論文の審査体制、審査員の選考方法が確認できる資料
 - ・『令和 6 年度学生便覧』※ p1 「研究科規程第 6 論文審査及び課程修了の認定等」第 11 条～第 14 条、p34 「成績確認」

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本研究科では、修士論文・博士論文ともに、すべて公聴会を行うこととなっており、公開の場で主査および副査からの質疑に応えることになっている。これにより審査の公開性・厳格性が担保されている。
- 博士学位申請に関わる公聴会の開催、および博士論文としての適切性の審査は主として調査委員会が行うこととなっている。その後、考査委員会が、調査委員会が適切に調査を行ったかをチェックし、検討することとなっている。
- 博士学位申請を研究科会議に附議する前に、それぞれの学問分野に即して、博士審査開始に相応の最低要件を満たしているかどうかについて運営会議メンバーによって確認する仕組みを構築している。
- 博士論文の調査結果報告書に、全学共通科目「研究倫理・研究公正」の受講年度あるいはチュートリアルを実施した日付とチューター名の記載を義務づけ、記載のない報告書は受理しないこととしている。また、令和 4 年度より、博士学位論文については iThenticate によるチェックを義務付けている。
- 「博士学位論文の審査要項」を改定し、令和 4 年度以降は博士論文の調査委員会に必ずひとり他研究科または他大学の教授をくわえることを義務付けた。これにより、さらに厳正な審査が行われるようになった。

1.8 学生の受入

【基本的な記載事項】

- 学生受入方針が確認できる資料
- 入学定員充足率
- 女性学生の割合、社会人学生の割合、留学生の割合、受験者倍率)、入学定員充足率
 - ・【資料 1-1-④】人間・環境学研究科 アドミッション・ポリシー (入学者受入れの方針)
 - ・【資料 3-2】入学状況

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本研究科の入試は年 2 回 (9 月、2 月) 行われるため、年 2 回 (4 月、10 月) 入試説明会を開催している。令和 2 年度以降は、新型コロナのため、また海外からの参加も可能にするため、オンラインで開催されているが、毎回多数の参加者がある。過去問についても、要望に応じて PDF ファイルを送るようにしている。これらの取り組みによって、修士課程ならびに博士後期課程の学生定員がほぼ充足されている。
- 平成 29 年度入試より、修士課程入試 1 次試験の試験科目数を減らし、専門科目試験に重点をおいた試験内容に変更した。また、アドミッション・ポリシーに基づき受験者の適性を様々な角度から見極めるため、複数教員による口頭試問の時間を増やした。さらに、第 2 外国語を必要としない講座では記述式の英語試験にかえて、外部試験のスコアを提出できることとした。なお、新型コロナの影響を勘案し、令和 2 年度および令和 3 年度に実施した入試についてのみ、外部試験の利用は中止したが、令和 4 年度実施の入試より、以前と同様に外部試験が利用できるようになっている。
- 社会人の博士後期課程入学希望者に対しては、所属先における勤務条件や通学に要する時間等を考慮し、入試合格後の準備に必要な期間を十分に確保するため、平成 30 年 9 月から博士後期課程編入学生特別選抜制度を開始した。この制度により、平成 28～令和元年度のあいだに合計 66 名の社会人が博士後期課程に入学したのに対して、令和 2～令和 6 年度には合計 102 名の社会人が博士後期課程に入学した。
- 社会からの要請に配慮して、大学を卒業した者 (卒業見込みの者を含む) 及びこれと同等以上の学力を有すると認められる者を対象に、ひろく研究生を受け入れている。人数は、前後期あわせて、令和 2 年度 67 名 (うち留学生 64 名)、令和 3 年度 66 名 (うち留学生 53 名)、令和 4 年度 76 名 (うち留学生 65 名)、令和 5 年度 84 名 (うち留学生 65 名)、令和 6 年度 73 名 (うち留学生 66 名) となっており、これらの研究生のなかから大学院に進学している者も多く、留学生の受入の拡大ならびに大学院定員充足に寄与している。
- 新型コロナが深刻な状況となり、海外から日本に入国できない受験生に対して、令和 2 年度、令和 3 年度、令和 4 年度に実施した入試においては、慎重な配慮を行ったうえでオンライン入試を行った。また、同期間中に実施された入試においては、新型コロナに感染した受験生については追試を認めることとした。

1.9 教育の国際性

【基本的な記載事項】

- 協定等に基づく留学期間別日本人留学生数 (【資料 3-17】日本人学生の留学状況)
- 留学生の割合 (【資料 3-1】学生数の推移)

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本研究科では積極的に留学生を受け入れてきた。新型コロナが流行していた時期も含めて、修士課程院生、博士後期課程院生、研究生・特別研究生すべてをあわせて、令和 2～令和 6 年度のあいだに、それぞれ 184 名、172 名、188 名、195 名、203 名と多くの留学生を受け入れている。
- 本学の国際化を目的とした「グローバル化に対応した教学マネジメントのための組織改革」プログラムを活用し、積極的に外国人教員の雇用を行っている。令和元年から令和 3 年においては、3 名の外国人教員を雇用し、教育研究の国際化を図った。
- 多様な学術的文化的背景をもった外国人研究者を毎年複数名、3～6 ヶ月間、客員教授または客員准教授として招聘し、学生の教育・研究指導、国際交流 (国際交流セミナー等) を通して、教育研究の国際性および本局教員の研究活動の活性化を行っている。新型コロナにより令和 2 年度は 1 名だったものの、令和 3 年度には 2 名、令和 4 年度には 5 名、令和 5 年度には 3 名、令和 6 年度には 5 名を招聘している。

- 学際教育研究部国際化推進部門主催で、令和3年度に「国際的研究のためのワークショップ」、「国際会議でのプレゼンテーションに関するオンライン・ワークショップ」、令和4年度には「国際的研究に関する講演会」を開催した。若手研究者が海外で研究を行うための知識やノウハウ、心構えなどが実践的に教えられるとともに、参加者のあいだで活発に情報交換・議論がなされた。いずれも10～15名程度の教員・院生が参加している。（【資料4-1】学際教育研究部の活動）

1.10 地域連携による教育活動

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 平成28年度から、一般向けの公開講座を、京都大学オープンキャンパスの日程にあわせて開催している。令和2年度と令和3年度については録画したものをWebで公開し、令和4年・令和5年度については、オンラインと対面のハイブリッドで開催した。令和5年度には92名が会場に会場に、オンラインでの参加者も46名にのぼっている。令和6年度は対面のみで開催し、88名が会場に会場に。 （【資料7-1】公開講座開催状況）
- 本学の高大連携事業「学びのコーディネーターによる出前授業・オープン授業」では、本研究科学生あるいはポスドクが積極的に高等学校などに前出前授業を行っており、令和4、5年度は、それぞれ8件、令和6年度には7件の実績がある。（【資料7-4】学びコーディネーターによる出前授業）
- 本研究科技術部では、令和2～令和5年度のあいだに、「子どもたちの知的好奇心をくすぐる体験授業」事業（京都府教育委員会）において、高等学校（一部中学校）での出前授業や実験指導を延べ10回行った。また、同期間中に、本学理学部が実施している「関東SSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定7女子高校等研究交流会」に講師を派遣し、実験指導を行った（延べ3回）。（【資料7-3】出張講義・訪問受入状況）

1.11 教育の質の保証・向上

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 在学生および修了生に対して授業評価アンケート調査を実施している。アンケート結果のうち特に教育の質の保証・向上につながる点については教務委員会が確認し、運営会議に報告がなされ、そこで議論されたうえで、研究科会議などで情報共有を行い、教員間で意見交換している。（【資料3-18】人間・環境学研究科 授業評価アンケート結果）
- 本研究科では倫理審査委員会を設置しており、倫理上問題がありうる調査研究に関して、審査を行う体制が整えられている。この結果、学生の研究についても、十分な倫理審査が行われるようになっている。

1.12 学際的教育の推進

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本研究科では、国立文化財機構 京都国立博物館および同 奈良文化財研究所および京都大学内の他部局から、多くの客員・協力教員を招き、科目の担当、学生の指導などを依頼している。その結果、学生は本研究科以外の研究者から指導を受けたり、異なった専門の研究者や学生と議論したりする貴重な機会がつけられている。
- 令和5年度に、人間・環境学研究科の再編とともに、学際教育ならびに学際研究を推進する「学際教育研究部」を「学術越境センター」へと発展させた。現在、センター長および、13名の併任教員、2名の若手重点戦略定員の教員がメンバーとなっているが、令和6年度にはこれらに加えて、センター専任の教員を2名配置した。
- 令和4年度まで、学際教育研究部では、学内外で開催されるシンポジウムなどの主催・共催・協賛を行ってきた。新型コロナが落ち着いた令和4年度は合計3件の共催・協賛を行っている。なお、学際教育研究部は、令和5年度から学術越境センターに衣替えしたが、これまでと同様に、学術講演会などを2件主催するとともに、国際シンポジウムや学会大会の共催・協賛を6件行った。令和6年度には一般講演会を3回行った。
- 学際教育研究部では、平成29年度から人間・環境学研究科の大学院生が自主的に開講している学部生向け模擬講義企画「縦

人のミカタ」に対して、講義室の提供等の支援を行い、多岐にわたる学問分野の学生が共同で行う自主的教育活動の促進を図ってきた。令和5年に学際教育研究部が学術越境センターになってからも引き続き協力・支援を行っている。

- 学術越境センターは、令和5年度から、学術越境プログラムを実施している。これは、Phase1とPhase2にわかれており、前者は主に修士課程の学生向け、後者は主に博士後期課程の学生向けのプログラムである。Phase1として、具体的には、修士課程院生向けの短期インターン、国際交流、分野横断共同研究など、本格的な学術越境活動の準備作業を支援するプログラムを実施した。令和5年度は修士1・2回生を対象として8月末メ切で募集を行い、応募者は13名であった。10名程度の採択者を想定していたが、審査の結果、応募者全員に対して総額2,737,660円の支援を行った。Phase2は、博士後期課程院生向けの本格的な学術越境活動の計画に対する本格的な支援プログラムであり、3年間で合計150万円の研究支援に加え、学術越境センター教員と指導教員による指導チームの構築による研究支援を行うものである。修士2回生を対象に9月末メ切で募集を行い、応募者は9名であった。学術越境センター教員による審査を経て4名を採択者として選抜した。令和5年度は、採択者に対して、令和6年度に向けて、指導チームの編成や研究支援を行っているところである。令和6年度には令和5年度に採択された4名がPhase2の研究を本格的に開始するとともに、Phase1、Phase2それぞれ令和5年度と類似の要領で募集を行った。Phase1については対象を修士1回生に限定して、募集を行い、応募者は10名であった。審査を経て、応募者全員に対して総額2,891,140円の支援を行った。Phase2については応募者は5名で審査を経て4名を採択者として選抜した。
- 学術越境センターは、学術越境プログラムへの申請の支援、学生に向けての学術越境に対する意欲の喚起を目的として、大学院授業科目として「学術越境研究計画1」（修士1回生向け）、「学術越境研究計画2」（修士2回生向け）を開講している。令和5年度は初年度であるため、修士1・2回生合同で授業を実施した。学術越境プログラムの紹介と演習、国際交流イベントの開催、修了生による講演、学術越境プログラムの説明会などを実施し、16名の受講者があった。令和6年度は学年ごとに分け、修士1回生に対して「学術越境研究計画1」、修士2回生に対して「学術越境研究計画2」を開講し、それぞれ10名、1名の受講者があった。令和6年度は授業内容の周知などの問題で受講者が減少したが、令和7年度はそれらを改善し、研究計画1は16名、研究計画2は8名の受講者となっている。研究計画1ではPhase1の申請に向けた活動、研究計画2ではPhase2の申請に向けた活動を中心に進めている。
- 学術越境センターでは、人間・環境学研究科構成員による学術越境研究活動を促進するために人間・環境学研究科教員が推進する学術越境プロジェクトを支援している。令和5年度は、5つの学術越境プロジェクトを立ち上げた。学術越境プロジェクトはそれぞれの研究活動を推進するとともに、「学術越境研究計画」の授業におけるプロジェクト紹介などを通して、大学院生への参加を促す活動を行った。令和6年度は1つのプロジェクトが教員の都合で中止となり、4つのプロジェクトを推進した。また、プロジェクトと並行して、学術越境研究への継続的な参加を必要とはしない、フィールド体験実習としてField Encounterというプログラムを立ち上げ、京都大学芦生研究林、尼崎市立歴史博物館への体験実習を行った。
- 令和5年度の組織再編にともなって、令和5年度以降の修士課程入学者については、「学術越境基礎」および「研究を他者と語る」を必修科目とした。「学術越境基礎」では、さまざまな分野の教員の講義を受けることで、人間・環境学研究科の全体像を知るとともに、さまざまな分野の知に触れることで、自らの専門分野のあり方を問い直す機会となることを目指している。「研究を他者と語る」は、修士2回生を対象として、自身の専門研究の内容を専門分野の異なる他の院生とディスカッションを行うことにより分野を越えた対話の経験を通して学術越境に対する意識の涵養を目的とするものである。令和6年度は第1回の「研究を他者と語る」を実施した。修士2回生学生を専門の異なる5～6人のグループに編成し、自身の研究の報告と、他者の研究報告を組み合わせた3時間程度のグループディスカッションを行った。自身の研究報告により、自らの専門研究を専門の異なる他者にわかりやすく伝えるための演習と、専門の異なる他の学生の発表に対して指定討論者としてディスカッションをリードする経験を通して、専門の異なる他者の研究を理解するための演習を行った。また、グループディスカッションを博士後期課程院生がオーガナイズすることにより、博士後期課程院生にとっての教育機会となるような工夫も行った。

1.13 リカレント教育の推進

【基本的な記載事項】

- リカレント教育の推進に寄与するプログラムが公開されている刊行物、ウェブサイト等の該当箇所
- 社会人学生の割合、正規課程学生に対する科目等履修生等の割合
 - ・【資料3-1】学生数の推移

【評価対象期間に係る特記事項】

- 社会人の博士後期課程入学希望者に対しては、所属先における勤務条件や通学に要する時間等を考慮し、入試合格後の準備に必要な期間を十分に確保してもらうため、平成30年9月から特別な入試「博士後期課程編入学生特別選抜制度」を開始した。この制度により、平成28～令和元年のあいだに合計66名の社会人が博士後期課程に入学したのに対して、令和2～令和6年度には合計102名の社会人が博士後期課程に入学した。
- 本研究科では、学界、官界、業界の各分野において研究に従事し、これまでに十分な研究業績を有する者については、最短修業年限を1年で博士学位を取得できる課程博士Bの制度を整えており、これまでこの制度にもとづき博士学位を取得した学生が2名いる。

分析項目（1） 教育活動の状況 自己判定

〔自己判定〕

A 高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現していると判断できる。

令和5年度に組織再編を行うにあたって、これまで行われてきたさまざまな制度や取り組みについて、さらなる改善・強化を行うことができた。たとえば、博士後期課程の院生に対して、教養教育実習あるいは学際研究演習を必修化するとともに、令和5年度からはこれらを単位化し、より実のあるものにした。また、博士学位申請の調査にあたっては、剽窃チェックツール（iThenticate）の使用を義務付けるとともに、必ず他部局または他大学の教授を調査委員に含めることを義務付けるなど、審査の公平性・厳格性をより高いレベルで実現してきた。また、本研究科の特色である学際性についても、「学術越境基礎」、「研究を他者と語る」、「学術越境研究計画」などの科目を設けることで、その実質化を図っている。こうした学際的な教育を推進すべく、令和5年度からは学際教育研究部を学術越境センターに発展させ、これまで以上に学際教育・学際研究の推進が行われる体制を整えることができた。

分析項目 (2) 教育成果の状況

2.1 修了率、資格取得等

【基本的な記載事項】

- 標準修業年限内卒業（修了）率
- 「標準修業年限×1.5」年内卒業（修了）率（別添資料 5220-ii1-1）
- 博士の学位授与数（課程博士のみ）
- 留年率、退学率、休学率、卒業・修了者のうち標準修業年限内卒業・修了率、卒業・修了者のうち標準修業年限×1.5年以内での卒業・修了率、受験者数に対する資格取得率、卒業・修了者に対する資格取得率
 - ・【資料 3-4】留年・休学・退学の状況
 - ・【資料 3-11】博士後期課程 標準修業年限内修了率と「標準修業年限×1.5」年内修了率

【評価対象期間に係る特記事項】

- 人間・環境学研究所の院生の学会発表数は令和2～令和6年度に、国内会議について、それぞれの年度で、111件、134件、142件、151件、139件となっている。また同期間中の国際会議における学生の発表は、各年度で、17件、33件、24件、50件、39件となっている。また論文掲載数は455件を数える。新型コロナのため一時期減少したものの、順調に数を増やしている。（【資料 4-8】学生の学会発表者数、【資料 4-9】学生の論文掲載数）
- 日本学術振興会特別研究員として、令和2～令和6年度のあいだに、DC1が合計25名、DC2が合計39名、採用された。（【資料 3-15】日本学術振興会特別研究員の採用・受入状況）
- 多くの修士課程学生、博士後期課程学生および修了生（修了後5年以内）が、専門分野の学会奨励賞をはじめ、国内外の学術賞等を数多く受賞している（令和2～令和6年度で116件）。平成28～令和元年度のあいだの受賞が40件であったのと比較すると、研究科の教育がより充実したものになっていると考えられる。（【資料 4-12】学生・修了生の受賞状況）
- 若手研究者による研究成果の学術出版を推進するために、平成22年度より始まった学内の支援制度である「総長裁量 若手研究者に係る出版助成事業」を活用して、博士後期課程学生を中心とした出版助成を行ってきた。令和元年度からは経費不足分を研究科長裁量経費で補填し、学生ニーズに応じている。また令和4年度からは、「人と社会の未来研究院若手出版助成制度」が実施されることとなり、それにもとづいて出版助成を継続している。今までに出版した学術書は156冊に及び、このうち令和2～令和6年度に出版した40冊のなかには各種学術賞を受賞したものが1冊ある。また、平成30年度に出版助成を受けた学術書で、令和2年度に学会賞を受賞したものが2冊ある。（【資料 4-11】若手研究者出版助成による刊行物）
- 平成30年度以降の入学者に対して、公認心理師の大学院カリキュラムを設置し、450時間の実習を含む、「大学院における必要な科目」（10科目）のすべてを提供している。これにより、修了後に受験資格が得られることとなった。その結果、令和元年までは公認心理師の資格取得者はいなかったのに対して、令和2年度は2名、令和3年度は6名、令和4年度は1名、令和5年度は3名が、実際に資格を取得することができた。

2.2 就職、進学

【基本的な記載事項】

- 進学率、卒業・修了者に占める就職者の割合、職業別就職率、産業別就職率
 - ・【資料 3-8】修士課程修了者の進路
 - ・【資料 3-12】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路
 - ・【資料 3-9】修士課程修了者の就職状況
 - ・【資料 3-13】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の就職状況
 - ・【資料 3-14】教員免許状資格取得状況

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和2～令和6年度の修士課程修了者の進学率（他研究科への進学を含む）は、各年度それぞれ、33.8%、26.4%、30.6%、33.6%、33.4%である。就職率は、各年度で、52.6%、60.4%、54.5%、49.7%、61.1%である。就職先は「製造業」、「情報通信業」、「教育、学習支援業」「学術研究、専門・技術サービス業」などが上位を占めるが、本研究科の学際性・総合性を反映して、さま

ざまな業種に就職している。

- 博士後期課程では、令和2～令和6年度の就職率はそれぞれ、69.9%、66.0%、70.0%、58.4%、73.2%である。就職先は「教育、学習支援業」が主であり、令和2～令和6年度において、大学・大学院、高校・高専などの教育機関への就職率は、それぞれ45.1%、39.4%、48.6%、40.0%、39.0%、研究者となった者は35.3%、30.3%、42.9%、31.1%、22.0%、となっている。

2.3 修了時の学生からの意見聴取

【基本的な記載事項】

- 学生からの意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
 - ・【資料3-20】修士課程修了時アンケート結果
 - ・【資料3-21】博士後期課程修了（認定退学）時アンケート結果

【評価対象期間に係る特記事項】

- 修士課程修了時アンケート（令和2～令和6年度）の結果によると「修士課程での学業の成果」について「成果があがった」という回答はおおむね77%～86%であった。また学生の満足度に関する質問、「修士課程は有意義であったか」および「修士課程での学業・経験は進学先・就職先で役立つか」には、肯定的な回答がそれぞれおおむね92%、81%であった。また、同期間における「カリキュラム・教育」、「研究環境」に関する満足度については、肯定的な回答がそれぞれ68～84%、76～87%であった。

2.4 修了生からの意見聴取

【基本的な記載事項】

- 卒業（修了）後、一定年限を経過した卒業（修了）生についての意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
 - ・【資料3-22】修士課程修了生（修了後3年目）アンケート結果

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本研究科では、修了後3年たった時点で、修了生に対してアンケート調査を行っている。令和2年度修了者に対するアンケート調査の結果によると、修士課程修了者については、「人間・環境学研究科での学習により身に着いた、修了後に役に立った能力」として、「幅広い教養・知識」（100%）、「企画力・創造的思考力」（100%）、「たくましさ（問題解決力）」（83.3%）をあげる学生が顕著に多かった。同じ質問に対する、平成30年度と令和元年度の修了者に対する3年後アンケートの平均値は、それぞれ、54.8%、42.1%、61.9%であり、大幅な改善がなされていることがわかる。
- これに対して博士後期課程修了者（認定退学者含む）に対するアンケート結果では、「専門的な知識と技術」（88.9%）、「幅広い教養・知識」（66.7%）、「企画力・創造的思考力」（55.6%）をあげる学生が多かった。同じ質問について、平成30年および令和元年の博士後期課程修了者の平均値は、それぞれ83.4%、59.5%、40.0%であり、改善傾向にあることがわかる。
- また、修士課程修了者に対するアンケートにおいて、「修士論文に関わる研究、およびそれに伴う勉学は現在役立っていますか」との問いに、すべての回答者が役に立っていると答えている。
- 博士後期課程修了者に対する同様の質問に対しては、すべての回答者が「非常に役に立っている」と答えている。以上のアンケート結果から、本研究科の目的にかなった修了生を社会に送り出していることが確認された。

2.5 就職先等からの意見聴取

【基本的な記載事項】

- 就職先や進学先等の関係者への意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
 - ・【資料7-5】京都大学の卒業生と教育に係るアンケート実施結果（令和5年）より抜粋

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和5年度に京都大学本部によって実施された企業・官公庁等向けアンケート調査によると、人間・環境学研究科の修了生は、京都大学全体の卒業生・修了生にくらべて、以下の能力について特に高く評価されている。まず、「協調性、コミュニケーション能力」、「リーダーシップ」、「倫理観」、「責任感」が平均以上に高く評価されており、本研究科の教育が社会のリーダーとなるべき人材育成に大きく貢献していると判断される。また、「英語運用能力（文章読解、記述）」、「英語運用能力（会話）」、「国際性、

異文化理解力」についても、全学平均より高い水準にあり、グローバル人材の育成にもつながっていることがわかる。さらに「専門知識とその活用能力」についても、平均より 10% 以上高く、十分な教育がなされていることが窺われる。これらのことから、本研究科のカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーが十全に実現していると判断される。

分析項目（2） 教育成果の状況 自己判定

〔自己判定〕

A 高い質にある

〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められると判断できる。

多くの院生が学会発表や論文の投稿を積極的に行っており、しかもその質が高いことは各賞の受賞件数の多さからも推測される。また、修了時のアンケート、修了後のアンケートからも、本研科のディプロマ・ポリシーが十分に実現していると判断できる。さらに、京都大学が実施した就職先へのアンケート調査からも、本研究科の修了生が高く評価されていると判断される。以上のことから、教育成果は十分にあがっており、その質も高いと判断される。

【3】人間・環境学研究科 研究活動に関する状況

1. 総合人間学部・人間・環境学研究科の研究目的と特徴

本研究科は、令和4年度まで3専攻（共生人間学専攻、共生文明学専攻、相関環境学専攻）からなっていたが、令和5年度に組織再編を行い、3専攻を1専攻に統合することで、各自の専門を深めつつ他の分野にも積極的に学術越境できるような研究体制を整えた。

本研究科では、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の越境を通して、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、近い将来だけでなく遠い未来をも見据えた先駆的研究の推進、教育研究における国際連携の強化、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えた総合的な産学官連携に資する研究と教育によって、人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することを目的としている。本研究科から輩出される人物像としては、「大学教員として学際知を領域外の他者にわかりやすく伝達する人物」「人文・社会科学と自然科学の融合による新学術領域創成の要となる人物」「産業界、行政組織において学際的専門知と現場を架橋して社会課題の解決に貢献する人物」「海外の大学や国際組織において異なる文化圏・言語圏の人々に学際知を伝える人物」を想定し、高度な専門的能力と独創的な研究能力を備え、国際的にも活躍できる人材を育成していく。本研究科の特徴の一つに、「人間・環境学専攻」という1専攻のみからなる構成をとっていることがある。その目指すところは、学生が自律的に研究力を伸ばすことができる教育研究環境を整備するとともに、異なる分野の専門家と協働して問題を解決する学術越境経験を積ませることを通じて学術架橋力を備えた人物を育成すること、狭い専門分野に閉じることなく、自身の専門知を相対化することができる視野の広い学際知を備えた人物を養成すること、専門の枠にとらわれずに学知の本質を伝える力である教養知を養成することにある。本学の基本理念には、研究においては、「研究の自由と自主を基礎に、高い倫理性を備えた研究活動により、世界的に卓越した知の創造を行う」「総合大学として、基礎研究と応用研究、文科系と理科系の研究の多様な発展と統合を図る」、教育においては、「多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる」「教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する」ことが謳われている。本研究科の教育目的はそれに呼応するものである。

また広範かつ多様な研究分野の専門家からなる本研究科の特性を活かして、研究活動の活性化を図るために、平成20年度に部局内組織として設置した学際教育研究部を令和5年度にセンター化し、学術越境センターとした。

2. 研究活動の水準

分析項目(1) 研究活動の状況

1.1 研究の実施体制及び支援・推進体制

【基本的な記載事項】

- 教員・研究員等の人数が確認できる資料
- 本務教員の年齢構成が確認できる資料
- 本務教員当たりの研究員数

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和5年度には10件、令和6年度には6件の研究科横断型研究教育ユニットに参画しており、広く分野横断的な学際的研究を行う研究ネットワークを形成し、研究の活性化を図っている。〔資料4-14〕京都大学学際融合教育研究推進センターにおける参画ユニット)
- 令和2～令和6年度において特定教員(助教(4名)、講師(1名)、准教授(3名)、教授(1名))を採用し、研究実施体制を整備してきた。
- 京都大学の「白眉プロジェクト」の研究者を積極的に受け入れてきた。令和2～令和6年度のあいだに、計3名を受け入れた。
- 日本学術振興会特別研究員の受入(令和2～令和6年度において74名)を行い、研究実施体制の充実を図っている。〔資料3-15〕日本学術振興会特別研究員の受入状況)
- 受託・共同研究員および博士研究員を積極的に受け入れ、研究実施体制を整備してきた(令和2～令和4年で8名)。〔資料4-7〕競争的研究費等受入状況 ③【共同研究】④【受託研究】)
- 文学研究科ならびに人文科学研究所とともに、博士の学位を有する者またはそれと同等以上の卓越した研究能力を有するものを「京都大学人文学連携研究者」として採用する人材育成および研究支援体制を整備した。人文学連携研究者には、研究を遂行するために必要な施設、図書、設備の利用を許可し、研究費の配分などに便宜を図っている。本体制整備は、京都大学における人文学(社会学・心理学も含む)研究の一層の深化・国際化を推進し、さらに先端学術領域との連携も進展させ、世界に向けて発信する「人文知の未来形発信」に寄与し得る基盤形成を図ることを目的にしている。令和2年度に1名、令和3年度に4名、令和4年度に5名、令和5年度に4名、令和6年度に4名を採用している。
- 学際・複合分野連携の教育と研究を意欲と責任感をもって円滑かつ確に行うことを目的として、若手重点戦略定員などを活用し(令和2～令和6年度に6名採用)、研究体制の充実を図った。
- 令和5年度より学術越境センターをたちあげ、人間・環境学研究科構成員による学術越境研究活動を促進するために人間・環境学研究科教員が推進する学術越境プロジェクトを支援している。令和5年度は、5つの学術越境プロジェクトを立ち上げた。令和6年度は1つのプロジェクトが教員の都合で中止となり、4つのプロジェクトを推進した。また、プロジェクトと並行して、学術越境研究への継続的な参加を必要とはしない、フィールド体験実習としてField Encounterというプログラムを立ち上げ、京都大学芦生研究林、尼崎市立歴史博物館への体験実習を行った。

1.2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上

【基本的な記載事項】

- 構成員への法令遵守や研究者倫理等に関する施策の状況が確認できる資料
- 研究活動を検証する組織、検証の方法が確認できる資料
- 博士の学位授与数(課程博士のみ)

【評価対象期間に係る特記事項】

- 世界に向けて発信する「人文知の未来形発信」に寄与し得る基盤の形成を目的に、文学研究科ならびに人文科学研究所とともに、博士の学位を有する者またはそれと同等以上の卓越した研究能力を有するものを「京都大学人文学連携研究者」として受け入れる人材育成および研究支援体制を整備した。人文学連携研究者には、研究を遂行するために必要な施設、図書、設備の利用を許可し、研究費の配分などに便宜を図っている。本体制整備は、京都大学における人文学(社会学・心理学も含む)研究の一層の深化・国際化を推進し、さらに先端学術領域との連携も進展させるものと期待されている。令和2年度に1名、令和3年度に4名、

令和4年度に5名、令和5年度に4名、令和6年度に4名を採用し、若手研究者の確保・育成を行っている。(人間・環境学研究科人文学連携研究者 https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic/young_researcher/collaborative_researcher/)

- 令和2～令和5年度に、さまざまな制度を用いて、40歳未満の若手研究者を積極的に雇用してきた(計13名)。その結果、平成28年度から令和元年度までの40歳未満の教員比率が11.1%であったのに対し、令和2年度から令和6年度の同比率は12.1%に上昇した。
- 学際教育ならびに学際研究を推進するための組織として平成20年度に設置した「学際教育研究部」をさらに充実させるべく、令和5年度にセンター化し、学術越境センターへと衣替えをし、特色ある教育研究の推進、学際的教育研究の促進を行っている。令和5年度には、実際に学術越境を実現するための5つの学術越境プロジェクトを新たに立ち上げた。いずれも同一講座内の教員同士の共同研究にとどまらず、異なった講座の教員や、サントリーなどの民間企業、また南三陸町サステナビリティセンターのようなNPOとの連携をおこなうものであり、学術越境のための研究を実際に推進してきた。令和6年度は1つのプロジェクトが教員の都合で中止となり、4つのプロジェクトを推進した。また、プロジェクトと並行して、学術越境研究への継続的な参加を必要としない、フィールド体験実習としてField Encounterというプログラムを立ち上げ、京都大学芦生研究林、尼崎市立歴史博物館への体験実習を行った。
- 人間・環境学研究科の教員が併任することによって運営してきた学際教育研究部に、平成29年度より専任の若手特定助教1名、令和元年度より若手重点戦略定員による講師1名を配置した。その後、学術越境センターの立ち上げにともない、令和6年度には2名の専任教員を雇用した。以上により学際教育研究を担う若手研究者の確保・育成を行っている。
- 学際教育研究部の活動として、研究者招聘費用の補助、会場経費の補助などシンポジウム等の開催支援を行ってきた。新型コロナによりその数は減少したが、流行が落ち着いた令和4年度は合計4件の共催・協賛を行っている。なお、令和5年度からは、学術越境センターとして生まれ変わり、学術講演会などを3件主催するとともに、国際シンポジウムや学会大会の共催・協賛を4件行っている。令和6年度には主催事業を3件(人環卒業生による講演会(1件)、大学院科目「学術越境研究計画」の一般公開(2件))、共催事業を1件(「学術越境による社会実装をめざした企業の心理学研究」と題した企業の心理学研究発表)の主催・共催事業を行っている。
- 令和5年度には、10件、令和6年度には6件の研究科横断型研究教育ユニットに参画し、分野横断的な学際的研究を行う研究ネットワークを形成し、研究の活性化を図っている。

1.3 論文・著書・特許・学会発表など

【基本的な記載事項】

- 研究活動状況に関する資料(総合融合系)
- 本務教員あたりの特許出願数、本務教員あたりの特許取得数

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和2年から令和5年まで、日本語による著書が合計149冊、外国語による著書が合計40冊出版された。また査読付き論文は同期間中に、日本語によるものが53件、外国語によるものが334件、公表された。いずれも高い水準で維持されている。

1.4 研究資金

【基本的な記載事項】

- 本務教員あたりの科研費申請件数(新規)
- 本務教員あたりの科研費申請件数(新規)
- 科研費採択内定率(新規)
- 本務教員あたりの科研費内定金額
- 本務教員あたりの競争的資金採択件数
- 本務教員あたりの競争的資金受入金額
- 本務教員あたりの共同研究受入件数
- 本務教員あたりの共同研究受入件数(国内・外国企業からのみ)
- 本務教員あたりの共同研究受入金額
- 本務教員あたりの共同研究受入金額(国内・外国企業からのみ)

ている。新型コロナのためやや減少したものの、令和2～5年で総計8人の特任教員を招聘した。

- 海外の大学とのあいだで部局間学術協定を複数結んでいる。現在、合計7つの大学・機関と協定を結んでいる。
- 外国人研究者の招聘・受入や外国からの被招聘数は高い水準を維持してきた。新型コロナによりやや減少した時期があったものの、令和2～令和5年度は合計29名が招聘を受けた。また外国人研究者も積極的に受け入れており、その数は令和2～令和5年度のあいだで48名に及んでいる。
- 令和4年は、令和3年に国連で採択された「国際ガラス年」であり、世界各国でさまざまな行事等が行われたが、本研究科もこれに参加した。日本学術会議と国際ガラス年日本実行委員会の共同主催「国際ガラス年2022記念シンポジウム」に人間・環境学研究科学際教育研究部が協賛している。また、国際ガラス年日本実行委員会委員長は本研究科の教員であり、京都大学主催の公開講座「ガラス～無限の可能性を秘めた古くて新しい材料～」にも参加している。

1.7 研究成果の発信／研究資料等の共同利用

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 学部・研究科の研究活動に関わるデータを集約して、年度ごとに『人環レビュー資料編』を作成し、Webで公開している。
- 人間・環境学研究科および総合人間学部の教職員、学生等が受けた学術的な活動に関わる賞、社会的な活動に関わる表彰等の情報をWebで公開している。
- 研究科所属の教員および大学院生の論文、資料、総説、展望などを掲載した学術雑誌『人間・環境学』を年に1回発行し、京都大学学術情報リポジトリ（KURENAI）に公開している。
- 広報誌『総人・人環フォーラム』を年1回発行し、京都大学学術情報リポジトリ（KURENAI）に公開している。
- 教員活動データベースを更新し、教員の最新の研究成果をWeb公開している。

1.8 総合的領域の振興

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 令和5年度には、10の研究科横断型研究教育ユニットに参画し、分野横断的な学際的研究を行う研究ネットワークを形成し、研究の活性化を図っている。（【資料4-14】京都大学学際融合教育研究推進センターにおける参画ユニット）
- 令和5年度より学術越境センターをたちあげ、人間・環境学研究科構成員による学術越境研究活動を促進するために人間・環境学研究科教員が推進する学術越境プロジェクトを支援している。令和5年度は、5つの学術越境プロジェクトを立ち上げた。いずれも同一講座内の教員同士の共同研究にとどまらず、異なった講座の教員や、サントリーなどの民間企業、また南三陸町サステナビリティセンターのようなNPOとの連携をおこなうものであり、学術越境のための研究を実際に推進してきた。

1.9 学術コミュニティへの貢献

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 学際教育研究部の活動として、研究者招聘費用の補助、会場経費の補助などシンポジウム等の開催支援を行ってきた。新型コロナによりその数は減少したが、流行が落ち着いた令和4年度は合計3件の共催・協賛を行っている。なお、令和5年度から学術越境センターに衣替えしたが、これまでと同様に、学術講演会などを2件主催するとともに、国際シンポジウムや学会大会の共催・協賛を6件行った。令和6年度には一般講演会を3回行った。（【資料4-2】附属学術越境センター・学際教育研究部の活動）

1.10 その他（研究業績に対する受賞）

【基本的な記載事項】（特になし）

【評価対象期間に係る特記事項】

- 当研究科の教員の研究業績に対して、令和2年から令和6年のあいだに合計29件、学術関連の賞が与えられた（うち8件は国際的な賞）。平成28年から令和元年のあいだには、国際的な賞の受賞は2件にとどまっていたことを考えると、国際的な研究活動が充実してきたと言える。（【資料4-15】教員の受賞（2020（令和2）～2024（令和6）年度））
- 令和2～令和6年度の学生・修了生（学生及び卒業・修了後5年以内のものを含む）の研究業績に対して、合計116件（うち11件は国際的な賞）の学術関連の賞が与えられた。（【資料4-12】学生・修了生の受賞状況）
- 若手研究者による研究成果の学術出版を推進するために、平成22年度より始まった学内の支援制度である「総長裁量経費 若手研究者に係る出版助成事業」を活用して、博士後期課程学生を中心とした出版助成を行ってきた。令和元年度からは経費不足分を研究科長裁量経費で補填し、学生のニーズに応えている。令和4年度からは「人と社会の未来研究院若手出版助成」制度になったが、同様に出版助成を行っている。今までに出版した学術書は156冊に及び、このうち令和2～令和6年度には40冊が出版されており、このうちの2件については学会賞を受賞している。また、令和元年度に総長裁量経費の助成によって出版された学術書のうち2冊が、令和2年度に学会賞を受賞している。（【資料4-11】若手研究者出版助成による刊行物）

分析項目 (1) 研究活動の状況 自己判定

〔自己判定〕

A 高い質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現していると判断できる。

令和5年度に学術越境センターを設立し、学際的な研究プロジェクトを複数立ちあげるとともに、若手の教員を積極的に採用するなど、研究科全体の研究体制を充実させてきた。こうした取り組みもあり、大学院生や修了生が外部から研究資金を獲得する件数が増えるなど、よい効果もあらわれている。また、本研究科の教員が国連国際ガラス年の日本側の責任者になり、その関連イベントを研究科として共催するなど、国際的な研究活動にもこれまで以上に積極的に関わってきた。以上の観点から、十分に高い質の研究活動が行われてきたと判断できる。

分析項目（2） 研究成果の状況

2.1 研究業績

【基本的な記載事項】

－ 研究業績説明書

研究科を代表する優れた研究業績の選定にあたっては、次のとおりである。

- ・ 研究科等の目的に沿った研究業績を選定する。
- ・ 学術的意義又は社会、経済、文化的意義において、次の5段階で判断区分のうち上位2つの区分に該当する研究業績を選定する
- ・ 第三者評価による結果や客観的指標等の根拠資料を基に、優れた研究業績として判断されるものを、専任教員数の20%程度を上限として選定する。

・ 判定区分表

区分	学術的意義	社会、経済、文化的意義
SS	当該分野において、卓越した水準にある	社会、経済、文化への貢献が卓越している
S	当該分野において、優秀な水準にある	社会、経済、文化への貢献が優秀である
A	当該分野において、良好な水準にある	社会、経済、文化への貢献が良好である
B	当該分野において、相応の水準にある (標準的な研究業績)	社会、経済、文化への貢献が相応である (標準的な研究業績)
C	上記の段階に達していない	上記の段階に達していない

(研究業績の選定の判断基準)

本学部・研究科は、人文・社会・自然科学の広範な学問領域をカバーしているという大きな特色を生かし、従来の諸学問を新しいパラダイムのもとで再編・統合することを目指している。高度な専門性はもちろんのこと、設立当初からの理念である「限りある自然と人間の共生」を指向し、「持続的社会的構築」という緊急かつ現実的な課題に応えるための統合知を究明することが最も重要であると考えている。また国際性という点も考慮している。それらを踏まえ、人文・社会科学系では、水準の高い国際誌への学術論文掲載、学術的のみならず社会的な貢献度・評価の高い著書・論文という判断基準、自然科学系では、査読制度のある第一級の国際学術雑誌への掲載という判断基準、さらに評価期間中に授与された学術賞等を考慮して研究業績を選定している。

【評価対象期間に係る特記事項】

- 本研究科における研究業績の特記事項としては、40歳未満の若手教員が著名な学術賞を受賞していることである。以上は、本研究科が、若手教員が自らの研究を深めることのできる環境を提供し、高く評価される成果を挙げていることを示している。【資料4-15】教員の受賞（2020（令和2）～2024（令和6）年度）

分析項目 (2) 研究成果の状況 自己判定

〔自己判定〕

A 高い質にある

〔判断理由〕

研究業績説明書から明らかなとおり、国際的なジャーナルへの掲載、引用数の多い論文の発表などが数多く存在するとともに、学会賞を受賞した業績も少なくなく、高い質の研究成果を実現してきたと考えられる。以上のことから、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、高い質にあると判断できる。

第2部 資料編

1. 理念・研究教育体制 — 44

【資料 1-1】人間・環境学研究科 教育研究上の目的と教育の方針	45
① 人間・環境学研究科 教育研究上の目的	45
② 人間・環境学研究科 ディプロマ・ポリシー	45
③ 人間・環境学研究科 カリキュラム・ポリシー	45
④ 人間・環境学研究科 アドミッション・ポリシー	46
⑤ 人間・環境学研究科 カリキュラム体系	47
【資料 1-2】総合人間学部 教育研究上の目的と方針	48
① 総合人間学部 教育研究上の目的	48
② 総合人間学部 ディプロマ・ポリシー	48
③ 総合人間学部 カリキュラム・ポリシー	48
④ 総合人間学部 アドミッション・ポリシー	49
⑤ 総合人間学部 カリキュラム体系	49
⑥ 総合人間学部 入学から卒業まで	50
【資料 1-3】沿革	51
【資料 1-4】組織の変遷	52
【資料 1-5】① 研究教育組織 (2022(R4) 年 4 月 1 日現在)	53
【資料 1-5】② 研究教育組織 (2023(R5) 年 4 月 1 日現在)	54
【資料 1-5】③ 研究教育組織 (2024(R6) 年 4 月 1 日現在)	55
【資料 1-6】他部局ならびに学外諸機関との協力体制	56
【資料 1-7】管理運営組織	57
【資料 1-8】教職員数の推移	58
【資料 1-9】教員の年齢構成	59

2. 総合人間学部 — 60

【資料 2-1】学生数の推移	61
【資料 2-2】入学状況	61
【資料 2-3】転学部（転入・転出）の状況	61
【資料 2-4】留年・休学・退学の状況	62
【資料 2-5】修業年限内卒業率と「標準修業年限×1.5」 年内卒業率	62
【資料 2-6】卒業生の進路	62
【資料 2-7】就職状況	63
【資料 2-8】資格取得状況	64
【資料 2-9】留学生の受入状況	64
【資料 2-10】日本人学生の留学状況	65
【資料 2-11】外国の大学において修得した単位の認定状況	65
【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果	66

【資料 2-13】総合人間学部 授業評価アンケート結果	67
【資料 2-14】① 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 1 回生	69
【資料 2-14】② 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 2 回生	70
【資料 2-14】③ 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 3 回生	71
【資料 2-14】④ 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 4 回生	72
【資料 2-14】⑤ 総合人間学部 在学生・卒業生 アンケート結果 卒業生	73
【資料 2-15】総合人間学部 卒業生（卒業後 3 年目） アンケート結果	75

3. 人間・環境学研究科 — 76

【資料 3-1】学生数の推移	77
【資料 3-2】入学状況	77
【資料 3-3】研究生在籍数	78
【資料 3-4】留年・休学・退学の状況	78
【資料 3-5】他研究科への聴講の状況	78
【資料 3-6】修士課程 学位授与の状況	79
【資料 3-7】修士課程 標準修業年限内修了率と 「標準修業年限×1.5」年内修了率	79
【資料 3-8】修士課程修了者の進路	79
【資料 3-9】修士課程修了者の就職状況	80
【資料 3-10】博士後期課程 学位授与の状況	81
【資料 3-11】博士後期課程 標準修業年限内修了率と 「標準修業年限×1.5」年内修了率	81
【資料 3-12】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路	81
【資料 3-13】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の就職状況	82
【資料 3-14】教員免許状資格取得状況	83
【資料 3-15】日本学術振興会特別研究員の受入状況	83
【資料 3-16】留学生の受入状況	83
【資料 3-17】日本人学生の留学状況	84
【資料 3-18】人間・環境学研究科 授業評価アンケート結果	85
【資料 3-19】修士課程 M2 学生アンケート結果	87
【資料 3-20】修士課程修了時アンケート結果	89
【資料 3-21】博士後期課程修了（認定退学）時 アンケート結果	91

【資料 3-22】 修士課程 修了生 (修了後 3 年目) アンケート結果	93	【資料 4-14】 京都大学学際融合教育研究推進センターにおける 参画ユニット	108
【資料 3-23】 博士後期課程 修了生 (認定退学含む)(修了後 3 年目) アンケート結果	94	【資料 4-15】 教員の受賞 (2020(令和 2)～2024(令和 6)年度)	109
4. 教育研究指導体制	— 96	5. 国際交流	— 110
【資料 4-1】 履修指導について	97	【資料 5-1】 出身地域別留学生受入数 (人間・環境学研究科)	111
【資料 4-2】 附属学術越境センター・学際教育研究部の活動	98	【資料 5-2】 外国人研究者等の受入状況	111
【資料 4-3】 「総人のミカタ」講義リスト	101	【資料 5-3】 招へい外国人学者による国際交流セミナー 開催状況	112
【資料 4-4】 他大学・公的機関および企業との共同研究	102	【資料 5-4】 海外渡航研究者	113
【資料 4-5】 他大学・公的研究機関の共同利用施設・ 設備の利用に関わる研究課題採択数	102	【資料 5-5】 部局間学術交流協定締結先一覧	113
【資料 4-6】 地域での兼業一覧 (非公開)	102	【資料 5-6】 国際的な共同研究・研究ネットワーク・ 研究者交流	113
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況 ①【科学研究費助成事業】	103	6. 施設・設備	— 114
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況 ②【寄付金】	103	【資料 6-1】 使用目的別 室数と保有面積	115
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況 ③【共同研究】	103	【資料 6-2】 使用形態別 室数と保有面積	115
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況 ④【受託研究】	104	7. 社会との交流・公開	— 116
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況 ⑤【特許】	104	【資料 7-1】 公開講座開催状況	117
【資料 4-7】 競争的研究費等受入状況 ⑥【全体版】	104	【資料 7-2】 本研究科関係発行元による学術誌	118
【資料 4-8】 学生の学会発表者数	104	【資料 7-3】 出張講義・訪問受入状況	119
【資料 4-9】 学生の論文掲載数	104	【資料 7-4】 学びコーディネーターによる出前授業	119
【資料 4-10】 学生・修了生が獲得した助成金等	105	【資料 7-5】 京都大学の卒業生と教育に係る アンケート実施結果 (令和 5 年) より抜粋	120
【資料 4-11】 若手研究者出版助成による刊行物	106		
【資料 4-12】 学生・修了生の受賞状況	107		
【資料 4-13】 学生相談室の利用件数	108		



理念·研究教育体制

1. 理念・研究教育体制

【資料 1-1】人間・環境学研究科 教育研究上の目的と教育の方針

【資料 1-1-①】人間・環境学研究科 教育研究上の目的

(京都大学通則第 35 条の 2 の規定による)

人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の越境を通して、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、近い将来だけでなく遠い未来をも見据えた先駆的研究の推進、教育研究における国際連携の強化、自然科学・人文科学・社会科学の垣根を越えた総合的な産学官連携に資する研究と教育によって、人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することを目的としています。

教育の方針

【資料 1-1-②】人間・環境学研究科 ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)

人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の越境を通して、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、こうした研究活動を推進するなかで、人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することをめざしています。

修士課程においては、必修である研究指導科目、選択必修である自講座開設科目、および選択科目である他講座開設科目を履修して所定の単位を修得し、かつ本研究科が行う学位論文の審査に合格した者に、修士（人間・環境学）の学位を授与します。学位認定にあつては、以下のことが求められます。

1. それぞれの専門領域における広範かつ深い学識や広い視野に基づく研究能力を身につけていること。
2. それらに基づく高度な分析・判断能力や論理的な論述能力を修得していること。
3. 上記のことを通して、高度な専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を培っていること。

博士後期課程においては、特別研究、特別演習、特別セミナーを履修して所定の単位を修得し、かつ本研究科が行う学位論文の審査に合格した者に、博士（人間・環境学）の学位を授与します。学位認定にあつては、以下のことが求められます。

1. それぞれの専門領域における高度な学識や学際的な幅広い視野に基づく研究能力を身につけていること。
2. 「着想の独創性」、「問題解決の企画力」、「持続的努力」などの観点からめざましい学問的成果を上げていること。
3. 上記のことを通して、新たな知的価値の創出に寄与できる研究職や高度な専門業務に従事するための優れた能力を培っていること。

【資料 1-1-③】人間・環境学研究科 カリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針)

人間・環境学研究科は、社会に湧き起こる新たな問題群の解決には従来の思考枠では対処することができないという基本認識に立ち、新しいパラダイムを創出するという目的意識をもって、人間・環境学の 1 専攻の下に 10 講座を置いています。同一講座に近接分野を多く配置することによって専門性に重点を置き、専門を掘り下げてその裾野を広げ、裾野を広げることによって頂上を高くすることをめざしています。

ディプロマ・ポリシーに示された目標を達成するために、多様な専門分野の科目を体系的に編成するとともに、講座横断的な科目を設定しています。学生の自主性を尊重した教育を実施し、学生が倫理と責任について十分な意識をもつよう、教員と学生の対話を重視しています。

修士課程では専門分野における研究能力と高度な専門性を修得するために、学生は研究指導科目を中心として、講義・演習・実習からなる自講座開設科目を履修しますが、研究の視野を拡大するために他講座あるいは他研究科の開設する科目の履修も推奨されます。指導体制については、指導教員と副指導教員による複数指導体制を採り、狭い専門の殻に閉じこもらないように配慮しています。

学位論文の作成とともに、自立して研究を推進する能力や高度な専門業務を行う能力を修得することを目的とする博士後期課程では、学生は指導教員との密接な対話の下に研究を深化させます。また指導教員と副指導教員を配置した複数指導体制を採り、複眼的思考の強化育成と基盤となる学識の形成を図っています。

修士課程と博士後期課程を通覧できるカリキュラム・マップにより、教育と学修の構造や体系が把握できるようにしています。各科目の内容の詳細や学修成果の評価方法についてはシラバスに明示されています。

【資料 1-1-④】人間・環境学研究科 アドミッション・ポリシー(入学者受入れの方針)

現代の科学・技術は、人間の可能性を限りなく押し広げてきた反面、地球環境問題、エネルギー問題、地域紛争、富の地域間格差等の諸問題を次第に顕在化させ、グローバル化の波とあいまって、わたしたちに新たな課題をつきつけています。人間・環境学研究科は、こうした新たな問題群に立ち向かい、地球規模での危機的状況を打開・克服するために、これまでの知の蓄積を踏まえつつ、新たな知のパラダイムを構築し、高い倫理性と強い責任感をもって社会の発展に貢献することのできる人を求めています。

人間・環境学研究科への入学を希望する人に求めるものは、下記に示す資質・能力です。

1. 特定の学問分野を主軸とする専門的研究において、問題の設定からその解決方法の提示に至る研究過程に取り組むことのできる知識、能力ならびに熱意を有していること。
2. 他者や異文化に対する理解を尽くした上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現するプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、ならびにリーダーシップを持っていること。
3. 人文科学・社会科学・自然科学を横断する幅広い知識と教養を身につけ、自らの専門分野のみに閉じこもらない、人間・文明・自然に対する、多角的な視点や柔軟な発想力を培っていること。
4. 「人間・環境学研究科」の名称にある「・」は、加算的な意味合いの「・」ではなく、乗算的な意味合いのそれである。この名称が示唆するように、既成の知を熟知しているだけでなく、それを基盤に新たな創造的飛躍をなすうる知的軽やかさを身につけていること。

人間・環境学研究科の入学者選抜においては、上記の資質・能力を多角的に測るため、専門分野についての筆答試験、外国語の筆答試験または外部試験、および口述試験または論文試験を柔軟に組み合わせて評価を行います。

【資料 1-2】総合人間学部 教育研究上の目的と教育の方針

【資料 1-2-①】総合人間学部 教育研究上の目的

(京都大学通則第3条の3の規定による)

総合人間学部は、人間と文明と自然の結び付きに新たな次元を確立するために、人類が直面する様々な問題を人間活動の広範な諸領域を通過させる形で問い直し、これまでの人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問の体系を構築することを、すなわち、新たな「人間の学」の創出を目指す。さらに、このような学問的探求を通じて、科学技術の急速な発展と国際化の進展など著しく変化するこれからの社会に対して、持続的かつ創造的に対処しうる広い視野を持った人材を育成することを目的とする。

教育の方針

【資料 1-2-②】総合人間学部 ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)

総合人間学部は、人間と文明と自然との新たな結びつきを見出す「人間の学」の創出をめざしています。また、この学問的追究を通して、高い倫理性と幅広い視野から創造的かつ持続的に現代の諸問題と向き合い、多様な人々と協働しながらリーダーシップを発揮する人を育成することを目的としています。これを達成するため、以下の点に到達した者に総合人間学部学士号を授与します。

1. 総合人間学部が提供する学際的な学問の場において、人文科学・社会科学・自然科学を横断する幅広い知識と教養を身につけていること。
2. 他者や異文化に対する理解を深めた上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現するプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、ならびにリーダーシップを培っていること。
3. 多様な学問分野を学ぶ中で、自らの知的な核となる特定の分野を選択し、その理解を深めていること。
4. 主たる専門分野とは異なる、もう一つの分野も重点的に学ぶことによって、人間・文明・自然に対する、多角的な視点や柔軟な発想力を培っていること。
5. 卒業論文・卒業研究において、問題の設定からその解決方法の提示に至る研究過程に取り組み、一定の成果を上げていること。

【資料 1-2-③】総合人間学部カリキュラム・ポリシー(教育課程編成・実施の方針)

総合人間学部では、新たなる「人間の学」の創出を主軸として、卒業の認定に関する方針に示した目的を達成するために、多様な学問分野を網羅する教員陣によって、教養教育・基礎教育から専門教育までの一体化したカリキュラムを提供します。比較的新しい学問分野と専攻で構成する講座を複数設置し、コースツリーならびに学問分野の履修モデルを提示することにより、カリキュラム体系の構成を具体的に示します。これらを相互に俯瞰し、自身の目的にあわせて知的な核となる主専攻と副専攻を決定し、複数の学問分野を総合しつつ、自律的に自らの学問を構築します。講義や演習等として行われる個々の授業科目の内容および、定期試験・レポート・平常点による評価方法の詳細については、シラバスに記載します。

総合人間学部には所属する学生には、以下の指針に従って自律的に学修することを求めます。

1. 文理にまたがる多様な教養・基礎科目、複数の学問分野による入門科目、複数の外国語科目等を幅広く学び、人文科学・社会科学・自然科学に対する幅広い知識と理解力を修得し、豊かな人間性と高い倫理性を育む。
2. ゼミ・演習等の少人数科目を履修し、教養・基礎から専門の領域にわたる知識と能力を濃密な議論の中で培うとともに、他者に自らの見解を表現するためのプレゼンテーション能力および対話能力を身につける。
3. 学年の進行とともに、自らの学問的関心に応じて一つの講座を主専攻として選択して系統的に学び、自らの知的な核となる専門性を修得する。
4. 主専攻とは異なる学問分野を副専攻として系統的に学び、自らの専門分野に捉われない柔軟で重層的な思考力を養う。
5. 主専攻の分野において指導教員を選び、そのもとで卒業論文・卒業研究に取り組む。学修成果は複数の教員により審査される。こうした研究過程を通して、専門性を深めるとともに、直面する諸問題の解決に挑戦する創造的姿勢と持続力を育む

【資料 1-2-④】総合人間学部 アドミッション・ポリシー (入学者受入れの方針)

総合人間学部は、たえまなく変化する現代社会における人間と文明と自然の新たな結びつきを見出すために、人文科学、社会科学、自然科学を横断する「人間の学」の創出をめざしています。この挑戦に積極的に加わりようとする志をもつ人、高い倫理性と豊かな人間性を持ちつつ、国際的視野から人類が直面する様々な課題に向きあおうとする進取の精神をもつ人、持続的で創造的な取り組みを支える教養を身につけたいと考える人を本学部は求めます。

総合人間学部が入学を希望する人に求めるものは、高等学校の教育課程の教科・科目を広く修得し、自らが学ぼうとする分野の基礎となる知識を身に付けていることに加えて、その内容を活用する主体的な思考力・判断力・表現力、そして他者と協働しながら学ぶ態度です。

総合人間学部の入学者選抜は、京都大学の一般選抜において、文系試験と理系試験の2つに分けて実施し、多様な基礎的学力を測ります。また本学部独自の特色入試では、高等学校における学びの成果、基礎的学力とともに、文系と理系の総合的な思考力・表現力を評価します。これらの入試においては、総合的な学力の評価を行うために大学入学共通テストの成績を取り入れ、合否判定を行っています。

【資料 1-2-⑤】総合人間学部 カリキュラム体系

『総合人間学部便覧』およびホームページにて掲載 (<https://www.h.kyoto-u.ac.jp/about/ug/curriculum/>)

学系 (2023 年度以前に入学した場合)

<コースツリー>

- ・人間科学系 コースツリー
- ・認知情報学系 コースツリー
- ・国際文明学系 コースツリー
- ・文化環境学系 コースツリー
- ・自然科学系 コースツリー

<履修モデル>

- ・人間科学系 履修モデル
- ・認知情報学系 履修モデル
- ・国際文明学系 履修モデル
- ・文化環境学系 履修モデル
- ・自然科学系 履修モデル

講座 (2024 年度以降に入学した場合)

<コースツリー>

- ・コースツリー (全講座共通)

<履修モデル>

- ・数理・情報科学講座 履修モデル
- ・人間・社会・思想講座 履修モデル
- ・芸術文化講座 履修モデル
- ・認知・行動・健康科学講座 履修モデル
- ・言語科学講座 履修モデル
- ・東アジア文明講座 履修モデル
- ・共生世界講座 履修モデル
- ・文化・地域環境講座 履修モデル
- ・物質科学講座 履修モデル
- ・地球・生命環境講座 履修モデル

【資料 1-2- ⑥】総合人間学部 入学から卒業まで

学部案内より転載

入学から卒業まで

入学試験(120名)

一般選抜(前期日程)

第1段階選抜は、大学入学共通テストの成績等により行います。

第2段階選抜は、文系型試験(定員62名)と理系型試験(定員53名)に分けて行います。

特色入試

提出書類、能力測定考査、及び大学入学共通テストの成績を総合して選抜(定員5名)を行います。



専攻の決定

総合人間学部は本学他学部にもみられない、文理にまたがる広い学問分野をカバーしています。一般選抜「文系」または「理系」、特色入試「総合型選抜」という入学試験のどちらかで受験したかにかかわらず、本学部学生はその幅広い分野をカバーする諸講座のどれにでも進むことができます。ただし入学後1年間は、どの講座にも属しません。幅広い学問分野に触れ、自分の専攻したい学問分野をじっくり見極めた上で、2回生進級時に主専攻を決めて、講座に属します。専攻分野をこれほど広い範囲から選べる学部は、本学ではほかにありません。



副専攻制度

総合人間学部では、広い視野を持ち創造性豊かな人間を育成する目的で、主専攻のほかに、副専攻の制度を設けています。副専攻は、各自が所属する講座の専門分野以外の特定の学問分野を系統的に履修する制度です。これによって、主専攻以外の分野においても専門的知識と深い素養を身につけることができます。副専攻を履修したことに対しては、学士の学位記とは別に副専攻名を記した認定書が発行されます。



卒業論文・卒業研究と「研究を他者に語る」

4年間の学修の集大成として、指導教員の指導の下、卒業論文あるいは卒業研究の作成がなされ、その発表会がもたれます。またこれとは別に、その研究成果を自分の専門分野とは異なる分野の複数の教員や学生に対して説明することが義務づけられています(「研究を他者に語る」)。専門外の人に自分の専門をわかりやすく語ることが総合人間学部の教育では重視されていますが、この課題はその総まとめといえます。卒業時のこれら諸課題を完成することで、学生は専門分野の研究・理解の力を養うとともに、深い思考力を身につけ、専門外の人々への説明の能力を培います。これらの能力は、卒業後の人生の頼もしい武器になることでしょう。



卒業後の進路

大学院進学

総合人間学部の大学院進学希望者の多くは、直結する「人間・環境学研究科」を受験して進学しています。

2024年度からの総合人間学部の組織改革により、総合人間学部は10の講座に再編され、それによって人間・環境学研究科の10の講座と対応するようになりました。その結果、学部と大学院でのシームレスな学習・研究が可能になりました。

なお、本学の他の研究科や他大学の大学院に進学することもできます。

就職

総合人間学部の卒業生は、主専攻の履修だけでなく、副専攻の履修や、幅広い分野の学部科目を履修することにより、広い視野と柔軟な思考力を備え、総合的な判断力を身につけているものと、社会から期待されています。また、卒業生は、のびやかな個性と独創性が高く評価され、文系から理系に至る幅広い職種に就職して、その社会的期待に応えています。国家機関、国際機関、地方自治体、民間企業等での活躍の道が、大きく開かれています。

【資料 1-3】沿革

前史(第三高等中学校～教養部)

1886 (明治19) 年 4月	第三高等中学校開校
1894 (明治27) 年 9月	第三高等学校開校 (第三高等中学校が改称)
1897 (明治30) 年 6月	京都帝国大学創設
1949 (昭和24) 年 5月	新制京都大学発足、第三高等学校が京都大学所轄へ
1950 (昭和25) 年 3月	第三高等学校廃止 (以後京都大学分校と称せられる)
1954 (昭和29) 年 3月	教養部規定を制定し分校を教養部と改称(学内措置による改称)
1963 (昭和38) 年 4月	文部省令により正式に教養部を設置(分校から教養部へ正式に改称)
1977 (昭和52) 年 5月	教養部改善検討委員会設置(大学院設置を検討)
1993 (平成 5) 年 3月	教養部廃止

大学院 人間・環境学研究科/総合人間学部

1991 (平成 3) 年 4月	大学院人間・環境学研究科を設置、「人間・環境学専攻 (第1専攻)」開設
1992 (平成 4) 年10月	大学院「文化・地域環境学専攻 (第2専攻)」設置
1992 (平成 4) 年10月	総合人間学部設置、4学科を開設 (人間学科・国際文化学科・基礎科学科・自然環境学科)
1993 (平成 5) 年 4月	大学院「人間・環境学専攻 (第1専攻)」に博士後期課程設置
1993 (平成 5) 年 4月	総合人間学部第1期生入学
1995 (平成 7) 年 4月	大学院「文化・地域環境学専攻 (第2専攻)」に博士後期課程設置
1996 (平成 8) 年 3月	大学院 人間・環境学研究科棟竣工
1996 (平成 8) 年 4月	大学院「アフリカ地域研究専攻 (5年一貫制特別専攻)」設置
1997 (平成 9) 年 3月	総合人間学部第1期生卒業
1997 (平成 9) 年 4月	大学院「環境相関研究専攻 (第3専攻)」設置
1998 (平成10) 年 3月	総合人間学部棟竣工
1998 (平成10) 年 4月	「大学院アジア・アフリカ地域研究研究科」の設置に伴い、 「アフリカ地域研究専攻」および「東南アジア地域研究講座」を移管
1999 (平成11) 年 4月	大学院「環境相関研究専攻 (第3専攻)」に博士後期課程設置
2003 (平成15) 年 4月	大学院 3専攻を改編、新たに「共生人間学専攻」「共生明学専攻」「相関環境学専攻」を設置
2003 (平成15) 年 4月	総合人間学部 4学科を廃止して「総合人間学科」1学科に改組、 5学系 (人間科学系・認知情報学系・国際文明学系・文化環境学系・自然科学系)に再編 大学院人間・環境学研究科へ教員組織を統合
2004 (平成16) 年 4月	国立大学法人京都大学設立
2008 (平成20) 年 4月	大学院「学際教育研究部」を開設
2014 (平成26) 年 4月	人間・環境学研究科総合人間学部図書館が吉田南総合図書館に改組
2023 (令和 5) 年 4月	大学院 3専攻を「人間・環境学研究科専攻」1専攻に統合
2023 (令和 5) 年 4月	大学院「学際教育研究部」を廃止し、「附属学術越境センター」を設置
2024 (令和 6) 年 4月	総合人間学部 1学科5学系から1学科10講座に再編成

【資料 1-4】組織の変遷

教養部 (1963-1993)	
1.哲学教室(哲学・芸術学) 2.心理学教室(心理学・教育学) 3.歴史学教室 4.人文地理学教室 5.文学教室 6.哲学教室(法学・政治学) 7.経済学教室(経済学・社会統計学) 8.社会学教室(社会学・文化人類学) 9.英語教室 10.ドイツ語教室 11.フランス語教室 12.中国語教室 13.ロシア語教室 14.数学教室 15.物理学教室 16.化学教室 17.生物学教室 18.地学教室 19.図学教室 20.保健体育教室 21.総合教室	

(1991.4.1
基礎となる学部組織を持たない独立大学院) ↓

京都大学で10番目の学部
↓ (1992.10.1 法令上設置 1993.4.1 第1期生入学)

大学院人間・環境学研究科 (1991-2002)	
人間・環境学専攻 (第一専攻) (1991年開設) 1991.4.1- 修士課程 1993.4.1- 博士後期課程	1.人間存在基礎論 2.動態環境論 3.人間社会学 4.人間形成論 5.自然・人間共生基礎論 6.環境情報認知論 7.自然環境論 8.分子・生命環境論
文化・地域環境学専攻 (第二専攻) (1992年開設) 1992.4.1- 修士課程 1995.4.1- 博士後期課程	1.文化・社会環境論 2.環境物性解析論 3.文化環境言語基礎論 4.環境保全発展論 5.文化人類学 6.日本文化環境論 7.ヨーロッパ文化環境論 8.東南アジア地域研究(1992-1997) 9.アフリカ地域研究(1992-1995) 10.歴史文化地域論(1998) (博2000) 11.広域文化地域論(1997) (博1999)
環境相関研究専攻 (第三専攻) (1997年開設) 1997.4.1- 修士課程 1999.4.1- 博士後期課程	1.共有環境システム 2.生物環境システム論 3.社会環境システム論 4.地球環境動態論 5.物質環境相関論 6.環境相関解析論 7.言語環境相関論 8.環境認識表象論

総合人間学部 (1992-2002)		
人間学科	人間基礎論 生活空間論	人間存在論 人間関係論 創造行為論 生活空間構造論 社会システム論
国際文化学科	文化構造論 文明論講座 言語文化論	文化原論 文化人類学 文化形成論 現代文明論 言語記号論分野 文芸論
基礎科学科	日本・中国文化・社会論 欧米文化・社会論	日本文化・社会論 中国文化・社会論 東欧圏文化・社会論 西欧圏文化・社会論 アメリカ圏文化・社会論
自然環境学科	数理基礎論 情報科学論 自然構造基礎論	数理構造論 数理現象論 空間現象論 数理情報論 人間情報論 計算理学 粒子・宇宙基礎論 物性基礎論
自然環境学科	物質環境論 生物・地球圏環境論 環境適応論	物質構造論 物質機能論 地球科学 生物科学 生体適応論 運動適応論



● アフリカ地域研究専攻
(第二特別専攻)
(1996-1997)

● 大学院
アジア・アフリカ
地域研究
研究科

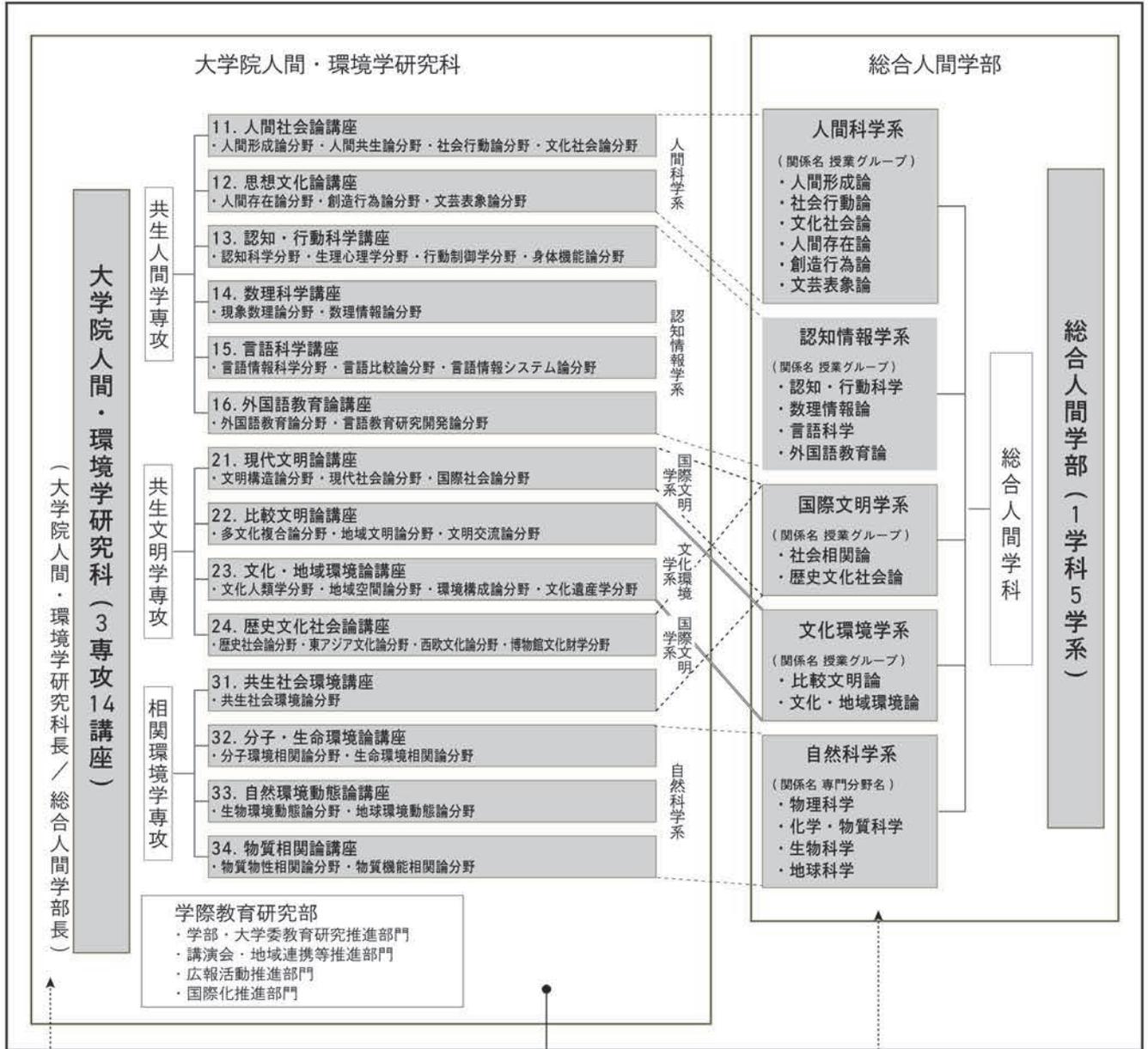
1998.4.1 -
アフリカ地域研究専攻、
東南アジア地域研究講座を移管

(2003.4.1- 基礎となる学部組織を持つ大学院)

大学院人間・環境学研究科 総合人間学部			
■ 大学院人間・環境学研究科 (2003-2022)		■ 総合人間学部 (1学科5学系に改組) (2003-2023)	
共生人間学専攻 (2003年開設)	11.人間社会学 12.思想文化論 13.認知・行動科学 14.数理学 15.言語科学	人間科学系	・人間形成論 ・文化社会学論 ・創造行為論 ・社会行動論関係 ・人間存在論関係 ・文芸表彰論関係
共生文明学専攻 (2003年開設)	16.外国語教育論 21.現代文明論 22.比較文明論	認知情報学系	・認知・行動科学 (行動制御学 / 身体機能論) ・数理情報論 (数学 / 情報) ・言語科学 ・外国語教育論
相関環境学専攻 (2003年開設)	23.文化・地域環境論 24.歴史文化社会学 31.共生社会環境論 32.分子・生命環境論 33.自然環境動態論 34.物質相関論	国際文明学系	・社会相関論 (文明構造論 / 多文化社会学論 / 国際関係論 / 国家・社会システム論 / 現代社会学論 / 公共政策論) ・歴史文化社会学 (歴史社会学論 / 東アジア文化論 / 西歐文化論)
学際教育研究部 (2008-2022)		文化環境学系	・比較文明論 ・文化・地域環境論 (環境構成論 / 文化人類学 / 地域空間論)
		自然科学系	・物理学 (無機・物理化学 / 有機化学) ・化学・物質科学 ・生物科学 ・地球科学

(2024.4.1- 大学院と学部が同一の10講座に編成)

■ 大学院人間・環境学研究科 (2023-)		■ 総合人間学部 (2024-)	
人間・環境学専攻 (2023年開設)	第1 数理・情報科学講座 第2 人間・社会・思想講座 第3 芸術文化講座 第4 認知・行動・健康科学講座 第5 言語科学講座 第6 東アジア文明講座 第7 共生世界講座 第8 文化・地域環境講座 第9 物質科学講座 第10 地球・生命環境講座	総合人間学科	第1 数理・情報科学講座 第2 人間・社会・思想講座 第3 芸術文化講座 第4 認知・行動・健康科学講座 第5 言語科学講座 第6 東アジア文明講座 第7 共生世界講座 第8 文化・地域環境講座 第9 物質科学講座 第10 地球・生命環境講座
附属学術越境センター (2023-)			

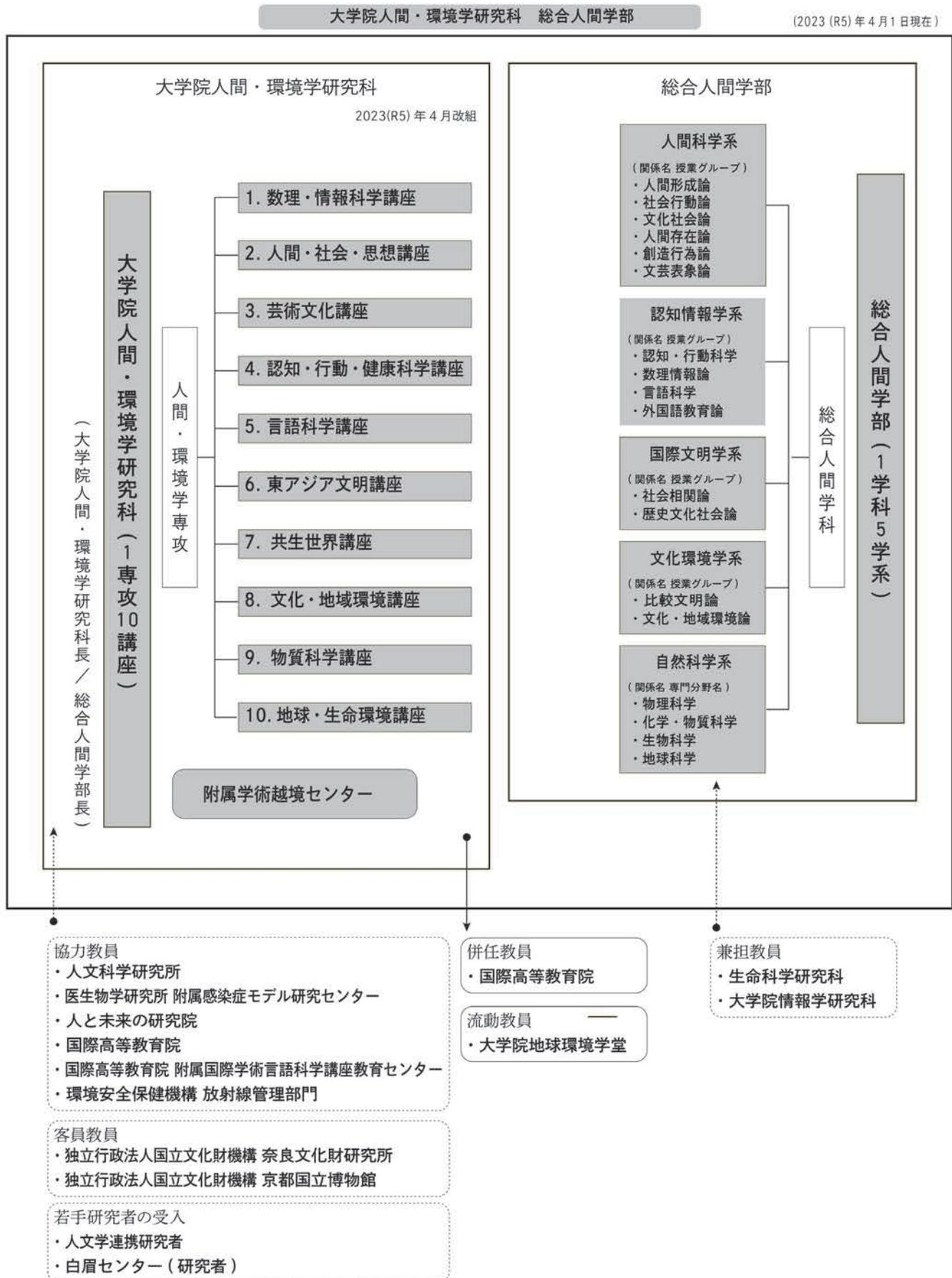


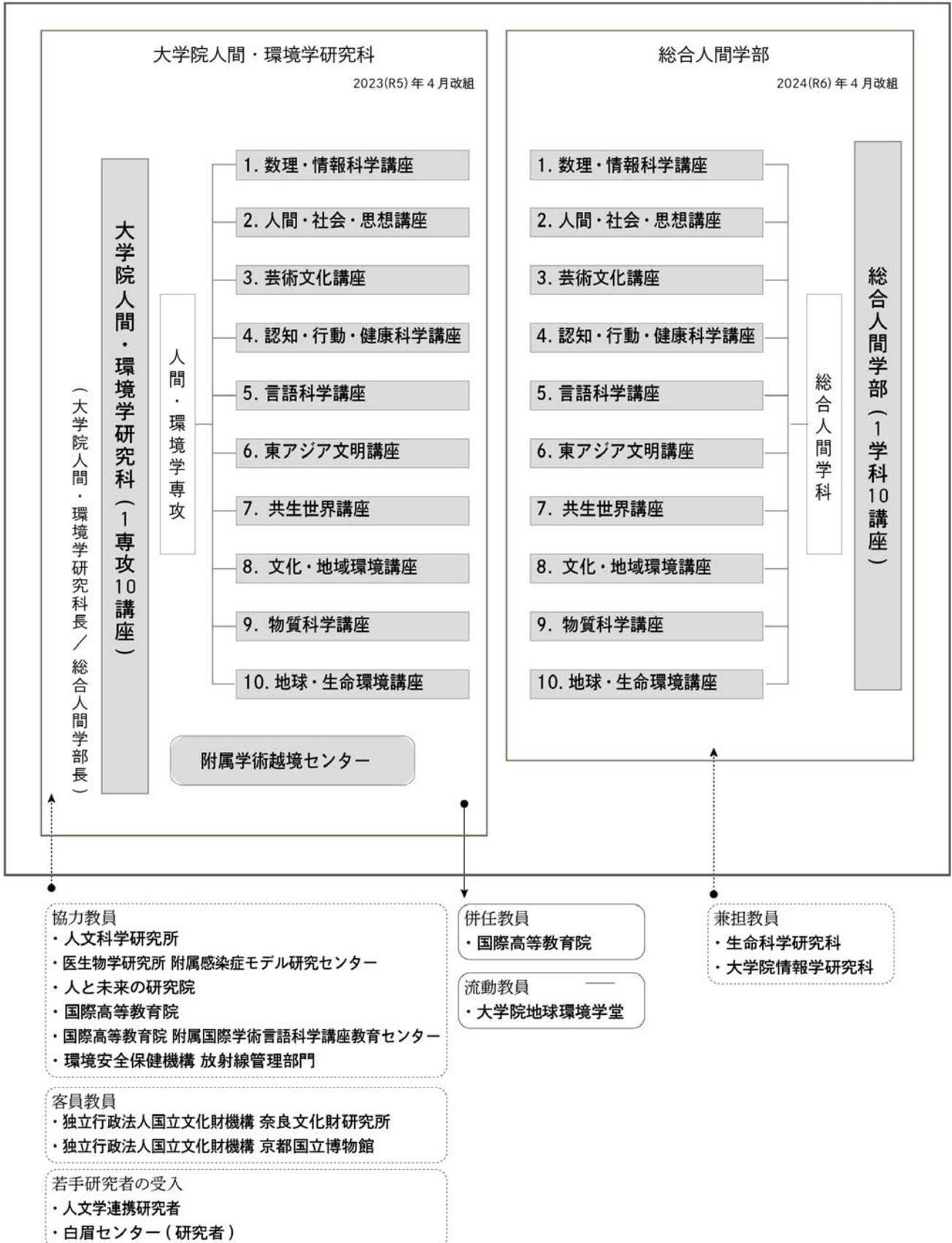
- 協力教員 (学内)
- ・人文科学研究所
 - ・医生物学研究所 附属感染症モデル研究センター
 - ・人と未来の研究院
 - ・国際高等教育院
 - ・国際高等教育院 附属国際学術言語科学講座教育センター
 - ・環境安全保健機構 放射線管理部門
- 客員教員 (学外)
- ・独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
 - ・独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館
- 若手研究者の受入 (学内)
- ・人文学連携研究者
 - ・白眉センター (研究者)

- 併任教員
- ・国際高等教育院
- 流動教員
- ・大学院地球環境学堂

- 兼任教員
- ・生命科学研究科
 - ・大学院情報学研究科

【資料 1-5】② 研究教育組織 (2023(R5) 年 4 月 1 日現在)





【資料 1-6】 他部局ならびに学外諸機関との協力体制

(2024(R6) 年5月1日現在)

区分	部局・機関名	人間・環境学研究所				講座	総合人間学部			
		人数					講座	人数		
		併任教員	流動教員	協力教員	客員教員			併任教員	流動教員	兼任教員
学内	情報学研究科							2	第4 認知・行動・健康科学講座 (2)	
	生命科学研究所							2	第10 地球・生命環境講座 (2)	
	地球環境学堂・学舎・三才学林		6			第7 共生世界講座 (1)	6		第7 共生世界講座 (1)	
				第8 文化・地域環境講座 (1)	第8 文化・地域環境講座 (1)					
				第9 物質科学講座 (2)	第9 物質科学講座 (2)					
				第10 地球・生命環境講座 (2)	第10 地球・生命環境講座 (2)					
	附置研究所	人文科学研究所			1	第8 文化・地域環境講座 (1)				
		医生物学研究所 附属感染症モデル研究センター			1	第10 地球・生命環境講座 (1)				
	国際高等教育院		6			第2 人間・社会・思想講座 (1)	6		第2 人間・社会・思想講座 (1)	
				第3 芸術文化講座 (1)	第3 芸術文化講座 (1)					
				第4 認知・行動・健康科学講座 (1)	第4 認知・行動・健康科学講座 (1)					
				第6 東アジア文明講座 (1)	第6 東アジア文明講座 (1)					
				第8 文化・地域環境講座 (1)	第8 文化・地域環境講座 (1)					
				第10 地球・生命環境講座 (1)	第10 地球・生命環境講座 (1)					
国際高等教育院			2	第9 物質科学講座 (2)						
国際高等教育院 附属国際学術言語教育センター			7	第5 言語科学講座 (6)						
環境安全保健機構 附属放射線同位元素総合センター			1	第10 地球・生命環境講座 (1)						
人と社会の未来研究院				2	第4 認知・行動・健康科学講座 (1)					
					第7 共生世界講座 (1)					
学外	独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館				3				第6 東アジア文明講座 (3)	
	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所				5				第8 文化・地域環境講座 (5)	
合計		6	6	14	8		6	6	4	

注) () 内の数字は講座内の人数

【資料 1-8】教職員数の推移

【基幹教員】

年度		教授	准教授	講師	助教	教員総計
2020 (R2)	男	57	24	1	16	98
	女	8	7	0	1	16
	計	65	31	1	17	114
2021 (R3)	男	56	24	1	16	97
	女	10	6	1	2	19
	計	66	30	2	18	116
2022 (R4)	男	52	26	0	15	93
	女	13	5	1	2	21
	計	65	31	1	17	114
2023 (R5)	男	52	24	2	15	93
	女	11	6	1	2	20
	計	63	30	3	17	113
2024 (R6)	男	55	26	2	15	98
	女	10	8	1	3	22
	計	65	34	3	18	120

【流動教員・併任教員・協力教員・客員教員・特定教員・特定教員(白眉センター)】

年度		流動教員	併任教員	協力教員	客員教員	総計	特定教員	特定教員 (白眉センター)
2020 (R2)	教授	3	6	9	5	23	1	0
	准教授	2		9	4	15	1	1
	講師					0	1	2
	助教	2				2	2	0
	計	7	6	18	9	40	5	3
2021 (R3)	教授	3	6	10	6	25	0	0
	准教授	2		7	4	13	2	1
	講師					0	1	0
	助教	2				2	4	1
	計	7	6	17	10	40	7	2
2022 (R4)	教授	3	6	10	6	25	0	0
	准教授	2		7	4	13	3	1
	講師					0	1	0
	助教	2				2	3	1
	計	7	6	17	10	40	7	2
2023 (R5)	教授	4	6	8	4	22	0	0
	准教授	1		7	5	13	3	1
	講師					0	1	0
	助教	1				1	3	3
	計	6	6	15	9	36	7	4
2024 (R6)	教授	4	6	7	5	22	0	0
	准教授	1		6	4	11	1	1
	講師					0	1	0
	助教	1				1	2	3
	計	6	6	13	9	34	4	4

【事務・技術部】

年度		事務・技術部 [定員内職員]
2020 (R2)	男	5
	女	9
	計	14
2021 (R3)	男	6
	女	6
	計	12
2022 (R4)	男	6
	女	6
	計	12
2023 (R5)	男	7
	女	6
	計	13
2024 (R6)	男	7
	女	8
	計	15

【資料 1-9】教員の年齢構成

(2020 (R2) 年 4 月 1 日現在)

年齢階層	教授	准教授	講師	助教	合計
21～29				1	1
30～39		5	1	6	12
40～49	13	21		2	36
50～59	32	5		8	45
60～65	20				20
小計	65	31	1	17	114

(2021 (R3) 年 4 月 1 日現在)

年齢階層	教授	准教授	講師	助教	合計
21～29					0
30～39		5	1	6	12
40～49	11	21	1	4	37
50～59	36	3		6	45
60～65	19	1		2	22
小計	66	30	2	18	116

(2022 (R4) 年 4 月 1 日現在)

年齢階層	教授	准教授	講師	助教	合計
21～29					0
30～39		7		5	12
40～49	9	19	1	4	33
50～59	39	4		6	49
60～65	17	1		2	20
小計	65	31	1	17	114

(2023(R5) 年 4 月 1 日現在)

年齢階層	教授	准教授	講師	助教	合計
21～29	0	0	0	0	0
30～39	0	8	2	6	16
40～49	10	17	1	4	32
50～59	34	4	0	5	43
60～65	19	1	0	2	22
小計	63	30	3	17	113

(2024(R6) 年 4 月 1 日現在)

年齢階層	教授	准教授	講師	助教	合計
21～29	0	0	0	2	2
30～39	0	8	2	5	15
40～49	10	20	1	4	35
50～59	36	5	0	4	45
60～65	19	1	0	3	23
小計	65	34	3	18	120



総合人間学部

2. 総合人間学部

【資料 2-1】学生数の推移 (総合人間学部)

各年度 5月1日現在

	学部学生数			男性学生に対する女性学生学生の割合	留学生数(内数) ^{*1}			留学生の割合	科目等履修生			合計			本務教員数	本務教員1人あたりの学生数
	男	女	計		男	女	計		男	女	計	男	女	計		
2020(R2)	415	156	571	37.6%	3	5	8	1.4%	6	6	12	421	162	583	119	4.798
2021(R3)	426	168	594	39.4%	3	6	9	1.5%	5	6	11	431	174	605	116	5.121
2022(R4)	425	153	578	36.0%	2	7	9	1.6%	4	7	11	429	160	589	117	4.940
2023(R5)	420	158	578	37.6%	2	9	11	1.9%	5	7	12	425	165	590	130	4.446
2024(R6)	427	154	581	36.1%	2	8	10	1.7%	5	9	14	432	163	595	130	4.469

*1 外国人留学生数(留学ビザ留学生)で内数

【資料 2-2】入学状況 (総合人間学部)

(一般入試・特色入試)

年度	(一般入試)																			特色入試				
	全体					文系					理系					募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数				
	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数									
2020(R2)	115	406	384	117	117	62	203	201	63	63	53	203	183	54	54	5	42	42	5	5				
2021(R3)	115	435	399	118	117	62	242	216	63	63	53	194	183	55	54	5	49	49	5	5				
2022(R4)	115	399	374	118	118	62	192	189	63	63	53	207	185	55	55	5	35	35	5	5				
2023(R5)	116	416	396	118	118	63	224	212	64	64	53	192	184	54	54	5	39	39	4	4				
2024(R6)	116	456	395	119	119	63	234	215	64	64	53	222	180	55	55	5	41	41	4	4				

・特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員は一般入試の募集人員に加える。

(志願状況) 文部科学省公表 学部のみ

	募集人員	志願者	倍率	2段	前年
2020(R2)	115	406	3.5	3.5	3.6
2021(R3)	115	436	3.8	3.5	3.5
2022(R4)	115	399	3.5	3.5	3.8
2023(R5)	115	416	3.6	3.5	3.5
2024(R6)	115	456	4.0	3.5	3.6

(入学者数・入学定員充足率)

	① (一般) 入学者	② 特色 入試	③ 外国人 留学生 特別 選抜	④ Kyoto iUP	編入学 者	再入学・ 学士 入学者	入学者 数合計	①~④ の合計	入学 定員	入学定員 充足率
2020(R2)	117	5	3	0	0	1	126	125	120	104.2%
2021(R3)	117	5	2	0	0	0	124	124	120	103.3%
2022(R4)	118	5	2	0	0	1	126	125	120	104.2%
2023(R5)	118	4	2	1	0	0	125	125	120	104.2%
2024(R6)	119	4	1	0	0	0	124	124	120	103.3%

【資料 2-3】転学部 (転入・転出) の状況

年度	転入		転出	
	出願者	許可者	出願者	許可者
2020(R2)	22	7	0	0
2021(R3)	20	7	0	0
2022(R4)	9	5	1	1
2023(R5)	25	0	0	0
2024(R6)	13	2	0	0

【資料 2-4】留年・休学・退学の状況 (総合人間学部)

	学生数	留年者	休学者	退学者・ 除籍者数	退学率
2019 (R1)	575	62	33	9	1.6%
2020 (R2)	571	58	27	9	1.6%
2021 (R3)	594	67	43	2	0.3%
2022 (R4)	578	67	37	4	0.7%
2023 (R5)	578	75	40	4	0.7%
2024 (R6)	581	82	42	3	0.5%

注)・留年者数：毎年度 5 月 1 日現在の数
 ・休学者数：毎年度 5 月 1 日現在の数
 ・退学者数：当該年度内の累計数
 ・留年者＝卒業年次に在籍者のうち、4 年 (3 年次編入者等は 2 年) を超えて在籍している者

参考
 京都大学 HP > 京大について > 公表事項 > 教育情報の公表 > 公表項目 5. 学生数、進路の状況等 > 「3. その他」 > 「転学部等の数、休学者数、早期卒業者数、退学者数・中途退学率、留年者数等」
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/publication/publish-education>
<https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/4-4-1-cc80fa0d65dd89e87832a7759b004fa7.pdf>
 留年者：「学校基本調査 最低在学年限超過学生数」
 休学者：教育推進・学生支援部教務企画課教務掛「学生数集計表 (全体) 第 3 表休学者」

【資料 2-5】標準修業年限内卒業率と「標準修業年限×1.5」年内卒業率 (総合人間学部)

入学年度	入学者数	標準修業年限内卒業率※1				「標準修業年限×1.5」年内卒業率※2					
		標準修業年限内卒業者数		対象学生数 (当該学年の 転入・編入 含む)	標準修業 年限内卒業率	5 年で卒業した者		6 年で卒業した者		(標準修業年 限×1.5) 年 内卒業者数	「標準修業年 限×1.5」年 内卒業率
		卒業年度	①卒業者数			A	①/A	卒業年度	⑥卒業者数		
2015(H27)	125	2018(H30)	98	130	75.4%	2019(R1)	24	2020(R2)	3	125	96.2%
2016(H28)	126	2019(R1)	91	132	68.9%	2020(R2)	20	2021(R3)	8	119	90.2%
2017(H29)	124	2020(R2)	71	130	54.6%	2021(R3)	32	2022(R4)	8	111	85.4%
2018(H30)	125	2021(R3)	98	131	74.8%	2022(R4)	23	2023(R5)	4	125	95.4%
2019(R1)	125	2022(R4)	87	132	65.9%	2023(R5)	22	2024(R6)	11	120	90.9%
2020(R2)	125	2023(R5)	83	130	63.8%	2024(R6)	23	2025(R7)		106	81.5%
2021(R3)	124	2024(R6)	86	126	68.3%	2025(R7)		2026(R8)			

※注 1 標準修業年限で卒業した者の数÷標準修業年限 (例：4 年制学部であれば 4 年) 前の入学者数 (及び当該学年の転入・編入含む) (A)
 ※注 2 A のうち、(標準修業年限×1.5) 年間に学位を取得した者の数÷(標準修業年限×1.5) 年前の入学者数 (当該学年の転入・編入含む) (A)

【資料 2-6】卒業生の進路 (総合人間学部)

	卒業年度			2020(R2)			2021(R3)			2022(R4)			2023(R5)			2024(R6)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
卒業者数	72	26	98	94	50	144	92	28	120	79	38	117	89	38	127			
進学 (大学院研究科)	26	9	35	41	18	59	36	7	43	34	9	43	34	6	40			
進学 (大学院研究科 への進学者数 (内数))	17	7	24	27	10	37	22	5	27	22	9	31	26	4	30			
進学 (大学学部)	1	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
進学 (合計)	27	10	37	41	19	60	36	7	43	34	9	43	34	6	40			
就職	37	16	53	47	27	74	49	18	67	38	26	64	47	28	75			
その他※	8	0	8	6	4	10	7	3	10	7	3	10	8	4	12			
進学率 (%)	37.5	38.5	37.8	43.6	38.0	41.7	39.1	25.0	35.8	43.0	23.7	36.8	38.2	15.8	31.5			
就職率 (%)	51.4	61.5	54.1	50.0	54.0	51.4	53.3	64.3	55.8	48.1	68.4	54.7	52.8	73.7	59.1			

※「その他」の主な内訳：外国の学校等へ入学した者、進学準備、就職準備、帰国留学生、一時的な仕事に就いた者、進路について大学に届け出のない者等

【資料 2-7】就職状況（総合人間学部）

（職業別就職状況）

修了年度		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
b 専門的・ 技術的 職業従事者	3 製造技術者（開発）		1			1	2
	4 製造技術者（開発除く）				1		1
	5 建築・土木・測量技術者		1				1
	6 情報処理・通信技術者	4	8	7	15	3	37
	7 その他の技術者	1	1				2
	8 教員（高等教育）	1					1
	8 教員（高等教育以外）			2		2	4
	11 医療技術者	1					1
	13 美術・写真・デザイナー・音楽・舞台	2			1	3	6
	14 その他	2	3	3	3	4	15
a 管理的職業従事者	8	5	7	4	6	30	
c 事務従事者	7	11	8	14	15	55	
d 販売従事者	3	3	4	4	7	21	
e サービス職業従事者	4	6	10	10	10	40	
f 保安職業従事者					1	1	
g 農林漁業従事者			1	1		2	
h 生産工程従事者	1				1	2	
上記以外	19	35	25	11	22	112	
合計	53	74	67	64	75	333	

（産業別就職状況）

修了年度		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
A,B	農業・林業・漁業			1		0	1
D	建設業		1	3		4	8
E	製造業	9	8	4	6	8	35
F	電気・ガス・熱供給・水道業	1	1				2
G	情報通信業	15	25	13	22	17	92
H	運輸業、郵便業		2	3	1	1	7
I	卸売業・小売業		4	4	3	2	13
J	金融業・保険業	6	8	8	7	4	33
K	不動産業、物品賃貸業	2	1	1	1	3	8
L	学術研究、専門・技術サービス業	10	13	16	17	18	74
M	宿泊業・飲食サービス業					2	2
N	生活関連サービス業・娯楽業					2	2
O	教育、学習支援業	1	3	4	3	5	16
P	医療、福祉		2			1	3
R	宗教・その他のサービス業	3	1	2		1	7
S	国家公務・地方公務	6	5	4	3	5	23
	上記以外			4		2	6
	不明（大学に届け出のない者）				1		1
合計		53	74	67	64	75	333

【資料 2-8】資格取得状況 (総合人間学部)

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	
教員免許状	中学校免許状一種	国語	1				
		社会	2	1	2	1	
		数学	2		1	3	
		理科		1			
		保健体育					
		英語	2		2	1	
		ドイツ語					
		フランス語					
		合計 (延べ数)	6	2	6	3	4
	高等学校免許状一種	国語		1	1		
		地理歴史	3	1	2	2	
		公民	3	1	1	1	
		数学	2		1		3
		理科		1	1		1
		保健体育		1			
		情報	1				
		英語	3		3	1	
		ドイツ語					
		フランス語					
合計 (延べ数)	12	5	9	4	4		
免許数合計		18	7	15	7	8	
教員免許状取得者実数		7	4	7	3	4	
学芸員・司書	司書 (免許数)	1	0	0	0	0	
	学芸員 (免許数)	0	2	0	1	2	
	取得者数実数	1	2	0	1	2	

京都大学 ホームページ
 ホーム > 教育・学生支援 > 教育の体制と内容 > 中学・高校の教員免許
 卒業者の教員免許状の取得および教員への就職の状況
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/education-campus/curriculum/teaching>

【資料 2-9】留学生の受入状況 (総合人間学部)

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	
国費留学生 (正規生) (外国政府派遣留学生を含む)	入学者	2	1	2	2	1	
	在籍者	7	7	7	7	5	
Kyoto iUP (吉田カレッジオフィス)*1	入学者	1	1	0	1	0	
	在籍者	1	2	2	2	2	
特別聴講学生 (大学間学生交流協定による交換留学生)	KUINEP *2	入学者	4				
		在籍者	19				
	KUINEP を除く	入学者	1	1	7	6	2
		在籍者	6		7	10	0
短期交流学生*3		0	0	1	1		
合計	入学者	8	3	10	10	3	
	在籍者	33	9	17	20	7	

*1 Kyoto iUP (Kyoto University International Undergraduate Program)
 優秀で志の高い留学生の学部段階での受入れの促進するため、入学段階で日本語能力を問わず、入学決定後に徹底した日本語教育を継続して実施し、専門教育段階では日本人学生と共に日本語での講義を受講する留学生向け教育プログラム。正規の4年の学部教育期間に加え、半年の予備教育期間を設けている。2018年第1期生受入れ。(国際高等教育院 HP より転載)

*2 KUINEP (Kyoto University International Education Program 京都大学国際教育プログラム)
 本学創立100周年の1997(平成9)年に始まった。学生交流協定を締結している大学より、半年から1年間、留学生を受け入れている。協定校の学部生が本学の学生とともに英語で講義される科目を履修するプログラム。2020(令和2)年10月より特別聴講学生として国際高等教育院に配属。

*3 短期交流学生：交流協定に基づかない3ヵ月以内の受入外国人学生

【資料 2-10】日本人学生の留学状況 (総合人間学部)

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
大学間学生交流協定による派遣	2	1	5	13	14
語学研修、インターンシップ、ボランティア、学会出席等	0	1	4	4	7
国際交流科目への参加	0	0	0	0	6
大学が企画する各種短期留学プログラムへの参加	0	0	1	5	11
合計	2	2	10	22	38

【資料 2-11】外国の大学において修得した単位の認定状況 (総合人間学部)

国・地域	大学名	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
人数 (単位数)						
北米						
アメリカ合衆国	ノースイースタン大学					1 (22)
アメリカ合衆国	ワシントン大学					1 (18)
アメリカ合衆国	ジョージ・ワシントン大学					1 (12)
アメリカ合衆国	SJC (スタンフォード日本センター)					1 (2)
欧州 (NIS 諸国を含む)						
英国	エディンバラ大学	1 (17)				
英国	グラスゴー大学				1 (12)	
英国	ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン					1 (12)
英国	リーズ大学		1 (6)			
オーストリア共和国	ウィーン大学					1 (9)
オーストリア共和国	ニューサウスウェールズ大学					1 (11)
オランダ王国	フローニンゲン大学					1 (25)
オランダ王国	ユトレヒト大学	1 (20)				
オランダ王国	ライデン大学					
スペイン王国	バルセロナ大学				1 (20)	
ドイツ連邦共和国	ハイデルベルク大学					1 (22)
ドイツ連邦共和国	ボン大学	1 (13)				
ハンガリー	エトヴェシュ・ロラード大学					1 (14)
フィンランド共和国	ヘルシンキ大学	1 (9)				
ルクセンブルク大公国	ルクセンブルク大学					1 (16)
大洋州						
オーストラリア連邦	オーストラリア国立大学				1 (24)	
オーストラリア連邦	シドニー大学	1 (11)				
ニュージーランド	オタゴ大学	1 (11)				
中東						
イスラエル国	ハイファ大学	1 (21)				
イスラエル国	ヘブライ大学	1 (12)				
	合計人数	8	1	0	3	12

・留学期間ではなく単位認定を行った年度で表示

【資料 2-12】「研究を他者に語る」実施アンケート結果

研究を他者に語る

総合人間学部では、各学生が、自身とは異なる学問分野を専門とする教員に向かって、研究内容を発表する「研究を他者に語る」と題した取組みを行っています。自分が取り組んでいる研究の内容を異分野の教員に対して「説得的に」語ることで、学術の知とその意義を専門外の人にわかりやすく語るコミュニケーション能力を身につけるとともに、自分の研究を相対化し客観視することで、多様かつ総合的な視点で物事を観る能力を培うことを目指します。

学生へのアンケート

		2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
全体		144			
回答数		61	-	125	53
回答率		42.4%			
「研究を他者に語る」についてどう思いましたか。	① とても有意義に感じた	21.3	-	48.0	24.5
	② 有意義に感じた	52.5	-	28.8	47.2
	③ ふつう	23.0	-	19.2	18.9
	④ あまり有意義に感じなかった	3.3	-	4.0	9.4
あなたが興味をもって研究し、楽しいと感じたことを相手に伝えられたと思いますか。	① 自分の研究成果と共にその楽しさを伝えられたと思う	-	-	51.6	50.0
	② 研究は伝わらなかったが、楽しいことは伝わったと思う	-	-	25.0	22.2
	③ 事実は伝えたが、楽しさは伝えられなかったと思う	-	-	12.9	22.2
	④ よくわからない	-	-	10.5	5.6

聞き役教員へのアンケート

		2021 (R2)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
全体		134			
回答数		72	-	70	89
回答率		53.7%			
「研究を他者に語る」についてどう思いましたか。	① とても有意義に感じた	34.7	-	34.3	31.5
	② 有意義に感じた	52.8	-	47.1	50.6
	③ ふつう	8.3	-	12.0	11.2
	④ あまり有意義に感じなかった	4.2	-	6.6	6.7

【資料 2-13】総合人間学部 授業評価アンケート結果

		2020(R2)		2021(R3)		2022(R4)	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期
	開講年度	2020	2020	2021	2021	2022	2022
	対象科目	263	245	261	251	265	244
	履修者数	3,024	2,226	2,846	2,238	2,765	2,277
	回答者数	573	312	584	338	560	294
	回答率	18.9	14.0	20.5	15.1	20.3	12.9
【1】この授業を履修しようと思ったのはなぜですか (複数回答可)	A. シラバスを読んで興味が湧いた	80.3	97.1	82.7	79.0	74.3	75.2
	B. 指導教員の授業だから	8.7	14.3	10.3	7.1	9.6	8.5
	C. 卒業要件に必要なだから	29.1	31.0	27.6	25.4	35.2	23.1
	D. 教員免許等の資格取得に必要な授業だから	7.5	16.3	8.6	8.3	9.8	12.2
	E. その他	0.9	0.8	0.9	1.8	1.6	1.7
	F. 無回答	0.2	0.4	0.3	0.0	0.2	0.0
	【2】この授業はどのような形式でしたか (複数回答可)	A. 教員による講義	74.7	69.2	83.6	76.9	81.8
B. 学生による発表		15.0	8.3	17.5	9.2	18.4	9.9
C. 特定のテーマについての討論		15.9	10.9	14.7	7.1	15.2	9.2
D. 文献の輪読		7.3	4.8	6.0	5.0	7.9	5.1
E. その他		7.3	0.3	3.4	0.6	3.4	0.7
F. 無回答		0.2	6.4	0.3	1.2	0.4	4.1
【3】この授業の内容についてどれくらい興味を持っていましたか		A. 非常におもしろく興味が持てた	34.6	38.3	40.0	42.4	39.6
	B. かなりおもしろく興味が持てた	42.3	40.2	39.3	37.9	34.3	35.1
	C. 少しはおもしろく興味が持てた	20.0	18.4	17.2	17.4	19.5	19.6
	D. あまりおもしろくなく興味が持てなかった	2.4	1.3	1.9	1.5	4.0	2.7
	E. まったくおもしろくなく興味が持てなかった	0.3	0.6	1.2	0.6	1.6	1.0
	F. その他	0.2	0.6	0.3	0.3	0.7	0.3
	G. 無回答	0.2	0.3	0.2	0.0	0.2	0.0
【4】この授業の内容をどの程度理解できましたか	A. とてもよく理解できた	20.8	20.4	24.0	23.9	22.5	29.0
	B. かなり理解できた	30.9	41.1	34.8	34.1	29.5	23.9
	C. まずまず理解できた	42.4	34.2	36.1	36.4	39.7	43.8
	D. あまり理解できなかった	4.5	3.1	3.9	5.0	5.8	3.0
	E. まったく理解できなかった	0.9	0.6	0.7	0.6	1.4	0.0
	F. その他	0.5	0.3	0.3	0.0	1.1	0.3
	G. 無回答	0.0	0.3	0.2	0.0	0.0	0.0
【5】この授業はあなたの問題発見能力や問題解決能力に役立ちましたか	A. 大いに役立った	35.6	37.4	41.4	39.8	35.9	37.7
	B. ある程度役立った	42.7	38.1	39.7	39.5	38.9	43.4
	C. 少しは役立った	18.8	19.2	15.4	16.5	17.6	13.8
	D. あまり役立たなかった	2.4	3.8	2.4	2.9	5.5	4.0
	E. まったく役立たなかった	0.5	0.6	0.8	0.9	1.4	0.7
	F. その他	0.0	0.6	0.2	0.0	0.7	0.0
	G. 無回答	0.0	0.3	0.0	0.3	0.0	0.3
計		100.0	100.0	99.9	99.9	100.0	99.9
【6】この授業の配布資料、OHPやPower Pointによる画像資料、板書などの分量と質は妥当なものでしたか	A. とてもよいものだった	33.9	33.7	38.0	42.3	36.7	48.3
	B. かなりよいものだった	43.3	46.2	41.3	36.1	36.7	33.7
	C. まずまずのものだった	19.4	18.3	17.8	18.6	23.6	13.9
	D. あまりよくなかった	2.6	1.0	2.2	2.4	2.3	3.1
	E. 非常に悪かった	0.7	0.3	0.5	0.3	0.5	0.7
	F. 無回答	0.2	0.6	0.2	0.3	0.2	0.3

	2020(R2)		2021(R3)		2022(R4)		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
【7】この授業に何回出席しましたか。現在までの回数を書いてください	A. 13回以上 B. 10回以上13回未満 C. 7回以上10回未満 D. 4回以上7回未満 E. 4回未満 F. 無回答	14.7 60.6 13.3 5.4 4.7 1.4	45.8 47.1 3.2 1.3 0.6 1.9	56.2 37.5 3.9 1.0 0.3 1.0	42.6 42.3 10.7 3.0 0.3 1.2	47.4 37.6 8.6 3.4 2.0 1.1	39.8 44.9 10.2 2.4 2.4 0.3
【8】この授業の予習、復習、課題などのためにどれくらいの時間をかけましたか。学期を通じての1週間あたりの平均時間を30分単位で書いてください	A. 3時間以上 B. 2時間以上3時間未満 C. 1時間以上2時間未満 D. 0.5時間以上1時間未満 E. 0.5時間未満 F. 無回答	17.3 21.5 38.4 18.7 3.0 1.2	6.7 13.5 36.2 33.7 8.0 1.9	10.6 12.8 35.1 30.5 9.8 1.2	8.6 13.3 26.6 37.9 13.0 0.6	5.0 10.2 27.2 33.3 22.2 2.1	4.8 7.5 27.2 41.5 18.0 1.0
【9】シラバスを活用しましたか	A. はい B. いいえ、またはどちらともいえない C. 無回答	79.4 20.6 0.0	72.1 27.6 0.3	77.2 22.8 0.0	78.4 21.0 0.6	81.4 18.6 0.0	82.7 16.7 0.7
【10】「はい」と回答した人は以下から選んでください。(複数回答可)	A. 科目選択・履修登録に活用した B. 予習・復習に活用した C. 受講にあたり授業中などに活用した D. 試験・レポートに活用した E. その他 F. 無回答	97.8 4.6 3.5 5.1 0.0	95.6 2.7 4.0 5.8 0.0	98.2 6.7 4.7 4.0 0.0	95.8 6.4 4.2 10.6 0.0	97.1 4.8 7.0 7.5 0.0	94.7 6.6 4.9 9.5 0.0
【11】シラバスの情報は十分なものでしたか(活用の有無にかかわらず答えてください)	A. はい B. いいえ C. 無回答	97.6 2.3 0.2	97.4 1.6 1.0	97.1 2.4 0.5	97.6 2.1 0.3	95.9 3.2 0.9	97.6 2.4 0.0
【12】「いいえ」と答えた人は以下から選んでください。(複数回答可)	A. 「授業の概要・目的」の情報が不十分 B. 「授業計画と内容」の情報が不十分 C. 「履修要件」の情報が不十分 D. 「成績評価の方法・観点及び達成度」の情報が不十分 E. 「教科書」及び「参考書」の情報が不十分 F. 「その他」の情報が不十分 G. その他	15.4 53.8 7.7 30.8 0.0 0.0 0.0	0.0 80.0 0.0 20.0 0.0 0.0 0.0	14.3 85.7 0.0 21.4 14.3 7.1 7.1	0.0 42.9 0.0 57.1 0.0 0.0 0.0	22.2 61.1 0.0 33.3 16.7 0.0 0.0	14.3 57.1 0.0 42.9 14.3 0.0 14.3
【13】この授業の到達目標に照らして達成できたかどうか、ご自身の判断を以下より1つ選択してください	A. 十分達成できた(概ね9割以上) B. ほぼ達成できた(概ね8割以上) C. どちらともいえない D. やや達成(概ね8割未満)できなかった E. 達成(概ね6割未満)できなかった F. 無回答	27.7 60.2 - 10.3 1.6 0.2	26.0 59.0 12.5 1.9 0.3 0.3	31.0 61.3 - 5.8 1.2 0.7	29.9 53.6 13.6 2.1 0.6 0.3	32.1 56.1 - 8.6 3.0 0.2	28.9 51.4 16.0 3.1 0.3 0.3
【14】上の13で学習の達成度が「達成できなかった」又は「やや達成できなかった」の場合は達成できなかった理由を、以下より選択してください。(複数選択可)	A. 授業の速度が速かったため B. 予習・復習に十分時間を取ることができなかったため C. 説明がわかりにくかったため D. 特になし E. その他 F. 無回答	5.9 51.5 16.2 13.2 14.7	14.3 28.6 14.6 28.6	14.6 53.7 29.3 14.6 4.9	33.3 55.6 22.2 0.0 0.0	13.8 46.2 21.5 20.0 10.8	0.0 40.0 10.0 30.0 10.0

【資料 2-14】① 総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 1 回生

①総合人間学部 1 回生

		進学年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024 (R6)
		在籍者数	125	124	126	125	124
		回答者数	124	124	123	121	122
		回答率	99.2%	100.0%	97.6%	96.8%	98.4%
【1】総合人間学部を選択した理由は何ですか(複数回答可)	1. 勉強したい学問分野が本学部にあったから		55.6	50.0	43.1	40.5	48.4
	2. 入試の難易度が自分の実力に合致していたから		16.9	21.0	24.4	19.0	20.5
	3. かなり幅広く何でも勉強できそうだから		88.7	94.4	93.5	84.3	86.9
	4. 卒業後の就職を考えて		1.6	8.1	4.9	1.7	4.1
	5. 大学院への進学を考えて		6.5	5.6	3.3	2.5	7.4
	6. 高校や予備校の先生に勧められたから		5.6	4.8	3.3	5.0	3.3
	7. 親や親戚など周囲の人に勧められたから		6.5	4.0	2.4	2.5	6.6
	8. その他		5.6	2.4	3.3	6.6	
【2】受験に際して、総合人間学部の教育内容について十分な情報を得ることができましたか	1. 十分情報を得ることができた		35.8	28.6	39.0	37.3	30.3
	2. 少しは情報を得ることができた		55.3	63.5	50.4	53.2	60.7
	3. あまり情報を得ることができなかった		8.9	7.9	10.6	7.9	9
	無回答					1.6	
【3】総合人間学部の「オープン・キャンパス」について知っていますか	1. 参加した・オープンキャンパスサイトを閲覧した		41.1	26.6	29.3	16.3	16.4
	2. 参加しなかったが、知っていた		46.8	43.5	37.4	41.5	48.4
	3. 知らなかった		12.1	29.8	33.3	40.7	35.2
	無回答					1.5	
【4】貴方自身についてお尋ねします。							
①総合人間学部を受験したのは、現役でしたか？浪人でしたか	現役		61.3	61.8	69.7	67.5	64.5
	浪人		37.1	35.0	30.3	30.1	35.5
	無回答		1.6	3.2		2.4	
②総合人間学部受験は、何回目ですか(いわゆる浪人の方)	1回目		29.0	33.9	37.5	37.4	41.9
	2回目		45.2	41.9	44.2	39.8	51.2
	3回目		8.9	7.3	8.3	8.9	4.7
	その他		15.3	13.7	10.0	12.2	2.3
③総合人間学部を受験することを決めたのはいつですか	1. 高校2年生までに決めた		29.0	33.9	37.5	37.4	39.3
	2. 高校3年生の秋までに決めた		45.2	41.9	44.2	39.8	39.3
	3. 大学入試センター試験の後に決めた		8.9	7.3	8.3	8.9	8.2
	4. その他		15.3	13.7	10.0	12.2	13.1
	未記入		1.6	3.2		1.6	
【5】現在の気持ちに近いものに、いくつでも○をつけてください(複数回答)	1. 思い切り勉強したい		72.6	63.7	69.9	74.8	65.6
	2. 思い切りのんびり楽しみたい		57.3	62.1	68.3	58.5	63.1
	3. サークル活動を始めたい		54.0	43.5	56.9	61.0	60.7
	4. 新しい友人をつくりたい		77.4	72.6	74.8	74.0	69.7
	5. 先生と話したい		37.1	30.6	32.5	36.6	36.9
	6. アルバイトに精を出したい		25.8	23.4	19.5	26.0	32
	7. その他		2.4	2.4	6.5	3.3	6.6

【資料 2-14】② 総合人間学部 2 回生アンケート結果 2 回生

② 総合人間学部 2 回生

(出典: 総合人間学部 在学生・卒業生アンケート)

		進学年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024 (R6)
		在籍者数	130	128	126	125	127
		回答者数	72	105	103	94	90
		回答率	55.4%	82.0%	81.7%	75.2%	70.9%
【1】単位の取得状況はどうですか	1. ほぼ順調に取得している		84.7	81.9	88.3	81.9	82.2
	2. あまり取得できなかった		15.3	16.2	8.7	17.0	17.8
	3. その他		0.0	1.9	2.9	1.1	0.0
	無回答						
【2】授業を含めて週に何時間ぐらい大学で勉強していますか? ※オンライン授業を含む	1. 20時間未満		15.3	58.1	18.4	20.2	15.2
	2. 20~30時間未満		50.0	23.8	52.4	37.2	47.8
	3. 30~40時間未満		20.8	14.3	20.4	29.8	31.5
	4. 40~50時間未満		13.9	2.9	7.8	8.5	4.3
	5. 50時間以上		0.0	1.0	1.0	3.2	1.1
	無回答				1.1		
【3】学外で週に何時間ぐらい勉強していますか? ※オンライン授業は含まない	1. 5時間未満		48.6	32.4	36.9	40.4	44.4
	2. 5~10時間未満		29.2	31.4	45.6	39.4	44.4
	3. 10~15時間未満		9.7	16.2	13.6	11.7	5.6
	4. 15~20時間未満		9.7	3.8	1.0	3.2	2.2
	5. 20時間以上		2.8	16.2	2.9	3.2	2.2
	無回答				2.1	1.1	
【4】授業についてどう思いますか	1. 有益な授業が多い		56.9	53.3	69.9	61.7	57.8
	2. 有益な授業も少しはある		41.7	43.8	29.1	36.2	38.9
	3. 有益な授業はほとんどない		1.4	2.9	1.0	1.1	3.3
	無回答					1.0	
【5】授業のカリキュラムについて、どう思います	1. ほぼ今のままでよい		60.6	62.9	62.5	68.8	66.7
	2. もっと学系ごとに履修すべき科目を提示してほしい		31.0	29.5	30.8	23.7	30.0
	3. その他		8.5	7.6	6.7	7.5	2.2
	無回答						1.1
【6】自分の教員アドバイザーを訪れたことはありますか?	1. ある		17.1	22.9	14.6	23.4	16.7
	2. ない		68.6	74.3	81.6	72.3	82.2
	3. 誰がアドバイザーか知らない		14.3	1.9	3.9	2.1	1.1
	無回答			0.9		2.2	
【7】卒業論文/卒業研究指導教員を決定する時期について、いつにすべきだと思いますか?	1. 4回生になったとき		11.4	20.0	22.1	13.8	15.6
	2. 3回生の後期開始時点		52.9	47.6	44.2	51.1	51.1
	3. 3回生になったとき		31.4	27.6	28.8	26.6	28.9
	4. もっと早い時期		2.9	1.0	4.8	4.3	2.2
	5. その他		1.4	2.9	0.0	1.1	1.1
	無回答			0.9	3.1	1.1	
【9】分属の時期について、いつにすべきだと思いますか	1. 今のまま (1回生の*月)		78.6	81.9	84.2	79.1	74.4
	2. もっと早く		1.4	1.9	0.0	2.2	1.1
	3. もっと遅く (具体的に 回生 月ごろ)		20.0	16.3	15.8	18.7	24.4

【資料 2-14】③ 総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 3 回生

③総合人間学部 3 回生

		進学年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024 (R6)
		在籍者数	134	133	130	127	125
		回答者数	68	105	108	91	93
		回答率	50.7%	78.9%	83.1%	71.7%	74.4%
【1】単位の取得状況はどうですか	1. 卒業論文／卒業研究を除いて、今年度でほぼ必要単位を取得できる見込み		67.6	60.0	58.3	69.2	67.7
	2. あと2年かければ必要単位を取得できる見込み		29.4	35.2	36.1	26.4	26.9
	3. あと2年では必要単位を取得するのは困難		1.5	1.9	4.6	2.2	3.2
	4. それ以外		1.5	2.9	0.9	2.2	2.2
	無回答						
【2】授業を含めて週に何時間ぐらい大学で勉強していますか？※オンライン授業を含む	1. 20時間未満		27.9	41.9	30.6	23.1	29.8
	2. 20～30時間未満		48.5	34.3	45.4	47.3	48.9
	3. 30～40時間未満		17.6	17.1	13.9	24.2	13.8
	4. 40～50時間未満		4.4	5.7	9.3	4.4	3.2
	5. 50時間以上		1.5	1.0	0.9	1.1	4.3
	無回答						
【3】学外で週に何時間ぐらい勉強していますか？※オンライン授業は含まない	1. 5時間未満		47.1	36.2	38.9	40.7	45.2
	2. 5～10時間未満		35.3	38.1	39.8	40.7	32.3
	3. 10～15時間未満		8.8	11.4	11.1	13.2	8.6
	4. 15～20時間未満		2.9	3.8	3.7	3.3	7.5
	5. 20時間以上		5.9	10.5	6.5	2.2	6.5
	無回答						
【4】授業についてどう思いますか	1. 有益な授業が多い		64.7	59.0	63.0	65.9	66.7
	2. 有益な授業も少しはある		35.3	39.0	37.0	34.1	32.3
	3. 有益な授業はほとんどない		0.0	1.9	0.0	0.0	1.1
	無回答						
【5】自分の教員アドバイザーを訪れたことはありますか	1. ある		52.9	20.0	49.1	39.6	43.0
	2. ない		39.7	75.2	47.2	53.8	53.8
	3. 誰がアドバイザーか知らない		7.4	4.8	2.8	4.4	3.2
	無回答				0.9	2.2	
【6】卒業論文／卒業研究指導教員を決定する時期について、いつにすべきだと思いますか	1. 4回生になったとき		16.2	23.8	18.5	28.6	20.4
	2. 3回生の後期開始時点		61.8	60.0	63.9	49.5	54.8
	3. 3回生になったとき		17.6	12.4	14.8	17.6	24.7
	4. もっと早い時期		1.5	1.0	0.0	0.0	0.0
	5. その他		2.9	1.9	1.9	2.2	0.0
	無回答			0.9	0.9	2.1	
【7】授業のカリキュラムについて、どう思います	1. ほぼ今のままでよい		70.6	67.6	67.6	67.0	69.9
	2. もっと学系ごとに履修すべき科目を提示してほしい		23.5	24.8	26.9	27.5	22.6
	3. その他		5.9	7.6	4.6	3.3	7.5
	無回答				0.9	2.2	

【資料 2-14】④ 総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 4 回生

④ 総合人間学部 4 回生

		進学年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024 (R6)
		在籍者数	182	209	195	201	206
		回答者数	61	118	101	117	92
		回答率	33.5%	56.5%	51.8%	58.2%	44.7%
【1】授業を含めて週に何時間ぐらい大学で勉強していますか？※オンライン授業を含む	1. 20時間未満		62.3	64.4	55.4	54.7	58.7
	2. 20～30時間未満		29.5	19.5	26.7	23.1	29.0
	3. 30～40時間未満		3.3	11.0	10.9	14.5	8.0
	4. 40～50時間未満		4.9	2.5	4.0	4.3	1.0
	5. 50時間以上		0.0	2.5	3.0	3.4	3.0
【2】学外で週に何時間ぐらい勉強していますか？※オンライン授業は含まない	1. 5時間未満		50.8	28.8	32.7	29.9	42.4
	2. 5～10時間未満		21.3	36.4	40.6	34.2	31.5
	3. 10～15時間未満		13.1	15.3	11.9	17.9	15.2
	4. 15～20時間未満		4.9	4.2	5.0	6.8	3.3
	5. 20時間以上		9.8	14.4	9.9	11.1	6.5
	無回答			0.9			1.1
【3】卒業論文／卒業研究の指導教員は決まっていますか	1. 決まっている		80.3	93.2	88.1	82.1	84.0
	2. まだ決まっていない		14.8	14.8	8.9	11.1	9.8
	3. 今年度は卒業論文／卒業研究に入らない		0.0	0.0	3.0	4.3	4.4
	4. その他		4.9	4.9	0.0	2.6	1.8
【4】卒業論文／卒業研究のテーマ（方向性）は決まっていますか	1. ほぼ決まっている		21.3	26.3	21.8	24.8	31.5
	2. 決まりつつある		34.4	39.8	40.6	47.0	33.7
	3. まだ決まっていない		41.0	33.1	37.6	26.5	32.6
	4. その他		3.3	0.8	0.0	0.8	2.2
	無回答				0.9		
【5】単位の取得状況はどうですか	1. 卒業論文／卒業研究を除いて、ほぼ必要単位を取得済み		44.3	58.5	55.4	45.3	50.0
	2. 今年度ですべての必要単位を取得できる見込み		47.5	36.4	33.7	42.7	38.0
	3. 今年度では、必要単位を全部取得することは困難		6.6	5.1	9.9	9.4	10.9
	4. それ以外		1.6	0.0	1.0	2.6	1.1
【6】就職活動はどうですか	1. すでに内定の感触をつかんだ		13.9	15.4	13.9	18.8	15.2
	1a. すでに内定の感触をつかんだが、さらに就職活動を続けている		6.9	5.6	6.9	0.9	
	2. 現在、就職活動を続けている		26.7	37.6	26.7	29.9	38.0
	3. 就職活動をしようにも手がかりがつかめず困っている		20.8	7.7	20.8	12.8	15.2
	4. 就職をする意思はない		46.5	39.3	46.5	35.9	31.5
	4a. 就職をする意思はなく、大学院進学を希望		34.7	36.8	34.7	28.2	28.3
	無回答		1.0	1.0			
【7】大学院進学への準備はどうですか(複数回答可)	1. 人間・環境学研究科を受験予定		32.7	33.1	32.7	35.0	22.0
	2. 京都大学の人環以外の研究科を受験予定		12.9	12.7	12.9	14.5	5.9
	3. 他大学の研究科を受験予定		6.9	8.5	6.9	5.1	5.1
	4. 大学院進学を希望はない		53.5	52.5	53.5	53.0	46.6
	4a. 大学院進学を希望はなく、就職活動は行っている		17.8	41.9	17.8	29.1	15.3
	無回答		1.0	0.8	1.0	6.0	5.1
【8】就職活動や大学院進学について相談できる教員や事務職員はいますか	1. いる		55.0	55.9	57.8	57.3	54.3
	2. いない		31.7	27.1	30.4	31.6	30.4
	3. 不必要		13.3	14.4	10.8	10.3	14.1
	4. その他		0.0	0.0	1.0	0.0	0.0
	無回答			2.5		0.9	1.1

【資料 2-14】⑤ 総合人間学部 在学生・卒業生アンケート結果 卒業生

⑤総合人間学部卒業生

		卒業時期	R2年3月	R3年3月	R4年3月	R5年3月	R6年3月
		卒業年度	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)
		卒業者数	125	98	144	120	117
		回答者数	94	85	107	89	94
		回答率	75.2%	86.7%	74.3%	74.2%	80.3%
【1】授業を含めて週に何時間ぐらい大学で勉強していますか？※オンライン授業を含む	1. 20時間未満		35.4	45.9	39.3	41.6	34.4
	2. 20～30時間未満		38.1	34.1	33.6	29.2	40.9
	3. 30～40時間未満		20.4	16.5	17.8	22.5	18.3
	4. 40～50時間未満		2.7	2.4	6.5	3.4	4.3
	5. 50時間以上		3.5	1.2	1.9	3.4	2.2
	無回答				0.9		
【2】学外で週に何時間ぐらい勉強していますか？※オンライン授業は含まない	1. 5時間未満		41.6	38.8	35.5	42.7	32.3
	2. 5～10時間未満		26.5	42.4	32.7	34.8	36.6
	3. 10～15時間未満		22.1	10.6	15.0	9.0	19.4
	4. 15～20時間未満		3.5	2.4	4.7	5.6	6.5
	5. 20時間以上		6.2	5.9	11.2	6.7	5.4
	無回答				0.9	1.1	
【3】授業から得るものは大きかったですか	1. 大きかった		47.8	51.3	49.0	48.9	46.2
	2. 大きいとは言えないが、得るものがあった		36.3	39.8	37.0	34.4	43.0
	3. ある程度は得るものがあった		14.2	7.1	12.0	14.4	9.7
	4. 得るものはあまりなかった		1.8	1.8	2.0	2.2	1.1
	無回答						
【4】卒業論文／卒業研究から得るものは大きかったですか	1. 大きかった		71.7	67.3	71.0	68.9	71.0
	2. 大きいとは言えないが、得るものがあった		20.4	25.7	24.0	22.2	25.8
	3. ある程度は得るものがあった		4.4	7.1	4.0	5.6	2.2
	4. 得るものはあまりなかった		3.5	0.0	1.0	3.3	1.1
	無回答						
【5】卒業論文／卒業研究指導教員を決定する時期について、いつにすべきだと思いますか	1. 4年生になったとき		17.7	22.1	19.0	16.9	17.2
	2. 3年生の後期開始時点		39.8	38.9	44.0	44.9	40.9
	3. 3年生になったとき		33.6	33.6	31.0	30.3	32.3
	4. もっと早い時期		6.2	5.3	4.0	3.4	6.5
	5. その他		2.7	0.0	1.0	4.5	3.2
	無回答				1.0		
【6】副専攻から得るものは大きかったですか	1. 大きかった		39.8	37.2	39.0	38.9	24.7
	2. 大きいとは言えないが、得るものがあった		34.5	36.3	41.0	37.8	52.7
	3. ある程度は得るものがあった		19.5	11.5	17.0	17.8	14.0
	4. 得るものはあまりなかった		6.2	15.0	3.0	5.6	8.6
	無回答						
【7】入学から卒業時までに学生が身に付けるべき知識や能力（ディプロマ・ポリシー）が大学から明示されていることを認識していましたか	1. よく認識していた						4.3
	2. ある程度認識していた						33.3
	3. あまり認識していない						50.5
	4. 全く知らなかった						11.8
	無回答						
【8】総合人間学部ディプロマ・ポリシーに掲げる以下の能力について、どれくらい身につきましたか							
(8-1) 幅広い知識と教養	1. かなり身についた		24.8	31.8	29.0	32.6	19.4
	2. ある程度身についた		61.1	56.5	58.9	56.2	69.9
	3. あまり身につかなかった		14.2	9.4	11.2	10.1	10.8
	4. まったく身につかなかった		0.0	2.4	0.0	1.1	0.0
	無回答				0.9		
(8-2) プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力	1. かなり身についた		16.8	14.1	17.8	16.9	18.3
	2. ある程度身についた		50.4	43.5	50.5	55.1	57.0
	3. あまり身につかなかった		29.2	35.3	27.1	24.7	22.6
	4. まったく身につかなかった		3.5	7.1	3.4	3.4	2.2
	無回答				0.9		

⑤総合人間学部卒業生		卒業時期	R2年3月	R3年3月	R4年3月	R5年3月	R6年3月
		卒業年度	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)
(8-3) リーダーシップ	1. かなり身についた		10.6	12.9	11.2	16.9	7.5
	2. ある程度身についた		38.1	29.4	32.7	36.0	49.5
	3. あまり身につかなかった		46.9	42.4	43.0	41.6	33.3
	4. まったく身につかなかった		4.4	15.3	12.1	5.6	9.7
	無回答				0.9		
(8-4) 専門的分野の知識と理解力	1. かなり身についた		22.1	27.1	30.8	22.5	16.1
	2. ある程度身についた		60.2	58.5	45.8	65.2	72.0
	3. あまり身につかなかった		15.9	10.6	15.9	7.9	9.7
	4. まったく身につかなかった		0.0	0.0	0.9	1.1	2.2
	無回答		1.8	3.5	6.5	3.4	
(8-5) 多角的な視点や柔軟な発想力	1. かなり身についた		32.7	40.0	27.4	39.3	25.8
	2. ある程度身についた		57.5	49.4	52.8	44.9	68.8
	3. あまり身につかなかった		8.0	7.1	12.3	10.1	4.3
	4. まったく身につかなかった		0.0	0.0	0.9	4.5	0.0
	無回答		1.8	3.5	6.6		1.1
【9】総合人間学部の教育について、どう思いますか	1. ほぼ現状のままでよい		61.9	64.7	61.7	51.7	58.1
	2. 改善すべき点が残されている		31.0	28.2	29.9	42.7	39.8
	3. 抜本的に改善すべきである		5.3	2.4	1.9	1.1	1.1
	無回答		1.8	4.7	6.5	4.5	1.1
	【10】授業評価アンケート等を通じて学生の意見が反映され、大学教育が良くなっていると思いますか？						5.4
【11】教員が学生と向き合って教育研究に取り組んでいると思いますか	1. そう思う						44.1
	2. ある程度そう思う						39.8
	3. あまりそうは思わない						9.7
	4. そうは思わない						1.1
	無回答						35.5
【12】大学での学修によって成長を実感していますか	1. そう思う						59.1
	2. ある程度そう思う						3.2
	3. あまりそうは思わない						1.1
	4. そうは思わない						1.1
	無回答						38.7
【14】学生生活全般についてあなたの満足度は、どの程度ですか	1. 満足している		49.6	48.7	37.3	56.2	44.1
	2. ある程度満足している		38.1	38.1	43.8	34.0	47.3
	3. あまり満足していない		5.3	2.7	6.0	4.0	6.5
	4. 不満である		0.9	0.9	1.0	0.0	1.1
	無回答		6.2	8.8	12.0	6.0	1.1
【16】全学共通科目の学習を振り返って、入学当初と比べ、以下の項目はどの程度向上した又は得られたと思いますか	1. 大いに向上した		20	25	30	26	24
	2. ある程度向上した		69	61	57	57	68
	3. あまり向上しなかった		9	7	5	11	5
	4. 全く向上しなかった		0	2	1	2	1
	無回答		2	5	7	3	2
(16-1) 専門以外の幅広い知識・教養	1. 大いに向上した		26	22	22	27	17
	2. ある程度向上した		61	61	57	51	70
	3. あまり向上しなかった		11	7	11	17	9
	4. 全く向上しなかった		1	2	2	2	1
	無回答		2	5	8	3	3
(16-2) 専門分野で基礎となる学力	1. 大いに向上した		8	7	10	11	5
	2. ある程度向上した		35	31	30	30	32
	3. あまり向上しなかった		38	45	42	43	48
	4. 全く向上しなかった		17	12	9	11	11
	無回答		2	5	9	6	3
(16-3) 英語の能力（英語以外の言語を第1外国語とした方は、その言語の能力）	1. 大いに向上した		18	14	14	12	6
	2. ある程度向上した		38	36	44	48	46
	3. あまり向上しなかった		34	37	26	29	39
	4. 全く向上しなかった		9	8	8	7	5
	無回答		0	1	0	0	0
(16-4) 初修外国語の能力	1. 大いに得られた		31	24	23	34	22
	2. ある程度得られた		46	46	51	46	54
	3. あまり得られなかった		18	20	13	15	17
	4. 全く得られなかった		3	5	5	2	4
	無回答		3	5	8	3	3

【資料 2-15】総合人間学部 卒業生 (卒業後 3 年目) アンケート結果

調査実施年度		2020 (R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
卒業時期	H29(2017)年 3月	H30(2018)年 3月	H31(2019)年 3月	R2(2020)年 3月	R3(2021)年 3月	
回答期間		2021年 5月12日～ 6月11日	2022年 6月1日～ 6月19日	2023年 5月16日～ 6月15日	2024年 5月24日～ 6月15日	
全卒業生数		125	140	121	98	
調査対象者数 (卒業時に、メールアドレス利用の同意を取得)		96	73	79	76	61
回答者数		29	15	27	31	12
回答率		30.2%	20.5%	34.2%	40.8%	19.7%
【1】現在の身分についてお答えください	A. 学生	13.8	13.3	14.8	0.0	8.3
	B. 社会人	86.2	86.7	85.2	96.8	91.7
	C. その他	0.0	0.0	0.0	3.2	0.0
	D. 無回答					
【2】1で「学生」とお答えされた方にお聞きします。当てはまるのは次のうちどれですか	A. 京都大学	75.0	50.0	75.0	-	100.0
	B. 他大学	25.0	50.0	25.0	-	0.0
	C. その他	0.0	0.0	0.0	-	0.0
【3】1で「社会人」とお答えされた方にお聞きします。当てはまるのは次のうちどれですか	A. 就労者（非正規雇用を含む）	100.0	92.3	95.6	96.8	91.7
	B. 非就労者	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0
	C. 無回答			4.3	3.2	8.3
【4】本学での学習により身についた、卒業後に役立った能力を選択してください(複数選択可)	A. 幅広い教養・知識	96.6	80.0	85.2	87.1	83.3
	B. 専門的な知識と技術	31.0	33.3	25.9	16.1	41.7
	C. 国際性（外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力）	24.1	20.0	18.5	16.1	41.7
	D. 企画力、創造的思考力	24.1	26.7	25.9	35.5	50.0
	E. 実行力	13.8	33.3	11.1	22.6	16.7
	F. 協調性（チームワーク）	13.8	20.0	28.5	25.8	8.3
	G. コミュニケーション能力	13.8	13.3	29.6	35.5	25.0
	H. リーダーシップ	0.0	13.3	7.4	9.7	16.7
	I. たくましさ（問題解決力）	27.6	40.0	37.0	35.5	33.3
	J. 自己管理能力	31.0	53.3	22.2	32.3	50.0
	K. 倫理観	3.4	26.7	3.7	41.9	8.3
	L. その他	0.0	6.7	3.7	6.5	0.0
	M. 無回答			3.7		8.3
【6】本学での学習では身につかなかった能力を以下より選択してください(複数選択可)	A. 幅広い教養・知識	0.0	0.0	3.7	0.0	8.3
	B. 専門的な知識と技術	27.6	26.7	40.7	32.3	25.0
	C. 国際性（外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力）	27.6	33.3	25.9	38.7	33.3
	D. 企画力、創造的思考力	20.7	26.7	11.1	19.4	16.7
	E. 実行力	6.9	26.7	11.1	12.9	8.3
	F. 協調性（チームワーク）	24.1	46.7	44.4	25.8	41.7
	G. コミュニケーション能力	10.3	26.7	22.2	25.8	25.0
	H. リーダーシップ	37.9	60.0	37.0	32.3	33.3
	I. たくましさ（問題解決力）	6.9	13.3	11.1	9.7	25.0
	J. 自己管理能力	10.3	0.0	29.6	12.9	16.7
	K. 倫理観	10.3	13.3	3.7	6.5	16.7
	L. その他	0.0	0.0	3.7	0.0	0.0
	M. 無回答	6.9	7.4	12.9	16.7	
【8】総合人間学部の副専攻に関してお答えください。副専攻から得るものは大きかったですか	A. 大きかった	37.9	33.3	33.3	32.3	33.3
	B. 大きいとは言えないが、得るものがあった	34.5	46.7	29.6	45.2	41.7
	C. ある程度は得るものがあった	13.8	20.0	25.9	16.1	8.3
	D. 得るものはあまりなかった	13.8	0.0	11.1	3.2	16.7
	E. 無回答				3.2	0.0
【10】総合人間学部の卒業論文・卒業研究、及びそれにかかわる勉学は現在役立っていますか	A. 非常に役に立っている	20.7	53.3	25.9	41.9	16.7
	B. 少しは役に立っている	62.1	6.7	63.0	38.7	50.0
	C. どちらともいえない	10.3	26.7	11.1	16.1	0.0
	D. ほとんど役に立っていない	3.4	13.3	0.0	0.0	25.0
	E. まったく役に立っていない	3.4	0.0	0.0	3.2	8.3



大学院人間・環境学研究科

3. 大学院人間・環境学研究科

【資料 3-1】 学生数の推移

【修士課程】

各年度 5月1日現在

	学生数			男性学生に対する女性学生の割合	社会人学生数(内数)			社会人学生の割合	留学生数(内数) ^{※1}			留学生の割合	特別聴講学生、研究生、特別研究学生等
	男	女	計		男	女	計		男	女	計		
2020(R2)	225	147	372	65.3%	7	13	20	5.4%	33	53	86	23.1%	21
2021(R3)	198	142	340	71.7%	6	15	21	6.2%	23	55	78	22.9%	18
2022(R4)	178	136	314	76.4%	11	14	25	8.0%	28	51	79	25.2%	31
2023(R5)	185	131	316	70.8%	10	13	23	7.3%	37	45	82	25.9%	27
2024(R6)	181	125	306	69.1%	13	14	27	8.8%	44	41	85	27.8%	32

※1 留学ビザ留学生(COVID-19による未渡日含む)で内数

【博士後期課程】

各年度 5月1日現在

	学生数(総数)			男性学生に対する女性学生の割合	社会人学生数(内数)			社会人学生の割合	留学生数(内数) ^{※1}			留学生の割合
	男	女	計		男	女	計		男	女	計	
2020(R2)	184	150	334	81.5%	43	44	87	26.0%	34	45	79	23.7%
2021(R3)	182	138	320	75.8%	49	44	93	29.1%	38	43	81	25.3%
2022(R4)	185	130	315	70.3%	50	39	89	28.3%	40	45	85	27.0%
2023(R5)	183	141	324	77.0%	51	45	96	29.6%	41	52	93	28.7%
2024(R6)	166	148	314	89.2%	42	43	85	27.1%	42	50	92	29.3%

※1 留学ビザ留学生(COVID-19による未渡日含む)で内数

【資料 3-2】 入学状況

【修士課程】

	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員充足率(%)	入学者数			再入学者数	総合人間学部からの進学者(内数)	社会人(内数)
						男	女	計			
2020(R2)	164	323	168	159	97.0	95 (11)	64 (25)	159 (36)		37	3
2021(R3)	164	281	138	132	80.5	75 (13)	56 (24)	131 (37)	1(男)	25	12
2022(R4)	164	306	152	141	86.0	82 (16)	59 (20)	141 (36)		37	10
2023(R5)	164	293	148	140	85.4	79 (19)	61 (21)	140 (40)		27	10
2024(R6)	164	319	156	141	86.0	82 (25)	59 (20)	141 (45)		33	12

()は留学生で内数

【博士後期課程】

	入学定員	編入学志願者数	合格者数	入学者数	入学定員充足率(%)	進学者数			編入学者数			再入学者数	入学者合計			社会人(内数)
						男	女	計	男	女	計		男	女	計	
2020(R2)	68	41	83	83	122.1	29 (6)	22 (9)	51 (15)	17 (5)	14 (4)	31 (9)	1(男)	47 (11)	36 (13)	83 (24)	24
2021(R3)	68	31	76	71	104.4	31 (8)	17 (6)	48 (14)	14 (3)	9 (6)	23 (9)		45 (11)	26 (12)	71 (23)	23
2022(R4)	68	34	66	64	94.1	22 (5)	16 (3)	38 (8)	17 (5)	9 (6)	26 (11)		39 (10)	25 (9)	64 (19)	17
2023(R5)	68	34	72	68	100.0	21 (3)	20 (8)	41 (11)	15 (7)	12 (6)	27 (13)		36 (10)	32 (14)	68 (24)	23
2024(R6)	68	39	77	74	108.8	22 (7)	22 (7)	44 (14)	17 (7)	13 (6)	30 (13)		39 (14)	35 (13)	74 (27)	15

()は留学生で内数

【資料 3-3】研究生在籍数

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
4 月在籍者数	19	15	26	30	26
留学生数 (内数)	17	10	20	22	22
10 月在籍者数	50	52	52	54	47
留学生数 (内数)	47	45	48	43	44

【資料 3-4】留年・休学・退学の状況

【修士課程】

	学生数	留年者	休学者	退学者・除籍者数
2020 (R2)	372	37	26	11
2021 (R3)	340	52	30	8
2022 (R4)	314	43	22	4
2023 (R5)	316	35	17	8
2024 (R6)	306	25	20	5

【博士後期課程】

	学生数	留年者	休学者	退学者・除籍者数
2020 (R2)	334	109	67	10
2021 (R3)	320	103	62	18
2022 (R4)	315	107	41	9
2023 (R5)	324	131	37	8
2024 (R6)	314	115	47	6

注)・留年者数：毎年度 5 月 1 日現在の数
 ・休学者数：毎年度 5 月 1 日現在の数
 ・退学者数：当該年度内の累計数 (研究指導認定退学者を除く)
 ・留年者=修了年次在籍者のうち、2 年又は 3 年を超えて在籍している者

【資料 3-5】他研究科への聴講の状況

(人)

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
文学研究科	82	70	79	91	61
教育学研究科	20	11	16	10	9
法学研究科	3	1		1	1
理学研究科	6	1	5	5	4
医学研究科	6	6	3	3	2
工学研究科	1		1		4
農学研究科	0	2	2	1	
エネルギー科学研究科	0			2	1
公共政策大学院	2	1	3	1	3
地球環境学舎・学舎	1			2	
経済学研究科	0	3	5	1	3
経営管理大学院	7	3	2	2	1
アジア・アフリカ地域研究研究科	4	6	2	5	2
情報学研究科	9	4	4	7	5
生命科学研究科		1	1		
総合生存学館		1		1	
合計	141	110	123	132	96

【資料 3-6】修士課程 学位授与の状況

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
人間・環境学専攻	117				
共生人間学専攻	75	80	68	67	9
共生文明学専攻	38	37	37	36	4
相関環境学専攻	41	42	29	40	1
合計	154	159	134	143	131

・令和 5(2023)年 4 月より、3 専攻(共生人間学専攻・共生文明学専攻・相関環境学専攻)を、1 専攻(人間・環境学専攻)に統合

【資料 3-7】修士課程 修業年限内修了率と「標準修業年限×1.5」年内修了率

標準修業年限内修了率					「標準修業年限×1.5」年内修了率			
入学年度	入学者数	修了年度	修了者数	標準修業年限内修了率	修了年度	対象学生数	修了者数合計	「標準修業年限×1.5」年内修了率
2017 (H29)	148	2018 (H30)	120	81.1%	2019 (R1)	16	136	91.9%
2018 (H30)	160	2019 (R1)	130	81.3%	2020 (R2)	15	145	90.6%
2019 (R1)	179	2020 (R2)	134	74.9%	2021 (R3)	24	158	88.3%
2020 (R2)	159	2021 (R3)	126	79.2%	2022 (R4)	18	144	90.6%
2021 (R3)	131	2022 (R4)	105	80.2%	2023 (R5)	14	119	90.8%
2022 (R4)	141	2023 (R5)	123	87.2%	2024 (R6)	10	133	94.3%
2023 (R5)	140	2024 (R6)	117	83.6%	2025 (R7)			

【資料 3-8】修士課程修了者の進路

	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
修了者数	95	59	154	96	63	159	71	63	134	80	63	143	78	53	131
進学(大学院)	33	19	52	25	17	42	22	19	41	27	21	48	28	17	45
人間・環境学研究科へ進学(内数)	(28)	(17)	(45)	(22)	(16)	(38)	(20)	(19)	(39)	(21)	(21)	(42)	(28)	(17)	(45)
進学(大学院以外)	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
就職	52	29	81	61	35	96	43	30	73	42	29	71	47	33	80
その他	10	10	20	10	11	21	6	14	20	11	13	24	3	3	6
大学院進学率	34.7	32.2	33.8	26.0	27.0	26.4	31.0	30.2	30.6	33.8	33.3	33.6	35.9	32.1	34.4
就職率	54.7	49.2	52.6	63.5	55.6	60.4	60.6	47.6	54.5	52.5	46.0	49.7	60.3	62.3	61.1

※「その他」の主な内訳：修了後の進路について大学に届け出のない者、就職準備、無業者、家事手伝い、帰国留学生、一時的な仕事に就いた者

【資料 3-9】修士課程修了者の就職状況

(職業別就職状況)

修了年度		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
b 専門的・ 技術的 職業従事者	1 研究者	9	6	5	7	6	33
	3 製造技術者 (開発)	12	6	7	6	5	36
	4 製造技術者 (開発除く)	3	4	3		2	12
	5 建築・土木・測量技術者	1	1	1			3
	6 情報処理・通信技術者	11	17	11	7	9	55
	7 その他の技術者	1	2	1	1	3	8
	8 教員 (高等教育)	1	3	2	2	3	11
	8 教員 (高等教育以外)		1			1	2
	9 医師・歯科医師, 獣医師, 薬剤師	2	1				3
	10 保健師・助産師・看護師	1					1
	13 美術・写真・デザイナー・音楽・舞台	1	2	2		3	8
	14 その他	3	5	7	4	5	24
	a 管理的職業従事者	4	3	5	4	3	19
	c 事務従事者	6	3	2	12	6	29
d 販売従事者	1	5	2	1	4	13	
e サービス職業従事者	1	8	2	6	6	23	
h 生産工程従事者				1		1	
i 輸送・機械運転従事者			1			1	
上記以外	24	29	23	19	24	119	
合計	81	96	74	70	80	401	

(産業別就職状況)

修了年度	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
E 製造業	23	22	18	23	24	110
F 電気・ガス・熱供給・水道業	2	2		2		6
G 情報通信業	21	36	22	10	16	105
H 運輸業・郵便業		1	2	1	2	6
I 卸売業・小売業	3	5	5	4	4	21
J 金融業・保険業	3	5	3	5	3	19
K 不動産業・物品賃貸業	1		1			2
L 学術研究・専門・技術サービス業	16	12	10	14	8	60
M 宿泊業・飲食サービス業		1			1	2
N 生活関連サービス業・娯楽業	1			1	1	3
O 教育・学習支援業	5	6	3	6	6	26
P 医療・福祉	2	1	1	1	2	7
R 宗教・その他のサービス業	3		1	1	2	7
S 国家公務・地方公務	0	2	3	2		7
上記以外	1	3	5		11	20
合計	81	96	74	70	80	401

【資料 3-10】博士後期課程 学位授与の状況

修了年度	大学院博士課程修了者				論文博士	論文博士累計数
	博士学位授与者数	在籍3年の 博士学位取得者数 (内数)	博士学位授与者数 累計	研究指導認定 退学者数		
2020 (R2)	50	18	1,003	38	1	54
2021 (R3)	45	12	1,047	28	1	55
2022 (R4)	36	8	1,083	30	0	55
2023 (R5)	50	17	1,133	42	1	56
2024 (R6)	48	9	1,181	27	1	57

【資料 3-11】博士後期課程 標準修業年限内修了率と「標準修業年限×1.5」年内修了率

入学年度	A 入学者数	標準修業年限内修了者数		標準 修業年限内 修了率 a/A	「標準修業年限×1.5」年内修了者数				B (a+b+c)	「標準修業年限×1.5」 年内修了率 B/A
		修了年度	a 修了者数		修了年度	b 修了者数	修了年度	c 修了者数		
2016 (H28)	70	2018(H30)	13	18.6%	2019(R1)	6	2020(R2)	5	24	34.3%
2017 (H29)	59	2019(R1)	12	20.3%	2020(R2)	8	2021(R3)	6	26	44.1%
2018 (H30)	76	2020(R2)	18	23.7%	2021(R3)	9	2022(R4)	6	33	43.4%
2019 (R1)	72	2021(R3)	12	16.7%	2022(R4)	8	2023(R5)	8	28	38.9%
2020 (R2)	82	2022(R4)	8	9.8%	2023(R5)	11	2024(R6)	15	34	41.5%
2021 (R3)	71	2023(R5)	17	23.9%	2024(R6)	9	2025(R7)		26	36.6%
2022 (R4)	64	2024(R6)	9	14.1%	2025(R7)		2026(R8)		9	14.1%

【資料 3-12】博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路

	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
修了者数 *1	39	34	73	27	23	50	32	18	50	52	25	77	32	24	56
進学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	0	1
就職	33	18	51	22	11	33	22	13	35	33	12	45	25	16	41
その他 *2	6	16	22	5	12	17	10	5	15	18	13	31	6	8	14
就職率	84.6	52.9	69.9	81.5	47.8	66.0	68.8	72.2	70.0	63.5	48.0	58.4	78.1	66.7	73.2

*1 博士後期課程修了者と研究指導認定退学者の合計であり、研究指導認定退学後に学位を取得した者は含まれない。

・就職年度は、学位授与者では学位授与年度、学位未授与の研究指導認定退学者では退学年度とした。

*2 主な内訳：専修学校・外国の学校等入学者、進学準備中の者、就職準備中の者、修了後の進路について大学に届け出のない者

	2020 (R2)		2021 (R3)		2022 (R4)		2023 (R5)		2024 (R6)	
教育、学習支援業への 就職者数 / 就職率	23	45.1%	13	39.4%	17	48.6%	18	40.0%	16	39.0%
研究者となった者 / 就職率	18	35.3%	10	30.3%	15	42.9%	14	31.1%	9	22.0%
就職者数合計 / 就職率	51	69.9%	33	66.0%	35	70.0%	45	58.4%	41	73.2%

【資料 3-13】博士後期課程 修了者・研究指導認定退学者の就職状況

(職業別就職状況)

修了年度		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
b 専門的 技術的 職業従事者	1 研究者	18	10	15	14	9	66
	3 製造技術者 (開発)	1	2		2	1	6
	4 製造技術者 (開発除く)						0
	6 情報処理・通信技術者			1	3	2	6
	7 その他の技術者						0
	8 教員 (高等学校)	1		1			2
	8 教員 (中等教育学校)				1		1
	8 教員 (大学・短期大学)	11	7	4	6	7	35
	8 教員 (その他)			1	1		2
	11 医療技術者		2			1	3
	12 その他の保健医療従事者				1		1
	14 その他	3			1	1	5
	a 管理的職業従事者		1	1	1		3
	c 事務従事者	1			1	1	3
d 販売従事者						0	
e サービス職業従事者		1			1	2	
上記以外	6	3	3	4	9	25	
不明 (大学に届け出のない者)	10	7		10	9	36	
合計	51	33	26	45	41	196	

(産業別就職状況)

修了年度		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
A,B	農業・林業・漁業	1					1
D	建設業	2	2	2			6
E	製造業				1	2	3
F	電気・ガス・熱供給・水道業				1		1
G	情報通信業	3		1	4	2	10
I	卸売業・小売業			1		1	2
J	金融業・保険業	1					1
L	学術研究・専門・技術サービス業	3	4		4	3	14
N	生活関連サービス業・娯楽業					1	1
O	教育、学習支援業	23	13	17	18	16	87
P	医療、福祉		2				2
Q	複合サービス事業	2	1	1			4
R	宗教・その他のサービス業					2	2
S	国家公務・地方公務	2	2		2		6
	上記以外	4	2	4	5	5	20
	不明 (大学に届け出のない者)	10	7		10	9	36
合計		51	33	26	45	41	196

【資料 3-14】教員免許状資格取得状況

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R4)	2024 (R4)
中学専修	社会		1	1	1	
	国語			1		
	英語			1	1	2
	保健体育					
	数学	1	1		1	
	理科	2				1
	小計	3	2	3	3	3
高校専修	地理歴史		1	1	1	
	公民					
	国語		1	1		
	英語			1	1	2
	保健体育					
	数学	1	1		1	
	理科	2			1	1
小計	3	3	3	4	3	
取得者実数		3	3	3	4	3

【資料 3-15】日本学術振興会特別研究員の受入状況

(人)

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
本研究科にて受入	DC1	6	5	5	3	6	25
	DC2	0	8	8	10	13	39
	PD (他研究科出身者)	3	1	1	1	2	8
	RPD (他研究科出身者)	1	0	0	1	0	2
	合計	10	14	14	15	21	74
他研究機関にて受入	PD (本研究科出身者)		9	3	2	7	21
	RPD (本研究科出身者)		1	1	1	1	4
	合計		10	4	3	8	25

【資料 3-16】留学生の受入状況 (人間・環境学研究科)

(毎年5月1日現在)

年度		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
修士課程	男	33	23	28	37	44
	女	53	55	51	45	41
	計	86	78	79	82	85
博士後期課程	男	34	38	40	41	42
	女	45	43	45	52	50
	計	79	81	85	93	92
研究生	男	5	3	9	11	7
	女	12	6	10	11	15
	計	17	9	19	22	22
特別研究学生	男	1	3	3	2	1
	女	1	1	2	2	3
	計	2	4	5	4	4
合計		184	172	188	201	203

【資料 3-17】日本人学生の留学状況

【目的別】

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
修士課程	私費留学		2	2		4
	語学研修		1		3	1
	インターンシップ		1			1
	調査・研究			6	12	12
	学会出席（学会出席にともなう調査研究を含む）			3	7	6
	大学間学生交流協定		2	1		1
	その他			1	3	1
	計	0	6	13	25	26
博士後期課程	私費留学			2	1	5
	語学研修			1	1	
	調査・研究		7	23	25	22
	学会出席（学会出席にともなう調査研究を含む）			4	11	13
	大学間学生交流協定		4	2		3
	計	0	11	32	38	43

【地域別】

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
修士課程	①アジア			3	14	10
	②北米		2	5	3	5
	③中南米				2	3
	④欧州（NIS 諸国含む）		4	2	5	7
	⑤大洋州			2		
	⑥中東				1	1
	⑦アフリカ			1		
	計	0	6	13	25	26
博士後期課程	①アジア		1	10	8	12
	②北米			5	8	11
	③中南米				1	1
	④欧州（NIS 諸国含む）		10	13	21	16
	⑤大洋州					2
	⑥中東			1		
	⑦アフリカ			3		1
	計	0	11	32	38	43

【期間別】

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
修士課程	① 1か月未満			9	20	13
	② 1か月以上3か月未満				1	6
	③ 3か月以上6か月未満		1	3	2	
	④ 6か月以上1年未満		3		2	7
	⑤ 1年以上		2	1		
	計	0	6	13	25	26
博士後期課程	① 1か月未満			15	19	29
	② 1か月以上3か月未満		3	6	12	3
	③ 3か月以上6か月未満			5	2	3
	④ 6か月以上1年未満		3	4	3	6
	⑤ 1年以上		5	2	2	2
	計	0	11	32	38	43

【資料 3-18】人間・環境学研究科 授業評価アンケート結果

	2021(R3)		2022(R4)		2023(R5)		2024(R6)		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
開講年度	2021	2021	2022	2022	2023	2023	2024	2024	
対象科目	154		194	181	191	158			
履修者数	1,113	821	1,037	742	1,133	766	1099	856	
回答者数	425	186	348	196	420	239	301	97	
回答率	38.2%	22.7%	33.6%	26.4%	37.1%	31.2%	27.4%	11.3%	
【1】この授業を履修しようと思ったのはなぜですか(複数回答可)	A. シラバスを読んで興味が湧いた	69.2	55.4	51.0	62.8	55.4	46.2	69.9	62.2
	B. 指導教員の授業だから	26.4	41.9	22.8	35.7	20.3	30.5	26.8	33.7
	C. 修了要件に必要なだから	22.8	24.7	21.0	18.4	21.0	16.4	30.4	34.7
	D. 教員免許等の資格取得に必要な授業だから	6.4	6.5	4.8	5.6	3.0	5.2	8.7	0.0
	E. その他	0.9	1.1	0.4	0.0	0.2	1.0	0.0	0.0
	無回答					0.7			
【2】この授業はどのような形式でしたか	A. 教員による講義	54.8	37.1	52.6	35.7	52.6	34.7	57.2	30.9
	B. 学生による発表	23.3	37.1	22.4	39.8	26.9	34.7	17.4	44.3
	C. 特定のテーマについての討論	10.1	10.2	10.6	7.1	10.5	13.0	9.0	8.2
	D. 文献の輪読	7.8	10.2	9.8	12.8	7.4	13.0	10.4	11.3
	E. その他	0.5	0.5	0.3	0.5	0.2	0.4	6.0	5.2
	無回答	3.5	4.8	4.3	4.1	2.4	4.2		
【3】この授業の内容についてどれくらい興味を持っていましたか	A. 非常におもしろく興味が持てた	59.8	64.5	57.9	65.1	54.9	63.1	56.5	60.8
	B. かなりおもしろく興味が持てた	30.2	26.9	30.3	26.7	35.6	29.1	33.8	29.9
	C. 少しはおもしろく興味が持てた	8.8	8.6	10.1	3.7	7.4	7.0	11.4	7.2
	D. あまりおもしろくなく興味が持てなかった	0.2	0.0	1.1	1.0	1.2	0.4	0.3	5.2
	E. まったくおもしろくなく興味が持てなかった	0.5	0.5	0.0	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0
	F. その他			0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0
無回答	0.2			0.6	0.5				
【4】この授業の内容をどの程度理解できましたか	A. とてもよく理解できた	38.7	41.8	42.2	42.9	40.4	44.0	30.8	45.4
	B. かなり理解できた	37.4	36.5	35.1	32.8	34.4	33.2	41.5	35.1
	C. まずまず理解できた	21.3	20.1	20.4	20.7	22.9	21.2	27.4	19.6
	D. あまり理解できなかった	2.1	1.1	1.7	3.0	2.3	1.2	3.0	1.0
	E. まったく理解できなかった	0.2	0.5	0.0	0.5	0.0	0.0	0.3	1.0
	F. その他			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
無回答			0.6						
【5】この授業はあなたの問題発見能力や問題解決能力に役立ちましたか	A. 大いに役立った	59.4	73.4	56.8	68.4	55.8	44.0	53.5	56.7
	B. ある程度役立った	31.1	18.1	35.2	24.5	32.4	33.2	33.4	29.9
	C. 少しは役立った	8.1	7.4	6.5	5.1	10.9	21.2	14.7	8.2
	D. あまり役立たなかった	0.7	0.5	0.9	1.0	0.7	1.2	0.7	7.2
	E. まったく役立たなかった	0.2	0.5	0.3	0.5	0.2	0.0	0.0	0.0
	F. その他	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4		
無回答			0.3						
【6】この授業の配布資料、OHPやPower Point による画像資料、板書などの分量と質は妥当なものでしたか	A. とてもよいものだった	60.2	60.2	63.5	70.4	62.4	65.7	53.2	62.9
	B. かなりよいものだった	28.5	24.7	24.1	17.9	26.7	27.6	32.4	23.7
	C. まずまずのものだった	10.4	14.5	10.6	9.7	11.0	5.9	12.7	13.4
	D. あまりよくなかった	0.2	0.5	0.6	1.5	0.0	0.4	1.7	0.0
	E. 非常に悪かった	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	F. その他			0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0
無回答	0.2			1.1					
【7】この授業に何回出席しましたか。現在までの回数を書いてください	A. 13回以上	50.8	49.5	45.7	37.2	50.0	41.6	65.5	51.2
	B. 10回以上13回未満	31.3	33.3	39.1	38.3	38.8	40.8	26.4	17.5
	C. 7回以上10回未満	8.2	12.9	9.2	8.7	4.5	5.5	5.6	8.2
	D. 4回以上7回未満	3.8	1.6	2.6	6.6	3.1	3.4	1.1	2.1
	E. 4回未満	3.1	1.1	2.3	4.6	2.6	5.9	1.4	15.5
	無回答	2.8	1.6	1.1	4.6	1.0	2.9		

		2021(R3)		2022(R4)		2023(R5)		2024(R6)	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
【8】この授業の予習、復習、課題などのためにどれくらいの時間をかけましたか。学期を通じての1週間あたりの平均時間数を30分単位で書いてください	A. 3時間以上	22.8	31.7	13.8	19.9	18.1	27.7	17.2	10.3
	B. 2時間以上3時間未満	19.3	13.4	16.1	13.8	18.3	16.4	14.6	17.5
	C. 1時間以上2時間未満	28.0	27.4	38.5	45.9	37.9	31.5	33.3	50.5
	D. 0.5時間以上1時間未満	20.2	21.0	23.0	14.8	18.8	18.5	29.2	13.4
	E. 0.5時間未満	7.1	4.3	7.5	3.6	4.8	3.4	5.2	6.2
	無回答	2.6	2.2	1.1	2.0	2.1	2.5	0.4	
【9】シラバスを活用しましたか	A. はい	65.9	61.3	66.4	63.8	73.1	66.0	84.9	77.1
	B. いいえ、またはどちらともいえない	33.6	38.2	32.8	35.2	26.7	33.2	15.1	22.9
	無回答	0.5	0.5	0.9	1.0	0.2	0.8		
【10】「はい」と回答した人は以下から選んでください。(複数回答可)	A. 科目選択・履修登録に活用した	90.4	85.1	41.8	90.4	84.0	82.8	86.6	91.9
	B. 予習・復習に活用した	18.6	29.8	10.9	16.8	37.8	22.6	29.2	23.0
	C. 受講にあたり授業中などに活用した	22.9	27.2	14.1	22.4	29.0	13.8	26.1	27.0
	D. 試験・レポートに活用した	16.4	19.3	8.1	12.0	24.1	0.4	20.2	16.2
	E. その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
【11】シラバスの情報は十分なものでしたか(活用の有無にかかわらず教えてください)	A. はい	96.7	98.9	98.9	95.9	96.2	99.6	97.6	95.7
	B. いいえ	2.6	0.5	0.6	2.0	1.4	0.4	2.4	4.3
	無回答	0.7	0.5	0.6	2.0	2.4			
【12】「いいえ」と答えた人は以下から選んでください。(複数回答可)	A. 「授業の概要・目的」の情報が不十分	9.1	0.0	0.3	50.0	0.0	0.0	14.3	25.0
	B. 「授業計画と内容」の情報が不十分	63.6	0.0	0.6	75.0	16.7	100.0	57.1	50.0
	C. 「履修要件」の情報が不十分	45.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0
	D. 「成績評価の方法・観点及び達成度」の情報が不十分	18.2	100.0	0.0	25.0	33.3	0.0	28.6	25.0
	E. 「教科書」及び「参考書」の情報が不十分	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	0.0	0.0
	F. 「その他」の情報が不十分	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	0.0
	G. その他	18.2	0.0	0.0	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0
【13】この授業の到達目標に照らして達成できたかどうか、ご自身の判断を以下より1つ選択してください	A. 十分達成できた(概ね9割以上)	42.6	45.7	41.1	44.9	41.2	44.5	41.8	52.1
	B. ほぼ達成できた(概ね8割以上)	46.4	49.5	48.3	41.8	47.6	46.6	45.1	35.4
	C. どちらともいえない	8.5	3.8	9.2	8.7	8.1	5.5	11.4	11.5
	D. あまり達成できなかった(概ね8割未満)	0.5	0.5	0.9	1.0	0.7	0.4	1.0	0.0
	E. 達成できなかった(概ね6割未満)	0.7	0.5	0.3	1.0	0.2	0.0	0.7	1.0
	無回答	1.4		0.3	2.6	2.1	2.9		
【14】上の13で学習の達成度が「達成できなかった」又は「やや達成できなかった」の場合は達成できなかった理由を、以下より選択してください。(複数回答可)	A. 授業の速度が速かったため	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	20.0	0.0
	B. 予習・復習に十分時間を取ることができなかったため	40.0	50.0	0.6	25.0	50.0	0.0	40.0	0.0
	C. 説明がわかりにくかったため	20.0	50.0	0.3	50.0	50.0	0.0	20.0	0.0
	D. 特になし	20.0	50.0	0.3	0.0	0.0	100.0	40.0	100.0
	E. その他	40.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0

【資料 3-19】修士課程 M2 学生アンケート結果

進学年度		2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
	対象者数	214	209	173	171	165
	回答者数	86	99	74	80	66
	回答率	40.2%	47.4%	42.8%	46.8%	40.0%
【1】修士課程での専門分野を選んでください。	1. 文科系	47.7	54.5	47.3	58.8	65.2
	2. 理科系	37.2	39.4	41.9	32.5	25.8
	3. 領域横断的	15.1	6.1	10.8	8.8	9.1
	無回答					
【2】希望している進路を選んでください。	1. 人間・環境学研究科博士課程に進学	31.4	21.2	25.7	38.8	27.3
	2. 他研究科、他大学大学院などに進学	5.8	5.1	0.0	2.5	0.0
	3. 就職	58.1	71.7	66.2	57.5	72.7
	4. その他()	4.7	3.0	8.1	1.3	0.0
【3】本研究科のホームページおよび『学生便覧』(p.1)に書かれている本研究科の教育理念・各専攻の教育理念をいつ知りましたか	1. 入学以前	40.7	37.4	37.8	53.8	42.4
	2. 入学後のガイダンス	40.7	44.4	44.6	30.0	40.9
	3. 修士1年生の間	5.8	7.1	12.2	7.5	4.5
	4. 今まで知らなかった	12.8	11.1	5.4	8.8	12.1
【4】本研究科の教育体制は理念に沿うものだと思いますか	1. おおいにそう思う	22.1	20.2	16.2	30.0	34.8
	2. そう思う	51.2	59.6	64.9	50.0	48.5
	3. どちらともいえない	19.8	19.2	17.6	16.3	13.6
	4. そうは思わない	7.0	0.0	1.4	3.8	1.5
	5. まったくそうは思わない	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0
	無回答					1.5
【5】週に何時間ぐらい大学で学業・研究に従事していますか	1. 20時間未満	31.4	33.3	28.4	21.3	22.7
	2. 20～30時間未満	18.6	15.2	23.0	27.5	21.2
	3. 30～40時間未満	16.3	14.1	12.2	20.0	31.8
	4. 40～50時間未満	20.9	19.2	16.2	16.3	7.6
	5. 50～60時間未満	5.8	10.1	10.8	12.5	9.1
	6. 60時間以上	5.8	7.1	9.5	2.5	7.6
		1.2	1.0			
【6】週に自宅等学外で何時間ぐらい学業に時間を使っていますか	1. 5時間未満	16.3	20.2	25.7	30.0	27.3
	2. 5～10時間未満	17.4	26.3	20.3	23.8	24.2
	3. 10～15時間未満	20.9	15.2	18.9	17.5	19.7
	4. 15～20時間未満	10.5	13.1	10.8	16.3	9.1
	5. 20時間以上	33.7	24.2	24.3	12.5	18.2
	無回答	1.2	1.0			1.5
【7】大学院での学業に意欲的に取り組んでいると思いますか	1. おおいに取り組んでいる	38.4	27.3	24.3	33.8	33.3
	2. まずまず取り組んでいる	46.5	48.5	63.5	42.5	42.4
	3. どちらとも言えない	9.3	16.2	9.5	13.8	16.7
	4. 十分意欲的に取り組んでいるとは言えない	3.5	4.0	2.7	8.8	4.5
	5. 意欲的に取り組んでいない	1.2	3.0	0.0	1.3	1.5
	無回答	1.2	1.0			1.5
【8】大学院での授業科目の単位をどの程度取得できていると思いますか	1. おおいに取得できている	68.6	52.5	63.5	68.8	68.2
	2. まずまず取得できている	30.2	41.4	35.1	25.0	25.8
	3. どちらとも言えない	1.2	6.1	0.0	5.0	3.0
	4. あまり取得できているとは言えない	0.0	0.0	1.4	1.3	1.5
	5. まったく取得できていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答					1.5

	進学年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
【9】修士課程に入学した時、本研究科でどのような研究能力・知識を身に付けることを学業の目標にしましたか（複数回答可）	1. 実験を適切に計画して遂行する能力	44.2	39.4	43.2	41.3	37.9
	2. データを分析する能力	60.5	44.4	55.4	43.8	43.9
	3. 研究課題を発見する能力	61.6	68.7	62.2	52.5	56.1
	4. 文献（外国語を含む）を読む能力	68.6	69.7	51.4	51.3	62.1
	5. 論理的に思考して推論する能力	74.4	76.8	68.9	75.0	69.7
	6. 専門分野に関する幅広い知識	77.9	76.8	62.2	77.5	66.7
	7. 学術論文を書く能力	57.0	50.5	52.7	50.0	71.2
	8. 学会などで研究発表する能力	32.6	21.2	39.2	28.8	28.8
	9. 人間関係を築く能力	24.4	13.1	29.7	16.3	19.7
	10. その他	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0
	無回答					1.5
【10】修士課程の1年目を終えた段階で、入学当初目標としていた学業の成果はあがっていると思いますか	1. おおいにあがっている	10.5	13.1	13.5	21.3	18.2
	2. まあまああがっている	59.3	55.6	68.9	56.3	51.5
	3. どちらともいえない	22.1	27.3	13.5	18.8	21.2
	4. あまりあがっていない	4.7	2.0	4.1	3.8	7.6
	5. まったくあがっていない	2.3	2.0	0.0	0.0	0.0
	6. その他	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答					1.5
【11】修士課程の2年目であなたが学業の上で目標とすることをあげてください（複数回答可）	1. 実験を適切に計画して遂行する能力	41.9	33.3	41.9	40.0	42.4
	2. データを分析する能力	53.5	41.4	54.1	56.3	53.0
	3. 研究課題を発見する能力	52.3	50.5	40.5	45.0	43.9
	4. 文献（外国語を含む）を読む能力	52.3	57.6	52.7	48.8	54.5
	5. 論理的に思考して推論する能力	65.1	66.7	56.8	62.5	66.7
	6. 専門分野に関する幅広い知識	62.8	57.6	52.7	62.5	54.5
	7. 学術論文を書く能力	76.7	84.8	79.7	76.3	77.3
	8. 学会などで研究発表する能力	44.2	33.3	43.2	48.8	48.5
	9. 人間関係を築く能力	23.3	18.2	24.3	25.0	19.7
	10. その他	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0
	無回答	1.2				
【12】修士課程の講義・演習などのカリキュラムと内容、研究指導などの教育は、研究能力の向上に役立つようにできていると思いますか	1. おおいにそう思う	30.2	24.2	35.1	28.8	27.3
	2. そう思う	53.5	56.6	54.1	55.0	57.6
	3. どちらともいえない	8.1	15.2	9.5	12.5	12.1
	4. そうは思わない	4.7	4.0	0.0	3.8	3.0
	5. まったくそうは思わない	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答	1.2		1.4		
【13】教室・演習室・実験室などの設備や数、研究生の設備や机の数、図書室の蔵書や利用条件などにどの程度満足していますか	1. おおいに満足している	29.1	22.2	35.1	31.3	42.4
	2. おおむね満足している	50.0	55.6	39.2	40.0	36.4
	3. どちらともいえない	12.8	12.1	10.8	13.8	9.1
	4. やや不満を感じている	7.0	9.1	12.2	12.5	10.6
	5. おおいに不満を感じている	0.0	1.0	1.4	1.3	1.5
	無回答	1.2		1.4	1.3	
【14】副指導教員に何か相談したいと思ったことがありますか	1. ある	18.6	21.2	25.7	21.3	24.2
	2. ない	80.2	77.8	73.0	78.8	75.8
	無回答	1.2	1.0	1.4		
【15】14で「ある」と回答した人におたずねします。今までに副指導教員に相談したことはありますか	1. 何度もある	43.8	33.3	15.8	29.4	37.5
	2. 1度ある	31.3	33.3	26.3	11.8	31.3
	3. まだない	18.8	14.3	57.9	41.2	31.3
	4. 副指導教員が誰か知らない	6.3	19.0	0.0	17.6	0.0
【16】アドバイザーに何か相談したいと思ったことがありますか	1. ある	19.8	15.2	20.3	16.3	19.7
	2. ない	79.1	81.8	78.4	81.3	80.3
	無回答	1.2	3.0	1.4	2.5	
【17】16で「ある」と回答した人におたずねします。今までにアドバイザーに相談したことはありますか	1. 何度もある	41.2	26.7	46.7	38.5	30.8
	2. 1度ある	23.5	13.3	6.7	15.4	30.8
	3. まだない	35.3	46.7	46.7	23.1	30.8
	4. 副指導教員が誰か知らない	0.0	13.3	0.0	23.1	7.7
【18】副指導教員、アドバイザーを置く制度が学生にとって役立つと思いますか	1. おおいにそう思う	14.0	9.1	16.2	26.3	22.7
	2. そう思う	27.9	40.4	41.9	31.3	30.3
	3. どちらともいえない	46.5	43.4	28.4	30.0	34.8
	4. そうは思わない	8.1	5.1	10.8	10.0	9.1
	5. まったくそうは思わない	2.3	2.0	1.4	2.5	3.0
	無回答	1.2		1.4		

【資料 3-20】修士課程修了時アンケート結果

		修了年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
		対象者数	154	159	134	143	132.0
		回答者数	117	109	101	136	99.0
		回答率	76.0%	68.6%	75.4%	95.1%	0.8
【1】研究科の教育理念を何時知りましたか	1. 入学以前		41.9	51.4	53.5	48.1	34.3
	2. 入学後のガイダンス		42.7	30.3	35.6	36.3	43.4
	3. 修士1年生の間		3.4	2.8	3.0	3.7	7.1
	4. 修士2年生の間		0.9	0.0	1.0	0.7	3.0
	5. 修了まで知らなかった		11.1	15.6	6.9	11.1	12.1
【2】研究科の理念に沿った教育体制であったと思いますか	1. おおいにそう思う		19.7	27.5	25.7	25.2	22.2
	2. そう思う		57.3	47.7	57.4	56.3	42.4
	3. どちらともいえない		21.4	21.1	11.9	17.0	29.3
	4. そうは思わない		0.9	1.8	3.0	1.5	3.0
	5. まったくそうは思わない		0.9	1.8	2.0	0.0	3.0
【3】修士課程修了時までに学生が身に付けるべき知識や能力（ディプロマポリシー）が大学から明示されていると思いますか	1. そう思う					37.8	
	2. ある程度そう思う					46.7	
	3. あまりそうは思わない					14.1	
	4. そうは思わない					1.5	
【4】授業アンケート等を通じて学生の意見が反映され大学教育が良くなっていると思いますか	1. そう思う					28.1	
	2. ある程度そう思う					44.4	
	3. あまりそうは思わない					24.4	
	4. そうは思わない					3.0	
【5】教員が学生と向き合って教育研究に取り組んでいると思いますか	1. そう思う					68.9	
	2. ある程度そう思う					28.1	
	3. あまりそうは思わない					2.2	
	4. そうは思わない					0.7	
【6】週毎に何時間ぐらい大学で学業・研究に従事しましたか。	1. 20時間未満		27.4	28.4	25.7	19.3	11.1
	2. 20～30時間		17.9	25.7	18.8	20.0	26.3
	3. 30～40時間		17.1	14.7	20.8	27.4	28.3
	4. 40～50時間		18.8	19.3	10.9	17.8	19.2
	5. 50～60時間		12.0	5.5	8.9	9.6	7.1
	6. 60時間以上		6.8	6.4	14.9	5.2	8.1
	無回答					0.7	
【7】週毎に自宅等学外では何時間ぐらい学業・研究に時間を使いましたか	1. 5時間未満		19.7	23.9	16.8	23.0	24.2
	2. 5～10時間未満		33.3	25.7	27.7	26.7	28.3
	3. 10～15時間未満		15.4	16.5	18.8	12.6	20.2
	4. 15～20時間未満		8.5	9.2	7.9	17.0	13.1
	5. 20時間以上		23.1	23.9	28.7	0.0	14.1
	無回答			0.9		0.7	
【8】講義・演習等の配分は適切だと思いますか	1. 適切		51.3	45.0	49.5	50.4	33.3
	2. 概ね適切		34.2	41.3	44.6	39.3	40.4
	3. どちらともいえない		12.0	10.1	3.0	6.7	25.3
	4. やや不適切		2.6	3.7	2.0	3.0	0.0
	5. 不適切		0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
	無回答				1.0	0.7	
【9】大学院の学業・研究に意欲的に取り組んだと思いますか	1. 取り組んだ		54.7	45.9	58.4	48.9	50.5
	2. 概ね取り組んだ		36.8	41.3	33.7	37.0	29.3
	3. どちらともいえない		3.4	9.2	4.0	8.9	19.2
	4. 十分意欲的に取り組んだとは言えない		1.7	3.7	4.0	4.4	1.0
	5. 意欲的に取り組まなかった		3.4	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答					0.7	
【10】修士課程で予定していた学業の成果があげられたか	1. おおいにあがった		32.5	24.8	41.6	41.5	39.4
	2. まあまああがった		53.8	52.3	45.5	44.4	38.4
	3. どちらともいえない		9.4	18.3	9.9	10.4	20.2
	4. あまりあがらなかった		2.6	4.6	5.0	4.4	1.0
	5. まったくあがらなかった		1.7	0.9	0.0	0.0	1.0
	無回答					0.7	

		修了年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
【11】修士課程での学業・研究を通じて、幅広い知識を習得したと思いますか。	1. 修得した		33.3	35.8	47.5	37.8	35.4
	2. 概ね修得した		47.9	48.6	37.6	48.9	40.4
	3. どちらともいえない		13.7	11.9	11.9	10.4	21.2
	4. あまり修得しなかった		1.7	2.8	3.0	1.5	2.0
	5. 修得しなかった		3.4	0.9	0.0	0.7	1.0
	無回答					0.7	
【12】修士課程での学業・研究を通じて、問【11】に基づく高度な分析・判断能力や論理的な論述能力を習得したと思いますか。	1. 修得した		25.6	23.9	32.7	44.4	39.4
	2. 概ね修得した		47.9	54.1	46.5	42.2	35.4
	3. どちらともいえない		21.4	18.3	12.9	10.4	22.2
	4. あまり修得しなかった		4.3	1.8	6.9	2.2	2.0
	5. 修得しなかった		0.9	1.8	1.0	0.0	1.0
	無回答					0.7	
【13】修士課程での学業・研究を通じて、高度な専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を修得したと思いますか	1. 修得した					35.6	30.3
	2. 概ね修得した					40.7	36.4
	3. どちらともいえない					17.8	28.3
	4. あまり修得しなかった					4.4	3.0
	5. 修得しなかった					0.7	2.0
	無回答					0.7	
【14】大学での学修によって成長を実感していますか	1. そう思う					65.2	
	2. ある程度そう思う					31.9	
	3. あまりそうは思わない					2.2	
	4. そうは思わない					0.0	
	5. 修得しなかった					0.7	
	無回答					0.7	
【15】修士課程はあなたにとって有意義でしたか	1. 有意義だった		66.7	62.4	73.3	68.9	65.7
	2. 概ね有意義だった		27.4	31.2	21.8	26.7	16.2
	3. どちらともいえない		4.3	2.8	4.0	3.0	17.2
	4. 必ずしも有意義ではなかった		1.7	2.8	1.0	0.7	1.0
	5. 有意義ではなかった		1.7	0.9	0.0	0.0	0.0
	無回答						0.7
【16】修士課程での学業・経験は進学先または就職先で役立つと思いますか	1. 役立つと思う		66.7	55.0	66.3	54.1	53.5
	2. どちらかというど役立つと思う		17.9	26.6	19.8	28.9	20.2
	3. わからない		11.1	15.6	7.9	13.3	23.2
	4. あまり役立たないと思う		3.4	0.9	4.0	3.7	2.0
	5. まったく役立たないと思う		0.9	1.8	1.0	0.0	1.0
	無回答						1.0
【17】修士課程のカリキュラム・教育等は、実力を身につける上で、上手く組みれていましたか	1. 組みれていた		35.0	23.9	37.6	39.3	35.4
	2. 概ね組みれていた		40.2	54.1	50.5	44.4	33.3
	3. どちらともいえない		19.7	17.4	5.9	13.3	27.3
	4. 必ずしも組みれていなかった		3.4	2.8	5.0	3.0	2.0
	5. 組みれていなかった		1.7	1.8	1.0	0.0	2.0
	無回答						
【18】研究環境について満足度を聞かせてください	1. 満足		52.1	43.1	50.5	47.4	48.5
	2. 概ね満足		34.2	42.2	36.6	38.5	27.3
	3. どちらともいえない		10.3	9.2	8.9	12.6	20.2
	4. やや不満		1.7	2.8	3.0	1.5	3.0
	5. 不満		1.7	2.8	1.0	0.0	1.0
	無回答						
【19】指導教員の指導に満足しましたか	1. 満足		68.4	70.6	66.3	67.4	59.6
	2. 概ね満足		19.7	22.9	27.7	28.1	20.2
	3. どちらともいえない		11.1	3.7	4.0	3.7	18.2
	4. やや不満		0.0	1.8	2.0	1.5	2.0
	5. 不満		0.9	0.9	2.0	0.7	0.0
	無回答						

【資料 3-21】博士後期課程修了(認定退学)時アンケート結果

		修了年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
		対象者数	178	114	123	165	166
		回答者数	48	29	35	67	48
		回答率	27.0%	25.4%	28.5%	40.6%	28.9%
【1】研究科の教育理念を何時知りましたか	1. 入学以前		47.9	48.3	40.0	46.3	39.6
	2. 入学後のガイダンス		27.1	20.7	42.9	29.9	27.1
	3. 博士1年生の間		6.3	10.3	0.0	9.0	10.4
	4. 修士2年生の間		0	0.0	2.9	0.0	8.3
	5. 博士3年生から修了(認定退学)までの間		0	3.4	2.9	0.0	8.3
	6. 修了(認定退学)まで知らなかった		18.8	17.2	11.4	14.9	6.3
【2】研究科の理念に沿った教育体制であったと思いますか	1. おおいにそう思う		27.1	27.6	31.4	20.9	25.0
	2. そう思う		41.7	34.5	42.9	44.8	37.5
	3. どちらともいえない		25.0	34.5	20.0	26.9	35.4
	4. そうは思わない		2.1	0.0	2.9	3.0	0.0
	5. まったくそうは思わない		4.2	3.4	2.9	4.5	2.1
【3】博士後期課程修了時までに学生が身に付けるべき知識や能力(ディプロマポリシー)が大学から明示されていると思いますか	1. そう思う					35.7	83.3
	2. ある程度そう思う					46.4	16.7
	3. あまりそうは思わない					16.1	0.0
	4. そうは思わない					1.8	0.0
【4】授業アンケート等を通じて学生の意見が反映され大学教育が良くなっていると思いますか	1. そう思う					19.6	33.3
	2. ある程度そう思う					46.4	50.0
	3. あまりそうは思わない					16.1	16.7
	4. そうは思わない					1.8	0.0
【5】教員が学生と向き合って教育研究に取り組んでいると思いますか	1. そう思う					55.4	50.0
	2. ある程度そう思う					57.1	50.0
	3. あまりそうは思わない					16.1	0.0
	4. そうは思わない					7.1	0.0
【6】週毎に何時間ぐらい大学で学業・研究に従事しましたか	1. 20時間未満		39.6	48.3	51.4	37.3	22.9
	2. 20~30時間		10.4	13.8	14.3	16.4	10.4
	3. 30~40時間		10.4	6.9	8.6	10.4	27.1
	4. 40~50時間		10.4	13.8	14.3	14.9	25.0
	5. 50~60時間		10.4	0.0	11.4	13.4	12.5
	6. 60時間以上		18.8	17.2	0.0	7.5	2.1
【7】週毎に自宅等学外では何時間ぐらい学業・研究に時間を使いましたか	1. 5時間未満		14.6	10.3	8.6	13.4	14.6
	2. 5~10時間未満		25.0	6.9	20.0	19.4	18.8
	3. 10~15時間未満		14.6	13.8	8.6	17.9	22.9
	4. 15~20時間未満		14.6	17.2	11.4	9.0	35.4
	5. 20時間以上		31.3	51.7	51.4	40.3	8.3
【8】大学院の学業・研究に意欲的に取り組んだと思いますか	1. 取り組んだ		54.2	44.8	51.4	53.7	37.5
	2. 概ね取り組んだ		33.3	37.9	42.9	35.8	31.3
	3. どちらともいえない		10.4	10.3	5.7	6.0	31.3
	4. 十分意欲的に取り組んだとは言えない		2.1	6.9	0.0	3.0	0.0
	5. 意欲的に取り組まなかった		0.0	0.0	0.0	1.5	0.0
【9】博士後期課程で予定していた学業の成果が良かったですか	1. おおいにあがった		31.3	31.0	28.6	31.3	29.2
	2. まあまああがった		35.4	48.3	42.9	46.3	27.1
	3. どちらともいえない		25.0	10.3	17.1	13.4	37.5
	4. あまりあがらなかった		8.3	6.9	8.6	6.0	6.3
	5. まったくあがらなかった		0.0	3.4	2.9	3.0	0.0

		修了年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)
【10】～【14】 博士後期課程での学業・研究を通じて修得したもの							
【10】 高度な学識や学際的な幅広い視野に基づく研究能力	1. 修得した		29.2	34.5	37.1	37.3	29.2
	2. 概ね修得した		50.0	34.5	45.7	47.8	37.5
	3. どちらともいえない		16.7	27.6	17.1	13.4	33.3
	4. あまり修得しなかった		2.1	3.4	0.0	1.5	0.0
	5. 修得しなかった		2.1	0.0	0.0	0.0	0.0
【11】 着想の独自性	1. 修得した		31.3	27.6	51.4	46.3	35.4
	2. 概ね修得した		50.0	44.8	40.0	35.8	31.3
	3. どちらともいえない		14.6	27.6	8.6	16.4	33.3
	4. あまり修得しなかった		2.1	0.0	0.0	1.5	0.0
	5. 修得しなかった		2.1	0.0	0.0	0.0	0.0
【12】 問題解決の企画力	1. 修得した		31.3	37.9	42.9	37.3	37.5
	2. 概ね修得した		37.5	34.5	40.0	41.8	27.1
	3. どちらともいえない		25.0	24.1	17.1	17.9	35.4
	4. あまり修得しなかった		2.1	3.4	0.0	3.0	0.0
	5. 修得しなかった		2.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答		2.1				
【13】 持続的 effort	1. 修得した		45.8	37.9	45.7	41.8	33.3
	2. 概ね修得した		35.4	37.9	40.0	44.8	33.3
	3. どちらともいえない		14.6	20.7	14.3	9.0	33.3
	4. あまり修得しなかった		4.2	3.4	0.0	3.0	0.0
	5. 修得しなかった		0.0	0.0	0.0	1.5	0.0
【14】 新たな知的価値の創出に寄与できる研究職や高度な専門業務に従事するための優れた能力	1. 修得した					33.9	27.1
	2. 概ね修得した					37.5	29.2
	3. どちらともいえない					28.6	41.7
	4. あまり修得しなかった					0.0	2.1
	5. 修得しなかった					0.0	0.0
【15】 大学での学修によって成長を実感していますか	1. そう思う					58.9	66.7
	2. ある程度そう思う					37.5	33.3
	3. あまりそうは思わない					3.6	0.0
	4. そうは思わない					0.0	0.0
【16】 博士後期課程はあなたにとって有意義でしたか。	1. 有意義だった		66.7	62.1	68.6	59.7	45.8
	2. 概ね有意義だった		22.9	17.2	25.7	32.8	20.8
	3. どちらともいえない		10.4	17.2	5.7	6.0	33.3
	4. あまり有意義ではなかった		0.0	0.0	0.0	1.5	0.0
	5. 有意義ではなかった		0.0	3.4	0.0	0.0	0.0
【17】 博士後期課程での学業・研究・経験は就職先または今後の進路で役立つと思いますか。	1. 役立つと思う		66.7	72.4	77.1	58.2	52.1
	2. どちらかという役立つと思う		14.6	13.8	11.4	25.4	6.3
	3. わからない		14.6	10.3	11.4	16.4	41.7
	4. あまり役立たないと思う		4.2	3.4	0.0	0.0	0.0
	5. 全く役立たないと思う		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
【18】 研博士後期課程のカリキュラム・教育等は、実力を身につける上で、上手く組みれていましたか。	1. 組まれていた		29.2	20.7	28.6	22.4	25.0
	2. 概ね組まれていた		27.1	41.4	34.3	41.8	27.1
	3. どちらともいえない		35.4	27.6	31.4	23.9	41.7
	4. 必ずしも組まれていなかった		6.3	3.4	0.0	7.5	4.2
	5. 組まれていなかった		2.1	6.9	5.7	4.5	2.1
【19】 研究環境について、満足度を聞かせてください。	1. 満足		43.8	51.7	42.9	47.8	43.8
	2. 概ね満足		31.3	31.0	42.9	34.3	16.7
	3. どちらともいえない		18.8	13.8	11.4	11.9	37.5
	4. やや不満		4.2	0.0	0.0	3.0	2.1
	5. 不満		2.1	3.4	2.9	3.0	0.0
【20】 指導教員の指導に満足しましたか	1. 満足		56.3	65.5	71.4	61.2	50.0
	2. 概ね満足		29.2	20.7	14.3	23.9	16.7
	3. どちらともいえない		14.6	10.3	8.6	7.5	29.2
	4. やや不満		0.0	3.4	5.7	1.5	0.0
	5. 不満		0.0	0.0	0.0	6.0	0.0

【資料 3-22】修士課程修了生 (修了後 3 年目) アンケート結果

実施年度		2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
	修了時期	2018 (H30)3月	2019 (R1)3月	2020 (R2)3月	2021 (R3)3月
	対象者数	84	83	105	108
	回答者数	7	9	6	15
	回答率	8.3%	10.8%	5.7%	13.9%
【1】現在の身分についてお答えください	A. 学生	0.0	11.1	0.0	13.3
	B. 社会人	85.7	66.7	100.0	86.7
	C. その他	14.3	11.1	0.0	0.0
	D. 無回答		11.1		0.0
【2】1で「学生」とお答えされた方にお聞きます。当てはまるのは次のうちどれですか	A. 京都大学	-	11.1	-	6.7
	B. 他大学	-	0.0	-	6.7
	C. その他	-	0.0	-	0.0
	無回答		88.9		86.7
【3】1で「社会人」とお答えされた方にお聞きます。当てはまるのは次のうちどれですか	A. 就労者 (非正規雇用を含む)	85.7	66.7	100.0	86.7
	B. 非就労者	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答	14.3	33.3		13.3
【4】人間・環境学研究科での学習により身についた、修了後に役立つ能力を選択してください(複数選択可)	A. 幅広い教養・知識	42.9	66.7	100.0	66.7
	B. 専門的な知識と技術	42.9	44.4	33.3	66.7
	C. 国際性 (外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力)	28.6	44.4	33.3	46.7
	D. 企画力、創造的思考力	28.6	55.6	100.0	33.3
	E. 実行力	14.3	22.2	66.7	46.7
	F. 協調性 (チームワーク)	14.3	22.2	33.3	20.0
	G. コミュニケーション能力	28.6	66.7	50.0	46.7
	H. リーダーシップ	0.0	11.1	0.0	20.0
	I. たくましさ (問題解決力)	57.1	66.7	83.3	46.7
	J. 自己管理能力	14.3	44.4	50.0	33.3
	K. 倫理観	14.3	22.2	33.3	20.0
	L. その他	0.0	11.1	16.7	0.0
	M. 無回答				6.7
【6】人間・環境学研究科での学習では身につけなかった能力を選択してください(複数選択可)	A. 幅広い教養・知識	14.3	11.1	0.0	20.0
	B. 専門的な知識と技術	14.3	11.1	16.7	26.7
	C. 国際性 (外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力)	28.6	22.2	33.3	40.0
	D. 企画力、創造的思考力	28.6	11.1	0.0	20.0
	E. 実行力	28.6	11.1	0.0	20.0
	F. 協調性 (チームワーク)	28.6	22.2	33.3	26.7
	G. コミュニケーション能力	14.3	22.2	33.3	13.3
	H. リーダーシップ	28.6	44.4	66.7	33.3
	I. たくましさ (問題解決力)	14.3	11.1	16.7	6.7
	J. 自己管理能力	14.3	0.0	33.3	20.0
	K. 倫理観	14.3	22.2	0.0	20.0
	L. 無回答	14.3			6.7
	【8】(修士修了者)人間・環境学研究科修士課程での修士論文に関わる研究に関してお答えください。修士論文に関わる研究、およびそれに伴う勉学は現在役立っていますか	A. 非常に役に立っている	57.1	33.3	16.7
B. 少しは役に立っている		14.3	44.4	83.3	26.7
C. どちらともいえない		14.3	11.1	0.0	13.3
D. ほとんど役に立っていない		14.3	11.1	0.0	6.7
E. まったく役に立っていない		0.0	0.0	0.0	6.7
【10】(修士修了者)人間・環境学研究科修士課程を修了したことは良かったと思いますか	A. とても良かったと思う	42.9	66.7	83.3	53.3
	B. 良かったと思う	42.9	33.3	16.7	40.0
	C. どちらともいえない	14.3	0.0	0.0	6.7
	D. 良くなかった	0.0	0.0	0.0	0.0

【資料 3-23】 博士後期課程修了生 (認定退学含む)(修了後3年目) アンケート結果

実施年度		2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
修了(認定退学含む)時期		2018(H30)3月	2019(H31)3月	2020(R2)3月	2021(R3)3月
対象者数		19	18	40	33
回答者数		3	7	9	5
回答率		15.8%	38.9%	22.5%	15.2%
【1】現在の身分についてお答えください	A. 学生	0.0	0.0	0.0	0.0
	B. 社会人	100.0	100.0	77.8	100.0
	C. その他	0.0	0.0	11.1	0.0
	D. 無回答			11.1	
【2】1で「学生」とお答えされた方にお聞きします。当てはまるのは次のうちどれですか	A. 京都大学	-	-	-	-
	B. 他大学	-	-	-	-
	C. その他	-	-	-	-
【3】1で「社会人」とお答えされた方にお聞きします。当てはまるのは次のうちどれですか	A. 就労者	100.0	100.0	77.8	100.0
	B. 非就労者	0.0	0.0	0.0	0.0
	無回答			22.2	
【4】人間・環境学研究科での学習により身についた、修了後に役立つ能力を選択してください(複数選択可)	A. 幅広い教養・知識	33.3	85.7	66.7	60.0
	B. 専門的な知識と技術	66.7	100.0	88.9	80.0
	C. 国際性(外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力)	33.3	57.1	22.2	60.0
	D. 企画力、創造的思考力	33.3	28.6	55.6	60.0
	E. 実行力	33.3	42.9	33.3	40.0
	F. 協調性(チームワーク)	33.3	28.6	33.3	40.0
	G. コミュニケーション能力	33.3	28.6	33.3	20.0
	H. リーダーシップ	0.0	14.3	0.0	40.0
	I. たくましさ(問題解決力)	66.7	57.1	33.3	100.0
	J. 自己管理能力	33.3	28.6	22.2	60.0
	K. 倫理観	0.0	14.3	33.3	20.0
	L. その他	0.0	0.0	0.0	0.0
【6】人間・環境学研究科での学習では身につかなかった能力を選択してください(複数選択可)	A. 幅広い教養・知識	66.7	0.0	0.0	40.0
	B. 専門的な知識と技術	0.0	0.0	0.0	20.0
	C. 国際性(外国のことを理解する力及び日本のことを伝える力)	33.3	14.3	22.2	2.0
	D. 企画力、創造的思考力	33.3	14.3	11.1	0.0
	E. 実行力	0.0	0.0	11.1	0.0
	F. 協調性(チームワーク)	0.0	28.6	0.0	20.0
	G. コミュニケーション能力	0.0	14.3	0.0	20.0
	H. リーダーシップ	33.3	14.3	33.3	40.0
	I. たくましさ(問題解決力)	0.0	0.0	0.0	0.0
	J. 自己管理能力	0.0	0.0	11.1	40.0
	K. 倫理観	33.3	28.6	0.0	0.0
	L. 無回答		42.9	33.3	40.0
【8】(人・環修士修了者のみ)人間・環境学研究科修士課程での修士論文に関わる研究に関してお答えください。修士論文に関わる研究、およびそれに伴う勉学は現在役立っていますか	A. 非常に役に立っている	66.7	42.9	66.7	40.0
	B. 少しは役に立っている	0.0	28.6	0.0	0.0
	C. どちらともいえない	0.0	0.0	11.1	0.0
	D. ほとんど役に立っていない	0.0	0.0	0.0	0.0
	E. まったく役に立っていない	0.0	0.0	0.0	0.0
	F. 無回答	33.3	28.6	22.2	60.0
【10】(人・環修士修了者のみ)人間・環境学研究科修士課程を修了したことは良かったと思いますか	A. とても良かったと思う	66.7	42.9	22.2	40.0
	B. 良かったと思う	0.0	28.6	44.4	0.0
	C. どちらともいえない	0.0	0.0	11.1	0.0
	D. 良くなかった	0.0	0.0	0.0	0.0
	E. 無回答	33.3	28.6	22.2	60.0



教育研究指導

4. 教育研究指導

【資料 4-1】履修指導について

総合人間学部

(2024 (R6) 年度)

取り組み	実施状況
<p>新入生ガイダンス 2024年4月5日(金) 13:00～13:25</p>	<p>担任、教員アドバイザー、指導教員等の制度に関する説明を行うとともに、学生相談室、人権相談窓口、吉田南総合図書館、同窓会についての案内を行った。(新入生全員が参加)</p>
<p>新入生 履修ガイダンス・各クラス担当との顔合わせ 2024年4月5日(金) 13:30～15:30</p>	<p>新入生を対象として、カリキュラムの概要、卒業判定基準単位表(卒業要件)、時間割等について説明した。あわせて公正な学術活動についても言及した。(新入生全員が参加)</p>
<p>新2・3回生学系ガイダンス 2024年4月1日(月) 11:00～ 人間学系 9:30～ 文化環境学系 10:00～ 自然科学系 13:00～ 認知情報学系 13:30～ 国際文明学系</p>	<p>【新2回生】履修コースを提示し、卒業論文・卒業研究に至る過程(研究公正に関することを含む)の説明を行った。 【新3回生】指導教員の決定方法や卒業論文・卒業研究に至る過程(研究公正に関することを含む)を説明し、大学院進学や就職等進路について情報提示を行った。 ・学系をまだ決めていない学生も、いずれかのガイダンスに参加するようアナウンスを行い、新4回生には全体ガイダンスは実施せず個別相談を受付</p>
<p>講座分属説明会 2024年9月30日(月) ・1回生対象 (2回生以上の参加も認める)</p>	<p>2回生進級時に所属する講座を決定する際の参考とするため、各講座主任及び関係教員からそれぞれの講座の履修モデルを説明し、履修指導を行った。 9:30～ 第1 情報科学講座 10:15～ 第2 人間・社会・思想講座 11:00～ 第3 芸術文化講座 11:45～ 第4 認知・行動・健康科学講座 13:15～ 第5 言語科学講座 14:00～ 第6 東アジア文明講座 14:45～ 第7 共生世界講座 15:30～ 第8 文化・地域環境講座 16:15～ 第9 物質科学講座 17:00～ 第10 地球・生命環境講座</p>
<p>単位取得状況についての確認及び1回生の外国語出席状況の把握</p>	<p>教務委員会において単位修得がおもわしくない、いわゆる修学不適應を生じる可能性のある学生を把握し、クラス担任、教員アドバイザー、指導教員を通じてコンタクトを取るなどそのケアに取り組んだ。また、1回生の外国語授業への出席状況が良くない学生についても、クラス担任を通じて学生への連絡・指導を行うなど、早期ケアに取り組んだ。</p>

人間・環境学研究科

(2024 (R6) 年度)

取り組み	実施状況
<p>新入生オリエンテーション 2024年4月5日(金) 11:00～12:30</p>	<p>修士課程新入生及び博士後期課程編入学生全員を対象に、大学院科目の履修等について説明した。(欠席者には当日の資料を配布。) 引き続き、講座別オリエンテーション(16:30～17:30)を開催した。</p>
<p>修士2回生 履修・進路指導説明会</p>	<p>修士2回生を対象として、修士課程の修了要件、修士論文作成までのスケジュール等について説明した。(欠席者に対しては資料を配布。)</p>
<p>修士学位論文作成説明会 オンライン【Zoom】 2024年10月4日(金)16:45～</p>	<p>修士2回生を対象として、修士学位論文作成に関する注意事項等を説明した。</p>
<p>博士学位論文作成説明会 オンライン【Zoom】 2024年9月27日(金)10:30～</p>	<p>博士3回生を対象として、博士学位論文作成に関する注意事項等を説明した。</p>
<p>副指導教員・アドバイザー制度</p>	<p>学生ごとに指導教員の他に指導教員とともに研究指導を受けることができる副指導教員1名とともに、修士課程には修学や生活面の日常的な助言を受けることができるアドバイザー1名を置いている。</p>

【資料 4-2】 附属学術越境センター・学際教育研究部の活動

① 附属学術越境センターの活動

学術越境センターのミッション

人間・環境学研究科では、令和5年度に、学術越境力を備え、総合知の創出と活用に貢献できる研究者・実務家の育成に向け、従来の3専攻（共生人間学専攻、共生文明学専攻、相関環境学専攻）を1専攻に統合・再編する形で改組し、新専攻（人間・環境学専攻）を設置した。一専攻化にすると同時に、学術分野間、産官学連携、国際連携の教育研究機会の創出と提供を通じて、修了後に社会の諸領域で総合知の創出と活用に貢献できる人物の育成を目指して、学術越境センターが設置された。

センターでは、以下のカリキュラムを行う

- ① 学生が主体的に実行できる柔軟かつ先導的カリキュラム 「学術越境プログラム」、海外留学や学際共同研究
- ② 他の専門分野の専門家と対話する教育カリキュラム 「研究を他者と語る」「分野横断中間発表」「学術越境科目」
- ③ 知識を持たない他者に専門知をわかりやすく伝える力を養成するカリキュラム 「教養教育実習」「学際研究演習」

これらの実践を通して、高度知識社会の中で、人文・社会科学の知と自然科学の知を融合するのに不可欠な、異なる分野間で専門的な深い対話をする力、すなわち学術架橋力を備えた人物の育成を目指す。さらには、学術架橋力を備えた人物が、学術界、産業界、行政組織、国際組織、高等教育組織などで総合知の創出と活用に貢献することで、Society5.0の実現という社会的需要に応えようとするものである。

学術越境センターの組織

- ① 学術越境コーディネータ センターの司令塔機能を果たし、新たな教育モデルへの挑戦と深い検証を行う
 - ② 学術越境サポーター 「研究を他者と語る」などの実施に際し、学生へのサポートを行う
 - ③ 学術越境プログラム推進担当 学術越境を志向する博士後期課程学生に、学術越境プログラムを推進する
 - ④ 大学院カリキュラム企画運営担当 研究科共通プログラムである「研究を他者と語る」などの企画・評価を行う
- (③④は、各講座の教員が兼担任で行う)

学術越境プログラム

学内外教育組織・支援組織と連携しつつ、人社会と理系研究の融合を加速し、教養知を基盤とした「学術架橋力」を備え、将来、Society5.0に求められる人文・社会科学と自然科学の知を融合した「総合知」の創出と活用により貢献できる人物を輩出することを目的とする。

修士課程から5年間で博士学位の取得を目指す学生の中から、意欲と能力を備えた学生に対して多様な支援を行うもので、2つのフェイズからなる。

◆フェイズ1-支援プログラム

応募資格：人間・環境学研究科 博士後期課程進学を検討している修士1年生

修士課程の学生が、分野連携教育研究や産学連携教育研究、国際連携教育研究などの学術越境研究へと展開するための挑戦的な準備活動に対して、修士課程在学中に行う支援プログラム。学生は、自身の問題意識に基づき、指導教員や学術越境コーディネータの助言を受けながら、博士後期課程における学術越境実践を含む研究活動の計画立案とプロポーザルの提出を行う。

◆フェイズ2-支援プログラム

応募資格：人間・環境学研究科 博士後期課程進学を検討している修士2年生

博士後期課程に在籍する大学院生の研究活動を支援するプログラム。学術越境的な研究、産官学連携、国際連携が必要な研究活動に特化している。学生は、審査を経て選ばれた研究計画を実践する。実際の研究活動の遂行に加えて、定期的な進捗報告、フェイズ1に参加する修士課程学生に向けた自らの学術越境研究経験の発信なども行う。

学術越境研究計画Ⅰ・Ⅱ

◆学術越境研究計画Ⅰ（修士課程1年生を対象）

研究科で行われている分野横断研究、産官学連携、国際連携などの学術越境活動（学術越境プロジェクト）を紹介し、学術越境を実践している学生の体験を知ることにより、自らの学術越境的な研究計画立案のための手がかりを得ることを目的とする。

◆学術越境研究計画Ⅱ（修士課程2年生を対象）

研究科で行われている分野横断研究、産官学連携、国際連携などの学術越境活動を紹介し、学術越境を実践している学生の体験を知ることにより、自らの問題意識に基づいて博士後期課程で実践する学術越境研究計画を立案することを目的とする。

○学術越境プロジェクト

研究科の教員が参画する、分野連携、産官学連携、国際連携を目指す研究プロジェクトのうち、研究科の学生を受け入れることができるものについて「学術越境プロジェクト」としてセンターから支援を行い、学生の学術越境活動を促進する。

研究を他者と語る（修士課程の大学院生全員が参加する「教養知科目」として設定）

専門を共有しない他社に専門術を伝える力としての教養知の涵養を目指し、異なる講座に属する大学院生5名程度がグループとなり、専門的知見を他の分野の大学院生と議論をする。各グループには、学際研究演習の一環として参加する博士課程の大学院生1名が、コーディネーターとして議論をリードする。

② 附属学術越境センター 主催・共催事業

2023 (R5)	主催 (2件)	2023年5月25日(木)16:45～18:15 ・学術越境研究計画計画一般公開講演 Project Planning in Transdisciplinary Research - Public Lecture ◇講演 木下千花(人間・環境学研究科教授)"Film as Performance: Reframing Benshi and Japanese Early Cinema in the Age of New Media" ◇カンサス州立大学学部生との交流会
		2023年11月30日(木)・修了生による講演会 ◇萩原広道先生(大阪大学人間科学研究科行動生態学講座助教2021年3月博士(人間・環境学)取得)
	共催 (6件)	2023年10月26日(木)16:45～18:45・第84回国際交流セミナー ◇講演 ハーバード大学 Mahzarin R. Banaji 教授 Blindspot: Hidden Biases of Good People (ブラインドスポット: 善き人々の隠れたバイアス)
		2023年11月10日(金)13:30～16:30 ・京都大学オープンイノベーション機構シンポジウム「Beyond 2050 プロローグ」～京都大学が描く未来の社会像～ ◇ファシリテーター 齋木潤(人間・環境学研究科教授)
		2023年11月11日(土)14:00～16:00 ・日本基礎心理学会2023年度第2回フォーラム テーマ"Implicit Social Cognition" ◇講演 ハーバード大学 Mahzarin R. Banaji 教授 / ◇企画・司会 齋木潤(人間・環境学研究科教授)
		2023年11月18日(土) ・国際研究集会 L'Asie du Nord-Est entre singularités et convergences dans le rapport aux mondes francophones et à la F/francophonie ◇開会セッション 西山教行(人間・環境学研究科教授)
		2023年12月16日(土)～17日(日)・日本漢字学会第6回研究大会 ◇開会の辞 佐野 宏 大会委員長(人間・環境学研究科教授)
2024年3月13日(水)18:50～20:00 ・第8回若者文化シンポジウム「国際比較からみる若者のアイデンティティと社会参加」 ◇モデレーター 吉田 純(人間・環境学研究科教授・山岡記念財団諮問委員)		
2024 (R6)	主催 (3件)	2024年5月30日(木)16:45～18:15 ・大学院科目「学術越境研究計画」一般公開講演 ◇講演 萩原広道先生(大阪大学人間科学研究科助教)「学術越境って軽やかにできるの? : 発達研究とボードゲーム開発を例に」
		2024年10月17日(木)16:45～18:15 ・大学院科目「学術越境研究計画」一般公開講演 ◇講演 縄田浩志(人間・環境学研究科教授)「そこに学術越境の道があった—社会にとって自分にしかできないことはあるか」
		2024年10月24日(木)16:45～18:15 ・大学院科目「学術越境研究計画」一般公開講演 ◇講演 田代 藍(人間・環境学研究科特定准教授)「学術越境から考える気候変動適応とプラネタリーヘルス」
	共催 (1件)	2024年12月09日(月)10:00～12:00 ・学術越境による社会実装をめざした企業の心理学研究 ◇サービス事業会社2社がおこなう心理学研究について発表 主催:株式会社シンギュレイト、ミイダス株式会社
	学生支援 (1件)	2024年11月8日(金)～9日(土) ・学会参加支援: 南三陸いのちめぐるまち学会 (参加を希望する大学院生に資金援助)
	越境ゼミ (2回)	2024年11月28日(木)16:45～18:15 ・第1回大学院科目「学術越境研究計画」越境ゼミ「学術越境ってなんやねん!?—軽やかな越境に向けたオープンディスカッション」 ◇進行・話題提供1) 森口 武(博士後期課程 文化・地域環境講座 文化人類学) 2) 播磨美有(博士後期課程 東アジア文明講座 中国近現代史)
		2024年12月19日(木)16:45～18:15・第2回大学院科目「学術越境研究計画」越境ゼミ 「学術越境」研究ってどうやるの?—博士課程の実践を踏まえたダイアローグ— ◇進行・話題提供1) 大前裕佳(博士後期課程 認知・行動・健康科学講座 視覚認知) 2) 山崎嘉那子(博士後期課程 文化・地域環境講座 文化人類学)
フィールド エンカ ウンター 学生実習 (2回)	2024年10月21日(月)～22日(火) ・第1回 Field Encounter「芦生」 ◇テーマ「美山町の自然の保全と利用、芦生研究林における研究活動を学ぶ」	
	2024年11月11日(月)～12日(火) ・第2回 Field Encounter「尼崎」 ◇テーマ「人文研と尼崎市立歴史博物館で史料の情報化とアーカイブズを学ぶ」	

フィールドエンカウンター: 1泊2日程度のプログラムで異なる専門を持つ学生が固有の研究フィールドを体験しながらディスカッションすることを通して、相互理解と学術越境に関する様々な気づきを得ることを目指す(費用は学術越境センターが負担)。

③ 学際教育研究部 主催・共催事業

2020 (R2)	共催 (1 件)	2021年2月16日(火)16:00~18:15 ・第5回若者文化シンポジウム「ことばの伝統と現代コミュニケーション」～日本とドイツ～ ◇モデレーター 吉田 純(人間・環境学研究科教授・山岡記念財団諮問委員)
2021 (R3)	主催 (1 件)	「国際的研究のためのワークショップ」 基調講演とQ & A と国際会議でのプレゼンテーションに関するオンライン・ワークショップ 2021年11月20日(土)10:00~12:00 ・基調講演とQ & A ◇志村真幸 先生「学問は「越境」できるのか：南方熊楠を研究する」 (京都外国語大学/2008年学位取得/比較文化史学) ◇岡澤剛起 先生「サイエンスをやるということ、海外ですということ」 (神経科学研究所(上海)/2008年総合人間学部卒業/神経科学) 2022年1月4日(月)10:00~15:00 ・国際会議でのプレゼンテーションに関するオンライン・ワークショップ ◇講師 Dr. Iris WIECZOREK (アイリス・ヴィーツォレク博士) (IRIS 科学・技術経営研究所) 人間・環境学研究科所属の博士課程学生・ポスドク等、これから国際的に研究発信をしようとする若手研究者に対するオンラインワークショップ
	共催 (3 件)	2021年10月17日(日)10:00~16:00 ・第74回萬葉学会全国大会 ◇挨拶 小島泰雄(人間・環境学研究科長) ◇講演 内田賢徳(京都大学名誉教授)「天平綺譚一 万葉集卷十六の意匠一」 ----- 2021年10月23日(土)~2021年10月25日(月) Zoom オンライン ・International Online Conference on Global Transformation of Christian Zionism 2021年10月23日(土) ◇開会挨拶 岡 真理(人間・環境学研究科教授) ◇イントロダクション 役重善洋(京都大学人文学連携研究者) ----- 2022年2月16日(水)16:00~19:20 ・第6回若者文化シンポジウム「現代文化にみる東西の交流」(日独同時通訳) ◇モデレーター 吉田 純(人間・環境学研究科教授・山岡記念財団諮問委員)
	主催 (1 件)	2022年11月19日(土)10:00~12:00 ・「国際的研究に関する講習会」基調講演とQ & A ◇橋谷龍成 先生「「専門性」をもつということ」 (大阪大学)(2016年人間・環境学研究科修士課程修了/結晶化学) ◇Anastasia Fedorova 先生「映画は誰のもの？現代ロシアにおける日本映画の研究・上映をめぐる」 (ロシア国立研究大学経済高等学院/2014年人間・環境学研究科にて学位取得/映画史) ◇総合討論と質疑応答
2022 (R4)	共催 (2 件)	2022年9月30日(金)13:00~17:00 協賛事業 国際ガラス年 2022 ・国際ガラス年 2022 記念シンポジウム ハイブリッド開催 第二セッション「ガラスと私たちの未来」招待講演 ◇田部勢津久(国際ガラス年日本実行委員会委員長・人間・環境学研究科教授) 2022年12月8日(金)~9日(土) ・国際ガラス年 CLOSING CONFERENCE (東京大学 オンライン) 12月8日(金) Welcome Address Setsuhisa ◇ Tanabe (President of Japanese executive committee for IYOG2022) ----- 2023年3月8日(水)16:00~19:20 ・第7回若者文化シンポジウム「日本とドイツに見る異文化の受容と変容」 ◇モデレーター 吉田 純(人間・環境学研究科教授・山岡記念財団諮問委員)

【資料 4-3】「総人のミカタ」講義リスト (令和 2～6 年度)

総人のミカタは、2017(平成 29 年)に始まった人間・環境学研究科の大学院生が主催しているボトムアップ型の大学院生 FD 活動。人間・環境学研究科の大学院生が、主に総合人間学部の学部生向けに、90 分間の模擬講義をリレー形式で行っている。学部生・大学院生のためのピアサポート企画というだけでなく、講義後に大学院生や他の参加者と気軽に話せるフリートークや、大学院生メンバーで講義の内容や方法についての検討会も行っている。

年度	タイトル	担当分野	日時
2020(R2)	1 人環の先輩の話聞いてみよう！！	イントロダクション	2020 年 10 月 1 日 (木)
	2 ジョン・ケージと「モダニズム」の連続性	美学・芸術学	2020 年 10 月 8 日 (木)
	3 総人生、化学を語る	触媒化学	2020 年 10 月 15 日 (木)
	4 ジョン・ケージによる「モダニズム」からの転換	美学・芸術学	2020 年 10 月 22 日 (木)
	5 化学の世界 — 光触媒を例に—	触媒化学	2020 年 11 月 5 日 (木)
	6 意味解釈における語用論の役割について — 「俺か、俺以外だ」を例に	認知言語・誤用論	2020 年 11 月 12 日 (木)
	7 教養理念と近代大学の成立	ドイツ政治思想史	2020 年 11 月 19 日 (木)
	8 語の意義と発話解釈について — good stone は何が good なのか	認知言語・誤用論	2020 年 12 月 3 日 (木)
	9 ドイツ政治思想史	ドイツ政治思想史	2020 年 12 月 10 日 (木)
	10 ディスカッション (芸術学) × (触媒化学)		2020 年 12 月 17 日 (木)
	11 ディスカッション (認知言語・誤用論) × (ドイツ政治思想史)		2021 年 1 月 14 日 (木)
2021(R3)	1 身体運動を科学する	運動制御	2021 年 8 月 23 日 (月)
	2 歴史学を体験する — 鎌倉幕府成立から	日本中世史	2021 年 8 月 24 日 (火)
	3 歴史学を体験する — 古文書を眺める (仮)	日本中世史	2021 年 8 月 25 日 (水)
	4 ヒトはどのようにして運動を学習するのか？	運動制御	2021 年 8 月 26 日 (木)
	5 ディスカッション (運動制御) × (日本中世史)		2021 年 8 月 27 日 (金)
	6 「理解」とは何かを巡って	哲学	2022 年 3 月 2 日 (水)
	7 日常的な相互行為場面の分析について (初歩)1	社会学	2022 年 3 月 3 日 (木)
	8 「理解」の二つの方向性	哲学	2022 年 3 月 4 日 (金)
	9 日常的な相互行為場面を分析する (初歩)2	社会学	2022 年 3 月 7 日 (月)
	10 ディスカッション (社会学 × 哲学)		2022 年 3 月 8 日 (火)
2022(R4)	1 運動は脳の自動制御により成り立つ	運動制御	2022 年 8 月 5 日 (金)
	2 信賴できない語り手」とカズオ・イシグロ	英文学	2022 年 8 月 8 日 (月)
	3 立って動くことは大変なこと	運動制御	2022 年 8 月 9 日 (火)
	4 イシグロ文学のテーマの系譜	英文学	2022 年 8 月 10 日 (水)
	5 ディスカッション (英文学) × (運動制御)		2022 年 8 月 11 日 (木)
	1 エドガー・アラン・ポーという作家	アメリカ文学①	2023 年 2 月 15 日 (水)
	2 日本史への招待	日本史①	2023 年 2 月 16 日 (木)
	3 エドガー・アラン・ポーの詩的世界	アメリカ文学②	2023 年 2 月 17 日 (金)
	4 作り話が語る日本史	日本史②	2023 年 2 月 20 日 (月)
	5 ディスカッション (アメリカ文学) × (日本史)		2023 年 2 月 21 日 (火)
2023(R5)	1 講義 化学	化学	2023 年 6 月 24 日 (土)
	2 講義 哲学	哲学	
	3 ディスカッション (化学) × (哲学)		
	4 現代政治学が目指すもの ポリサイ入門 — 首相と大統領、どちらが強い？	政治制度論	2023 年 12 月 23 日 (土)
	5 講義 社会学	社会学 (自衛隊研究)	
	6 ディスカッション (政治制度論) × (社会学)		
2024(R6)	1 自分を、世界を、哲学を「解釈」する	哲学	2024 年 6 月 25 日 (火)
	2 心の研究の広がり	発達科学	2024 年 7 月 4 日 (木)
	3 個体生態学とその使い道	生態学	2024 年 7 月 8 日 (月)
	4 ディスカッション「私の分野と学際」		2024 年 7 月 11 日 (木)
	5 自然数を定義する	数学	2024 年 10 月 10 日 (木)
	6 脳科学の轟動的魅力 — 私たちは脳科学にどこまで期待して良いのか —	神経科学	2024 年 10 月 24 日 (木)
	7 ディスカッション (数学) × (神経科学)		2024 年 11 月 7 日 (木)
	8 ヒトが運動をうまく行うしくみ	スポーツ心理学	2024 年 11 月 28 日 (木)
	9 好きを研究に変える — 社会学の視点から	社会学	2024 年 12 月 12 日 (木)
	10 ディスカッション (スポーツ心理学) × (社会学)		2024 年 12 月 26 日 (木)
	11 「卒論について聞いてみよう！」		2025 年 1 月 16 日 (木)

【資料 4-4】他大学・公的機関および企業との共同研究

年度	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
他大学・公的機関および企業との共同研究	9	10	8	12	13

・ 科研費・受託研究等を除く

<p>2020(R2) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・University of Rhode Island (USA) / Ball State University (USA) / Christian-Albrechts-Universität zu Kiel (ドイツ) / University of North Texas、・京セラ株式会社、・大塚化学株式会社 / ヒロセ・ユニオン株式会社、・コペンハーゲン大学、・九州大学、・千葉大学、・物質・材料研究機構 / 早稲田大学、・名古屋大学、・東京工業大学 / 産業技術総合研究所 / 電力中央研究所
<p>2021(R3) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・University of Rhode Island (USA) / Ball State University (USA) / Christian-Albrechts-Universität zu Kiel (ドイツ) / University of North Texas、・群馬大学生体調節研究所ゲノム科学リソース分野、・名古屋大学高等研究院 / University of Central Lancashire、・大塚化学株式会社 / ヒロセ・ユニオン株式会社、・コペンハーゲン大学、・九州大学、・千葉大学、・物質・材料研究機構 / 早稲田大学、・名古屋大学、・東京工業大学 / 産業技術総合研究所 / 電力中央研究所
<p>2022(R4) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・University of Rhode Island (USA) / Ball State University (USA) / Christian-Albrechts-Universität zu Kiel (ドイツ) / University of North Texas、・名古屋大学高等研究院 / University of Central Lancashire、・いすゞ中央研究所、・大塚化学株式会社、・コペンハーゲン大学、・九州大学、・千葉大学、・名古屋大学、・東京工業大学 / 産業技術総合研究所 / 電力中央研究所
<p>2023(R5) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名古屋大学高等研究院 / University of Central Lancashire、・本田技研工業、・大塚化学、・いすゞ中央研究所、・コペンハーゲン大学、・九州大学、・千葉大学、・名古屋大学、・東京工業大学 / 産業技術総合研究所 / 電力中央研究所、・The University of Rhode Island (USA)、・アストロバイオロジーセンター / 北海道大学、・株式会社 SeedBnk
<p>2024 (R6) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・九州大学、・千葉大学、・名古屋大学、・東京工業大学 / 産業技術総合研究所 / 電力中央研究所、・The University of Rhode Island (USA)、・RadiNano Therapeutics 株式会社、・アストロバイオロジーセンター / 名古屋大学、・本田技研工業、・いすゞ中央研究所、・株式会社 SeedBnk、・慶應義塾大学、・株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所、・Universität Münster (ミュンスター大学)

【資料 4-5】他大学・公的研究機関の共同利用施設・設備の利用に関わる研究課題採択数

年度	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R)	2024 (R6)
他大学・公的研究機関の共同利用施設・設備の利用に関わる研究課題採択数	8	8	7	7	3

<p>2020 (R2) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●京都大学複合原子力科学研究所「抗がん剤を担持した六方晶窒化ホウ素によるガン化学療法とホウ素中性子捕捉療法のハイブリッドナノ医療」(代表者) / ●京都大学複合原子力科学研究所「Gadolinium を担持したナノ粒子による Gd-NCT の基礎研究」(協力者) / ●大阪市立大学人工光合成研究センター「光触媒による新規な合成化学反応の開発」 / ●佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター「採択研究課題：角度分解光電子分光を用いたチタン酸化物の電子バンド構造の研究(前期)(後期)」 / ●国立民族学博物館「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」 / ●東京大学「S 置換した FeSe の高圧低温下 NMR 測定」 / ●広島大学放射光科学センター「角度分解光電子分光による Ca₃Ru₂-xTi_xO₇ の不純物効果と金属絶縁体転移の観測」 / ●SPRING-8「電場印加硬 X 線光電子分光による励起子絶縁体の非線形電気伝導の研究」
<p>2021 (R3) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●京都大学複合原子力科学研究所「抗がん剤を担持した六方晶窒化ホウ素によるガン化学療法とホウ素中性子捕捉療法のハイブリッドナノ医療」(代表者) / ●京都大学複合原子力科学研究所「Gadolinium を担持したナノ粒子による Gd-NCT の基礎研究」(協力者) / ●大阪市立大学人工光合成研究センター「光触媒的合成化学反応の開発」 / ●佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター「角度分解光電子分光を用いたチタン酸化物の電子構造の研究」 / ●国立民族学博物館「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」 / ●東京大学「S 置換した FeSe の高圧低温下 NMR 測定」 / ●広島大学放射光科学センター「Ru ナノシートにおける金属絶縁体転移の基板依存性」 / ●高エネルギー加速器研究機構放射光実験施設 Photon Factory「遷移金属カルコゲナイド化合物における励起子効果の電子状態解析」
<p>2022 (R4) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国立民族学博物館「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」 / ●名古屋大学「人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」 / ●東京大学「S 置換した FeSe の高圧低温下 NMR 測定」 / ●名古屋大学未来材料・システム研究所「宇宙線を用いた気象観測手法の開発」 / ●SPRING-8「高温超伝導体 La₂-xS_xCuO₄ の化学ポテンシャルの温度依存性」 / ●高エネルギー加速器研究機構放射光実験施設 Photon Factory「La 系高温超伝導体の共鳴軟 X 線角度分解光電子分光」 / ●京都大学複合原子力科学研究所「抗がん剤を担持した六方晶窒化ホウ素によるガン化学療法とホウ素中性子捕捉療法のハイブリッドナノ医療」(代表者)
<p>2023 (R5) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●大阪公立大学附属植物園「タチツボスミレ類の系統分類学的研究—未記載種の特定、分類再検討、絶滅危惧種の保全—」 / ●京都大学複合原子力科学研究所「抗がん剤を担持した六方晶窒化ホウ素によるガン化学療法とホウ素中性子捕捉療法のハイブリッドナノ医療」 / ●名古屋大学大学院人文科学研究科附属人文知共創センター「人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」 / ●大阪市立大学人工光合成研究センター「二酸化炭素還元のためのチタン系光触媒の開発 / 陽熱メタンリフォーミング触媒の開発」 / ●京都大学複合原子力科学研究所「ホウ素を含むナノ粒子によるがん中性子捕捉療法に関する研究」 / ●名古屋大学高等研究院「惑星科学の新展開：宇宙生物学の拠点形成；The formation and evolution of exomoons around giant planets」 / ●京都大学複合原子力科学研究所「二酸化炭素還元のためのチタン系光触媒の開発 / 陽熱メタンリフォーミング触媒の開発」
<p>2024 (R6) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●名古屋大学大学院人文科学研究科附属人文知共創センター「人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」 / ●京都大学複合原子力科学研究所「ホウ素を含むナノ粒子によるがん中性子捕捉療法に関する研究」 / ●名古屋大学研究力強化促進事業若手新分野創成研究ユニット・フロンティア「緑の海仮説の検証と太陽系外惑星における生命活動の指標の提案；Astrobiology: Testing the Green Sea Hypothesis and Proposing Indicators of Biological Activity on Exoplanets」
<p>2023 (R5) 年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ●東京大学「S 置換した FeSe の高圧低温下 NMR 測定」 / ●名古屋大学「人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う」 / ●大阪公立大学附属植物園「タチツボスミレ類の系統分類学的研究—未記載種の特定、分類再検討、絶滅危惧種の保全—」 / ●京都大学複合原子力科学研究所「抗がん剤を担持した六方晶窒化ホウ素によるガン化学療法とホウ素中性子捕捉療法のハイブリッドナノ医療」(代表者) / ●大阪市立大学人工光合成研究センター「二酸化炭素還元のためのチタン系光触媒の開発 / 陽熱メタンリフォーミング触媒の開発」

【資料 4-6】地域での兼業一覧（非公開）

【資料 4-7】競争的研究費等受入状況

①【科学研究費助成事業】

年度	本務 教員数	申請件数 (新規)	内定件数 (新規)	内定件数 (継続)	内定件数 (新規・ 継続)	本務教員 あたりの 申請件数 (新規)	本務教員 あたりの 内定件数 (新規)	本務教員 あたりの 内定件数 (新規・ 継続)	科研費 採択内定 率(新規)	内定金額 (直接経費) (千円)	内定金額 (間接経費) (千円)	内定金額 (間接経費 含む) (千円)	本務教員 あたりの 内定金額 (千円)	本務教員 あたりの 内定金額 (間接経費 含む) (千円)
2020(R2)	119	68	30	63	93	0.571	0.252	0.782	44.1%	238,700	71,610	310,310	2,006	2,608
2021(R3)	123	43	18	59	77	0.350	0.146	0.626	41.9%	224,400	67,320	291,720	1,824	2,372
2022(R4)	121	55	22	55	77	0.455	0.182	0.636	40.0%	214,200	64,260	278,460	1,770	2,301
2023(R5)	120	56	21	55	76	0.467	0.175	0.633	37.5%	221,400	66,420	287,820	1,845	2,399
2024(R6)	124	53	25	54	79	0.427	0.202	0.637	47.2%	226,100	67,830	293,930	1,823	2,370

対象とした研究種目

特別推進研究
 新学術領域研究
 学術変革領域研究 (A)
 学術変革領域研究 (B)
 基盤研究 (S)
 基盤研究 (A)
 基盤研究 (B)
 基盤研究 (C)
 挑戦的研究・挑戦的萌芽
 若手研究
 研究活動スタート支援
 奨励研究
 独立基盤形成支援
 国際共同研究加速基金

対象としなかった研究種目

特別研究促進費
 特別研究員奨励費
 研究成果公開促進費

②【寄付金】

年度	本務教員数	寄附金受入 件数	本務教員 あたりの 寄附金受入 件数	寄附金 受入金額 (千円)	本務教員 あたりの 寄附金受入 金額(千円)
	①	②	②÷①	③	③÷①
2020(R2)	119	33	0.28	17,959	151
2021(R3)	123	35	0.28	20,842	169
2022(R4)	121	42	0.35	15,073	125
2023(R5)	120	42	0.35	12,144	101
2024(R6)	124	29	0.23	21,575	174

③【共同研究】

年度	本務教員数	共同研究 受入件数 (総数)	本務教員 あたりの 受入件数	受入件数 (国内企業・ 外国企業)	本務教員 あたりの 受入件数 (国内企業・ 外国企業)	受入金額 (総額) (千円)	本務教員 あたりの 受入金額 (千円)	受入金額 (国内企業・ 外国企業) (千円)	本務教員 あたり 受入金額 (国内・外国 企業からのみ) (千円)	共同研究員 受入人数
	①	②	②÷①	③	③÷①	④	④÷①	⑤	⑤÷①	⑥
2020(R2)	119	11	0.09	11	0.09	17,676	149	17,676	149	1
2021(R3)	123	11	0.09	11	0.09	22,011	179	22,011	179	1
2022(R4)	121	15	0.12	15	0.12	32,635	270	32,635	270	2
2023(R5)	120	16	0.13	16	0.13	48,584	405	48,584	405	
2024(R6)	124	13	0.10	12	0.10	28,042	226	26,542	214	

④【受託研究】

年度	本務教員数	受入件数	本務教員あたりの受入件数	受入件数 (国内・外国 企業からのみ)	本務教員あたりの受入件数 (国内企業・ 外国企業)	受入金額 (千円)	本務教員あたりの受入金額 (千円)	受入金額 (国内企業外 国企業) (千円)	本務教員あたりの受入金額 (国内企業・ 外国企業) (千円)	⑥受託研究員 受入人数
2020(R2)	119	12	0.10	0	0.000	240,745	2,023	0	0	1
2021(R3)	123	16	0.13	0	0.000	360,863	2,934	0	0	3
2022(R4)	121	15	0.12	0	0.000	299,758	2,477	0	0	0
2023(R5)	120	14	0.12	0	0.000	194,029	1,617	0	0	
2024(R6)	124	10	0.08	0	0.000	81,488	657	0	0	

⑤【特許】

年度	本務教員数	特許出願数	特許取得数	本務教員あたりの特許出願数	特許保有数			本務教員あたりの特許保有数
					国内	外国	合計	
①	②	③	②÷①	④			④÷①	
2020(R2)	119	7	0	0.059	8	2	10	0.08
2021(R3)	123	11	0	0.089	7	2	9	0.07
2022(R4)	121	16	0	0.132	5	0	5	0.04
2023(R5)	120	14	8	0.117	7	6	13	0.11
2024(R6)	124	13	3	0.105	9	7	16	0.13

⑥【全体版】

(億)

	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)	合計
科学研究費助成事業等 (億)	2.68	3.21	3.64	2.96	3.28	15.77
受託・共同事業費 (億)	0.02	0.04	0.03	0.03	0.21	0.115
共同研究費 (億)	0.16	0.20	0.27	0.41	0.24	1.04
受託研究費 (億)	2.48	3.14	3.21	2.27	4.52	15.62
寄付金 (億)	0.19	0.21	0.28	0.12	0.21	1.01
補助金等 (億)	0.14	0.17	0.20	0.23	0.55	1.29
合計 (億)	5.67	6.97	7.63	6.02	9.01	34.845
本務教員数 (人)	119	123	121	120	124	
本務教員あたりの競争的研究費 (千円)	4,761	5,667	6,306	5,017	7,266	

【資料 4-8】学生の学会発表者数

	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)			
	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	
国内会議	発表者 (筆頭著者)	2 (2)	40 (29)	69 (55)	1 (1)	41 (24)	92 (56)	4 (4)	43 (36)	95 (67)	4 (3)	59 (45)	88 (70)	3 (1)	44 (28)	92 (74)
	総計 (筆頭著者)	111 (86)			134 (81)			142 (107)			151 (118)			139 (103)		
国際会議	発表者 (筆頭著者)	0 (0)	4 (3)	13 (13)	0 (0)	3 (3)	30 (29)	0 (0)	0 (0)	24 (22)	1 (1)	17 (17)	32 (26)	0 (0)	10 (6)	29 (27)
	総計 (筆頭著者)	17 (16)			33 (32)			24 (22)			50 (44)			39 (33)		

【資料 4-9】学生の論文掲載数

	2020 (R2)			2021 (R3)			2022 (R4)			2023 (R5)			2024 (R6)		
	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士	学部生	修士	博士
論文数 [筆頭著者]	2 [2]	26 [10]	58 [43]	1 [0]	25 [12]	71 [49]	1 [0]	23 [13]	60 [43]	4 [2]	14 [7]	73 [52]	0 [0]	19 [11]	78 [60]
総計	86 [55]			97 [61]			84 [56]			91 [61]			97 [71]		

・注 [] 内の数字は筆頭著者を示し内数

【資料 4-10】 学生・修了生が獲得した助成金等

		2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	
日本学術振興会 特別研究員	DC1	6	5	5	3	6	
	DC2	0	8	8	10	13	
	PD		9	3	2	7	
	RPD		1	1	1	1	
学内の支援制度		0	53	66	80	65	
学外の助成		8	25	23	18	24	
計		14	101	106	114	116	
学内の支援制度	京都大学教育研究振興財団	C. 在外研究助成			1 (D3)	1 (D3)	
		D. 国際研究会発表助成			3 (D1*1 D3*2)	3 (D1*2 D2*1)	
	京都大学大学院 教育支援機構プログラム	博士後期課程学生対象経済支援制度 機構 SPRING プログラム		49	58	65	51
		(人文・社会)			40 (内数)	54 (内数)	36 (内数)
		(健康・医療・生命)			3 (内数)	1 (内数)	5 (内数)
		(環境・エネルギー複合)			12 (内数)	9 (内数)	4 (内数)
		(マテリアル)			0 (内数)	0 (内数)	2 (内数)
		(情報・AI)			0 (内数)	0 (内数)	3 (内数)
		(量子)			3 (内数)	1 (内数)	1 (内数)
		(DoGS) 海外渡航助成金			4 (修士2, 博士2)	4 (修士3, 博士1)	3 (修士3)
	京都大学アジア 研究教育ユニット	多言語現地研修 派遣プログラム		4 (学部生1, 大学院生3)	4 (学部生4)	7 (学部生6, 大学院生1)	7 (学部生5, 大学院生2)
	フルプライド奨学金	大学院博士論文研究プログラム					1 (D3)
	ベルギー政府奨学金						1 (D1)
	味の素食の文化センター	食の文化研究助成			1 (D3)	2 (D3*2)	2 (M1,D3)
	上廣倫理財団	研究者公募助成		3 (D3*2/人文 連携研究者)	4 (D3*4)	1 (D3)	2 (D3*2)
	ウシオ財団	外国人留学生奨学生		1 (D1)			
	小笠原敏晶記念財団	文化・芸術分野 調査・研究助成			1 (D1)		
	鹿島美術財団	美術に関する国際交流援助 (海外派遣)			1 (D3)		
	加藤朝雄国際奨学財団	奨学生 奨学生		1 (D3)			
	サントリー文化財団	若手研究者のためのチャレンジ助成研究			1 (D1)		
滋澤民族学振興基金	大学院生等に対する研究活動助成	2 (D1,D3)	4 (D1,D2, D3*2)		4 (M2*1/ D3*3)	2 (D1,D2)	
住友住団	アジア諸国における日本関連研究助成	1 (D1)					
SOMPO 環境財団	学術研究助成	1 (D3)					
高梨学術奨励基金	若手研究助成		1 (D1)				
武田科学振興財団	杏雨書屋研究助成			1 (D3)			
日本科学協会	笹川科学研究助成	2 (D2,D3)	1 (D3)	1 (M2)	2 (M2,D3)	4 (D1*1/ D3*3)	
日本学術振興会	科学研究費助成事業・基盤研究 (C)			1 (D3)			
	若手研究者海外挑戦プログラム		4 (M2,D1, D3*2)	5 (D1/D3*4)	2 (D3)	4 (D2*2/ D3*2)	
日本学生支援機構	海外留学支援制度 (大学院学位取得型)			1 (D2)			
	特に優れた業績による返還免除 (大学院第一種奨学金)					1 (D1)	
非営利・協同総合研究所のちとくらし 奨励研究				1 (M2)	1 (D1)	1 (D2)	
松下幸之助記念財団	研究助成		3 (D1/D3*2)			2 (D3/ 修了生)	
	松下幸之助国際スカラシップ			1 (D3)	2 (M2,D1)		
三島海雲記念財団	学術研究奨励金		2 (D3*2)	1 (D3)	1 (D3)	1 (D3)	
みずほ国際交流奨学財団	奨学生				1 (D2)		
室戸ユネスコ世界ジオパーク	学術研究助成				1 (M2)		
りそなアジア・オセアニア財団	アジア・オセアニア研究助成	1 (M2)	1 (D3)			1 (D3)	
株式会社リバネス	リバネス研究費 in・cube 賞			1 (M2)			
大阪公立大学都市科学・防災研究センター	先端都市特別研究員 (若手) 研究費					1 (D1)	
北九州市立大学	特別研究推進費				1 (D3)		
京都大学フィールド科学教育研究センター	芦生研究林公募研究		1 (M2)	1 (M1)			
一般財団法人上野千鶴子基金	助成金事業					1 (団体 D3, 修了生)	
一般財団法人京信欄田喜三記念育英会			1 (D1)				
一般財団法人 財団せせらぎ 助成金		1 (D3)					
公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金			1 (M2)				
公益財団法人 自然保護助成基金	プロ・ナトゥーラ・ファンド助成		1 (D1)				
岡山芸術交流 2022 パブリックプログラム公募事業				1 (D3)			
学外の助成 計		8	25	23	18	24	

【資料 4-11】若手研究者出版助成による刊行物

出版数

年度	2010 (H22)	2011 (H23)	2012 (H24)	2013 (H25)	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	合計
出版数	8	11	12	9	13	19	17	11	10	6	10	8	8	8	6	156

授賞者（令和2～6年度）

受賞時期	受賞者	受賞名称	受賞作品	出版年度
1 2012年11月	内藤真帆	第30回(平成24年度)新村出研究奨励賞	内藤真帆 2011『ソツバノ語 記述言語学的研究』京都大学学術出版会	2010(H22)
2 2012年3月	鯖江秀樹	第3回表象文化論学会賞奨励賞	鯖江秀樹 2011『イタリア・ファシズムの芸術政治』水声社	2010(H22)
3 2013年9月	石岡学	第5回日本教育社会学会奨励賞(著者の部)	石岡学 2011『「教育」としての職業指導の成立—戦前日本の学校と移行問題』勁草書房	2010(H22)
4 2013年9月	岡本源太	新プラトン主義協会賞	岡本源太 2012『ジョルダノ・ブルーノの哲学—生の多様性へ』月曜社	2011(H23)
5 2012年9月	有元志保	2012年度日本カレドニア学会学術奨励賞	有元志保 2012『男と女を生きた作家—ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯』国書刊行会	2011(H23)
6 2013年11月	山本達也	第3回(2013年度)地域研究コンソーシアム賞(登竜賞)	山本達也 2013『舞台の上の難民—チベット難民芸能集団の民族誌』法蔵館	2012(H24)
7 2013年6月	恒木健太郎	第10回日本社会史学会奨励賞	恒木健太郎 2013『「思想」としての大塚史学—戦後啓蒙と日本現代史』新泉社	2012(H24)
8 2013年4月	杉山博昭	第5回表象文化論学会奨励賞	杉山博昭 2013『ルネサンスの聖史劇』中央公論新社	2012(H24)
9 2013年9月	佐々木ボグナ	第23回宮沢賢治賞奨励賞	佐々木ボグナ 2013『宮沢賢治 現実の遠近法』京都大学学術出版会	2012(H24)
10 2014年11月	梶丸岳	第31回(2013年度)田邊尚雄賞(一般社団法人東洋音楽学会)	梶丸岳 2013『山歌の民族誌—歌で詞藻を交わす』京都大学学術出版会	2012(H24)
11 2016年3月	渡辺文	第14回(2014年度)日本オセアニア学会賞	渡辺文 2014『オセアニア芸術—レッド・ウエーヴの個と集合』京都大学学術出版会	2013(H25)
12 2015年3月	山本友紀	公益財団法人花王芸術・科学財団 第9回「美術に関する研究奨励賞」	山本友紀 2014『フェルナン・レジェ オブジェと色彩のユートピア—キュビズムからフランス人民戦線まで』春風社	2013(H25)
13 2016年1月	土田陽子	第10回女性史学賞	土田陽子 2014『公立高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造—学校・生徒・メディアのダイナミズム』ミネルヴァ書房	2013(H25)
14 2016年8月	劉 轟	中日対照言語学会 2016年度優秀中青年学術賞・優秀著作賞(第3回中青年漢日対比言語学優秀成果賞・著作賞)	劉 轟 2015『談話空間における文脈指示』京都大学学術出版会	2014(H26)
15 2016年4月	田口かおり	第7回表象文化論学会賞	田口かおり 2015『保存修復の技法と思想—古代芸術・ルネサンス絵画から現代アートまで』平凡社	2014(H26)
16 2016年6月	小門 穂	第33回(2016年度)渋沢・クローデル賞特別賞	小門 穂 2015『フランスの生命倫理法—生殖医療の用いられ方』ナカニシヤ出版	2014(H26)
17 2016年9月	許之威	台北市役所職員著書奨励賞	許之威 2016『移民政策の形成と言語教育—日本と台湾の事例から考える』明石書店	2015(H27)
18 2017年10月	伏見裕子	第37回日本民俗学会研究奨励賞	伏見裕子 2016『近代日本における出産と産屋—香川県伊吹島の出部屋の存続と閉鎖』勁草書房	2015(H27)
19 2017年12月	辻 浩和	第12回女性史学賞	辻 浩和 2017『中世の〈遊女〉—生業と身分』京都大学学術出版会	2016(H28)
20 2018年5月		第35回(平成29年度)日本歌謡学会志田延義賞		
21 2019年11月	阿部美香	第19回人文地理学会学会賞(学術図書部門奨励賞)	阿部美香 2018『歌川広重の声を聴く—風景への眼差しと願い』京都大学学術出版会	2017(H29)
22 2019年7月	佐藤真理恵	第10回表象文化論学会賞奨励賞	佐藤真理恵 2018『仮象のオリュンポス—古代ギリシアにおけるプロソポンの概念とイメージ変奏』月曜社	2017(H29)
23 2020年9月	佐野泰之	第5回メルロ＝ポンティ研究賞(日本メルロ＝ポンティサークル)	佐野泰之 2019『身体黒魔術、言語白魔術—メルロ＝ポンティにおける言語と実存』ナカニシヤ出版	2018(H30)
24 2020年1月	田中垂以子	第34回女性史青山なを賞	田中垂以子 2019『男たち/女たちの恋愛—近代日本の「自己」とジェンダー』勁草書房	2018(H30)
25 2021年10月	金 瑛	2021年度日仏社会学会奨励賞(著者の部)	金 瑛 2020『記憶の社会学とアルヴァックス』晃洋書房	2019(R1)
26 2024年6月	開 信介	第19回全国大学国語国文学会賞	開 信介 2023『久生十蘭作品研究—〈霧〉と〈二重性〉』和泉書院	2022(R4)
27 2024年10月		2024年度現代韓国朝鮮学会賞(小此木賞)		
28 2024年12月	郭 曼錫(講師)	2024年度比較文明学会研究奨励賞(伊東俊太郎賞)	郭曼錫 2024『自己否定する主体—1930年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』京都大学学術出版会	2023(R5)
29 2024年12月		2024年度田辺元賞(田辺元記念哲学会 求真会)		
30 2024年8月	安藤加菜子	第14回自治体学会賞 研究論文賞	安藤加菜子 2024『在宅育児手当の意義とあり方—自治体による新たな現金給付とその可能性』ミネルヴァ書房	2023(R5)

【資料 4-12】 学生・修了生の受賞状況

	2020 (R2)		2021 (R3)		2022 (R4)		2023 (R5)		2024 (R6)		合計 (R2～R6)		
	国内	国際	国内	国際	計								
1 学会賞・奨励賞・最優秀賞・優秀賞	7	1	8		8	2	11		7		41	3	44
2 講演・発表・presentation award	3		4		1		4		8	1	20	1	21
3 論文賞	1		1	1	6	1	3		4		15	2	17
4 ポスター賞	8		8	1	2	1	2		5	2	25	4	29
5 学芸賞・財団・大学・自治体等からの受賞	1		1								2	0	2
6 その他の賞・栄誉			1		1	1					2	1	3
小計	20	1	23	2	18	5	20	0	24	3	105	11	116
合計	21		25		23		20		27		116		

* 卒業・修了後5年以内の者を含む

1 【学会賞・奨励賞・最優秀賞・優秀賞】

2020(R2) ○第11回表象文化論学会賞奨励賞、○萬葉学会奨励賞、○第6回メルロ＝ポンティ研究賞、○2020年日本シェイクスピア協会奨励賞、○関西社会学会第71回大会奨励賞、○2020年度関西電気化学研究会奨励賞、○第11回(令和2(2020)年度)日本学術振興会育志賞、○11th Automated Negotiating Agents Competition(ANAC2020/オンライン開催)のThe 2nd International Werewolf AI Competition プロトコル部門において第3位入賞

2021(R3) ○2021年度日本シェイクスピア協会奨励賞、○第61回ドイツ語学文学振興会奨励賞、○2021年度日本ベントス学会奨励賞、○日本認知言語学会奨励賞、○2021年度日仏社会学会奨励賞(著書の部)、○2021年度第3回関西電気化学研究会関西電気化学奨励賞(3名)

2022(R4) ○日本応用心理学会2021年度若手会員研究奨励賞、○第62回ドイツ語学文学振興会奨励賞、○第17回日本文化人類学会奨励賞、○IPHS Prizes and Awards 2022 East Asian Planning History Prize(国際都市計画史学会2022年東アジア都市計画史賞)、○フラーレン・ナノチューブ・グラフェン学会第63回FNTG総合シンポジウム若手奨励賞、○情報処理学会ゲーム情報研究会第48回研究会(2022年度)若手奨励賞、○近畿化学協会触媒・表面部会OKCAT2022(Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis) Outstanding Research Award(優秀研究賞)、○2022年度第3回関西電気化学研究会 Webinar 関西電気化学奨励賞、○日本植物分類学会奨励賞、○日本セラミックス協会技術奨励賞

2023(R5) ○2023年日本建築学会奨励賞、○関西社会学会第74回大会奨励賞(2名)、○2023年度自治体学研究奨励賞、○一般社団法人日本音楽療法学会第3回日野原賞(活動部門)、○令和5年日仏哲学会若手研究者奨励賞、○京都大学サマーデザインスクール2023優秀賞第3位、○日本統計学会スポーツデータサイエンス分科会2023年度スポーツデータサイエンスコンペティション・サッカー部門優秀賞、○日本古生物学会2023年度研究奨励賞、○京都滋賀体育学会第153回大会最優秀奨励賞(2名)

2024(R6) ○第64回ドイツ語学文学振興会奨励賞、○第18回立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞、○第十九回全国大学国語国文学会賞、○日本地球化学会第71回年会学生会奨励賞、○第25回日本認知言語学会奨励賞、○日本バイオメカニクス学会第30回大会奨励賞、○社会言語科学会第24回徳川宗賢賞優秀賞、○2024年度建設コンサルタンツ協会懸賞論文(学生論文)特別賞、○一般財団法人日本刑事政策研究会刑事政策に関する懸賞論文佳作

2 【講演・発表・presentation award】

2020(R2) ○日本化学会第101春季年会優秀講演賞(産業)、○日本化学会第101回春季年会学生講演賞(2名)

2021(R3) ○日本セラミックス協会第34回秋季シンポジウム「複合イオン化合物の創製とキャラクター化」セッション優秀発表者、○電気化学会第89回大会固体化学セッション学生発表賞、○電気化学会第89回大会優秀学生講演賞、○電気化学会第89回大会燃料電池セッション学生発表賞第1位

2022(R4) ○森林遺伝育種学会第11回大会学生会発表最優秀賞

2023(R5) ○人間・環境学会(MERA)第30回大会大会発表賞、○森林遺伝育種学会第12回学生会発表最優秀賞、○OKCAT(Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis)2023 Outstanding Research Award、○日本藻類学会第48回大会学生会発表賞(ポスター・大型藻類)

2024(R6) ○日本建築学会近畿支部2024年度研究発表会優秀発表賞、○日本国際政治学会第23回アジア太平洋研究賞・佳作賞、○産業・組織心理学会2024年優秀学会発表賞、○日本物理学会第79回年次大会領域5学生優秀発表賞、○日本スポーツ心理学会第51回大会最優秀発表賞、○OKCAT2024(Osaka-Kansai International Symposium on Catalysis) Outstanding Research Award、○日本心理学会第88回学術大会優秀発表賞、○日本植物分類学会第24回大会口頭発表賞、○日本語用論学会第27回大会大会発表賞

3 【論文賞】

2020(R2) ○第11回日本考古学協会賞優秀論文賞

2021(R3) ○Royal Society of Chemistry(王立化学会)Dalton Transactions HOT Articlesに選出、○日本化学会「Bulletin of the Chemical Society of Japan (Vol.94 No.9)」優秀論文に選出

2022(R4) ○国際比較文化心理学会博士論文賞(Harry and Pola Triandis Doctoral Thesis Award)、○日本言語政策学会2021年度学会賞優秀論文賞、○日本家族社会学会賞第9回奨励論文賞、○日本刑事政策研究会・読売新聞社「刑事政策に関する懸賞」論文佳作、○第17回漢検漢字文化研究奨励賞佳作、○公益財団法人昭和池田記念財団第42回(令和4年度)昭和池田賞特別努力賞、○令和4年度一般財団法人日本刑事政策研究会懸賞論文佳作

2023(R5) ○日本英語教育学会2023年度著作賞、○政策情報学会令和5年度学会誌賞、○社会福祉法人鉄道身障者福祉協会2023年度「鉄道150年記念障害福祉賞」第1位

2024(R6) ○自治体学会2024年度研究論文賞、○異文化間教育学会論文賞、○第17回石橋湛山新人賞【本賞】

4 【ポスター・口頭発表】

2020(R2) ○第39回固体・表面光化学討論会優秀発表賞、○第39回光がわかる触媒化学シンポジウム優秀ポスター賞、○第10回CSJ化学フェスタ2020優秀ポスター発表賞(2名)、○第30回キャラクター化セッション講習会優秀ポスター賞、○日本植物分類学会第20回大会口頭発表賞(2名)、○第68回日本生態学会大会最優秀ポスター賞

2021(R3) ○第12回触媒化学研究発表会優秀ポスター賞、○第18回触媒化学ワークショップ優秀ポスター賞、○第10回JACI/GSCシンポジウムGSCポスター賞、○第40回光がわかる触媒化学シンポジウム優秀ポスター賞、○第34回秋季シンポジウム「フォトセラミックス～光と色に関わるセラミックスの合成・機能・応用～」セッション優秀発表賞、○第18回日韓触媒シンポジウム Young Oral Presentation Award、○第21回日本植物分類学会大会発表賞ポスター発表賞(2名)、○日本藻類学会第46回大会学生会発表賞(ポスター・大型藻類)

2022(R4) ○第40回光がわかる触媒化学シンポジウム優秀ポスター賞、○第68回有機金属化学討論会ポスター賞、○アメリカ電気学会第242回ECS集会燃料電池セッション学生会発表賞第3位(The Electrochemical Society *242nd ECS Meeting/燃料電池セッション(PEFC&E22) Student Poster Awards, Third place)

2023(R5) ○第72回高分子学会年次大会優秀ポスター賞、○日本藻類学会第48回大会学生会発表賞(ポスター・大型藻類)

2024(R6) ○ChemOnTubes 2024 Oral Award、○2nd Asia-Oceania International Congress on Photosynthesis Best Poster Presentation Award、○The Electrochemical Society PRIME 2024(電気化学会 秋季大会一般学生ポスターセッション最優秀賞)、○日本発達神経科学会第13回学術集会ポスター賞、○情報処理学会ゲーム情報研究会2024年ゲームプログラミングワークショップベストポスター賞、○電気化学会関西支部2024年度関西電気化学奨励賞(ポスター奨励賞)(2名)

5 【学芸賞・財団・大学・自治体等からの受賞】

2020(R2) ○第40回「地方の時代」映像祭市民・学生・自治体部門優秀賞

2021(R3) ○令和3年度埼玉県野吟子賞奨励賞

6 【その他の賞・栄誉】

2021(R3) ○第6回池袋みらい国際映画祭(東京)特別審査員賞

2022(R4) ○CineYouth Festival(アメリカ)ドキュメンタリー映画賞、○野毛坂グローバルSDGs第3回SDGsの基本理念「誰一人取り残さない」小論文コンテスト入賞(コミュニティサービスを行う団体)

【資料 4-13】 学生相談室の利用件数

・相談件数

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
総合人間学部	49	64	72	72	60
大学院人間・環境学研究科	50	43	48	60	53
合計	99	107	120	132	113

主訴の内訳 (学部生)

内容	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
学習・学業に関する相談	29	22	22	22	28
進路に関する相談	8	11	9	13	7
人間関係・個人の悩みに関する相談	9	29	39	37	25
その他	3	2	2	0	0
計	49	64	72	72	60

主訴の内訳 (大学院生)

内容	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
学習・学業に関する相談	17	13	16	19	22
進路に関する相談	2	5	3	3	4
人間関係・個人の悩みに関する相談	21	23	27	37	25
その他	10	2	2	1	2
計	50	43	48	60	53

【資料 4-14】 京都大学学際融合教育研究推進センターにおける参画ユニット

京都大学学際融合教育研究推進センター研究者が専門を越えて研鑽できる学問本来の土壌作りを目的とし、学際的・教育につながる連携・融合活動を企画・実施する組織

令和 6 年度

(2025 年 4 月 1 日現在)

	ユニット名	参加メンバー
1	[工学×文学×環境学] 文化財保存のための環境制御に関する実践研究ユニット	脇谷 草一郎 (人間・環境学研究科 准教授)
2	[工学×防災×文学×社会科学] 「官」と「民」の関係がバナンス実践研究ユニット	柴山 桂太 (人間・環境学研究科 准教授)
3	[薬学×化学×理学] 重水素学研究拠点ユニット	藤田 健一 (人間・環境学研究科 教授)
4	[社会科学×生態学×経済学×理学] 政策のための科学ユニット	佐野 亘 (人間・環境学研究科 教授)
5	[心理学×教育学×医学×情報学×霊長類学] こころの科学ユニット	(ユニット長) 月浦 崇 (人間・環境学研究科 教授)
6	[工学×化学×農学] ナノテクノロジーハブ拠点ユニット	内本 喜晴 (人間・環境学研究科 教授)

令和 5 年度

(2023 年 4 月 1 日現在)

	ユニット名	参加メンバー
1	重水素学研究拠点ユニット	藤田 健一 (人間・環境学研究科 教授)
2	ナノテクノロジーハブ拠点ユニット	内本 喜晴 (人間・環境学研究科 教授)
3	こころの科学ユニット	(ユニット長) 月浦 崇 (人間・環境学研究科 教授) 小村 豊 (人間・環境学研究科 教授) 齋木 潤 (人間・環境学研究科 教授) 永田 素彦 (人間・環境学研究科 教授) 船曳 康子 (人間・環境学研究科 教授) 松本 卓也 (人間・環境学研究科 准教授) タジャン・ニコラ・ピエール (人間・環境学研究科 特定准教授) 山本 洋紀 (人間・環境学研究科 助教) 朴 白順 (人間・環境学研究科 特定助教)
4	レジリエンス実践ユニット	柴山 桂太 (人間・環境学研究科 准教授)
5	超高齢社会デザイン価値創造ユニット	前田 昌弘 (人間・環境学研究科 准教授)
6	社会科学統合研究教育ユニット	佐野 亘 (人間・環境学研究科 教授)
7	熱帯林保全と社会的持続性研究推進ユニット	市岡 孝朗 (人間・環境学研究科 教授)
8	政策のための科学ユニット	(副ユニット長) 佐野 亘 (人間・環境学研究科 教授)
9	触媒・電池元素戦略研究拠点ユニット触媒グループ	吉田 寿雄 (人間・環境学研究科 教授) 山本 旭 (人間・環境学研究科 助教)
10	宇宙総合学研究ユニット	萩生 翔大 (人間・環境学研究科 准教授) 藤井 悠里 (人間・環境学研究科 助教)

【資料 4-15】教員の受賞 (2020 (令和 2) ~ 2024 (令和 6) 年度)

年度	氏名・職位 (受賞時)	賞の名前・表彰主催団体名	受賞対象	受賞年・月
2020(R2)	1 山本 旭 (助教) ほかによる共著論文	2020 PCCP Hot Articles(Physical Chemistry Chemical Physics) 王立化学会(イギリス)の論文誌 Physical Chemistry Chemical Physics 2020 年 PCCP HOT Articles に選出	Structural characterization of molybdenum-dinitrogen complex as key species toward ammonia formation by dispersive XAFS spectroscopy, Akira Yamamoto, Kazuya Arashiba, Shimpei Naniwa, Kazuo Kato, Hiromasa Tanaka, Kazunari Yoshizawa, Yoshiaki Nishibayashi, Hisao Yoshida, Chem. Chem. Phys., 22, 22, pp12368-12372, 2020 (2020 PCCP HotArticles). DOI: 10.1039/C9CP06761B	2020年6月
	2 藤田健一 (教授)	2020 年度エスベック環境研究奨励賞	イリジウム錯体を活用する水素と有用有機化合物とを同時生産する触媒系の開発	2020年8月
	3 上田純平 (助教)	日本セラミックス協会 21 世紀記念 倉田元治賞	セラミックス誌 56 巻 (2021 年)4 月号 https://www.ceramic.or.jp/wp-content/uploads/2023/11/56_4_209.pdf	2020年11月
	4 藤田健一 (教授)	田中貴金属記念財団 2020 年度 奨励賞	貴金属に関する研究	2021年3月
2021(R3)	1 上田純平 (助教)	日本希土類学会令和 3 年度 奨励賞 (足立賞)	希土類イオン添加無機化合物の固体電子構造に立脚した光機能性材料開発	2021年5月
	2 田部勢津久 (教授)	The American Ceramic Society アメリカンセラミックソサエティフェローに選出	学会運営活動、ガラス・セラミックス光学材料分野における研究貢献	2021年6月
	3 徳永 悠 (准教授)	The Pacific Coast Branch of the American Historical Association Louis Knott Koontz Memorial Award アメリカ歴史学会太平洋支部 年間最優秀論文賞	Japanese Farmers, Mexican Workers, and the Making of Transpacific Borderlands. Pacific Historical Review 89, no.2 (Spring, 2020): 165-197.	2021年8月
	4 徳永 悠 (准教授)	アメリカ歴史学会太平洋支部若手優秀論文賞 W. Turrentine Jackson (Article) Prize	Japanese Farmers, Mexican Workers, and the Making of Transpacific Borderlands. Pacific Historical Review 89, no.2 (Spring, 2020): 165-197.	2021年8月
	5 江川達郎 (助教)	日本宇宙航空環境医学会 2021 年度研究奨励賞	Involvement of receptor for advanced glycation end products in microgravity-induced skeletal muscle atrophy in mice. Acta Astronautica Vol.176, November 2020, 332-340.(微小重力環境下の筋萎縮進行における終末糖化産物受容体の関与) 国際宇宙航空アカデミー 2020 年掲載	2021年11月
	6 山本健太郎 (特定准教授)	2022 年度電気化学会進歩賞 (佐野賞)	放射光 X 線を用いた高度解析による電子論的設計指針に基づく電極材料の創生	2021年12月
2022(R4)	1 タジャン, ニコラ (特定准教授)	CIPPA (自閉症に関わる精神分析家・心理療法家と準会員の国際組織)(精神分析家、個人臨床論文部門) 第 1 回ジュヌヴィエーヴ・ハグ賞	2 歳から 6 歳までの自閉症児の精神的・総合的治療に関する研究において、自閉症の評価(自閉症における変化の精神的動的評価尺度)、予防、治療における進歩に貢献	2022年5月
	2 堀口大樹 (准教授)	ダツェ・トレイヤ=マシー駐日ラトビア共和国大使より感謝状	ラトビアと日本の関係促進に対する多大な貢献を評価	2022年6月
	3 桂山康司 (教授)	第 34 回国際ホプキンス学会「ジェラード・マンリー・ホプキンス賞」(The Gerard Manley Hopkins Award 2022)	イギリス詩人ジェラード・マンリー・ホプキンス(1844-89)に関する優れた研究報告「脚韻の技法とホプキンス」や、日本文化の紹介などを通じて学会の発展に貢献	2022年7月
	4 上田祥行 中山真孝 阿部修士 内田由紀子 齋木潤(教授)	2022 年 日本心理学会第 86 回大会特別優秀発表賞	「こころ」の概念に関する多国籍調査「こころワールドマップ」の作成に向けて	2022年9月
2023(R5)	1 徳永 悠 (准教授)	アメリカ学会 清水博賞 (Japanese Association for American Studies)	Transborder Los Angeles: An Unknown Transpacific History of Japanese-Mexican Relations(University of California Press, 2022)	授賞式 2023年6月
	2 立木秀樹 (教授)	京都大学「国民と科学・技術対話」ワーキンググループ 京都大学アカデミックディ 2023 「京都大学アカデミックディ大賞」	「フラクタル・イマージャーキューブの影」 出展	2023年11月
	3 吉田寿雄 (教授)	The Royal Society of Chemistry 英国王立化学会フェローに選出	化学分野の学術論文出版への貢献による称号授与	2023年12月
	4 山本 旭 (助教)	触媒学会 2023 年度 奨励賞	「光を利用したメタン転換触媒系の開発」	2024年1月
2024(R6)	1 山本 旭 (助教)	化学情報協会 JAICI (ジャイシ) 賞	「光を利用したメタン転換触媒系の開発」	2024年4月
	2 田部勢津久 (教授)	Otto Schott Research Award	「レーザガラス光学材料研究と教育への貢献」	2024年6月
	3 前田昌弘 (准教授)	日本建築学会 Japan Architectural Review Best Paper Award 202	Acceptance and transformation of the housing ladder in slum resettlement projects in Colombo, Sri Lanka	2024年8月
	4 石村豊穂 (教授)	クリタ水・環境科学振興財団 2024 年度クリタ水・環境科学研究優秀賞	「生物炭酸塩の超高感度安定同位体分析による新たな水域生態環境指標の開拓」	2024年8月
	5 田部勢津久 (教授)	国際ガラス技術協会フェロー	ガラス技術への長年の貢献	2024年10月
	6 郭受錫 (講師)	現代韓国朝鮮学会 2024 年度現代韓国朝鮮学会賞 (小此木賞)	ブリミエ・コレクション 132『自己否定する主体一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』(京都大学学術出版会 2024 年 3 月) (令和 5 年度「人と社会の未来研究院若手出版助成」を受け出版)	2024年10月
	7 許健 (助教)	日本セラミックス協会第 79 回日本セラミックス協会進歩賞	「真空準位基準束縛エネルギー図に基づいた新規長残光蛍光体の開発」	2024年11月
	8 郭受錫 (講師)	田辺元記念哲学会 求真会 2024 年度 田辺元賞	『自己否定する主体一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』(京都大学学術出版会 2024 年 3 月)	2024年12月
	9 郭受錫 (講師)	2024 年度比較文明学会研究奨励賞 (伊東俊太郎賞)	『自己否定する主体一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』(京都大学学術出版会 2024 年 3 月)	2024年12月
	10 吉田寿雄 (教授)	触媒学会 2024 年度触媒学会賞 (学術部門)	「光触媒を用いた物質変換反応の開拓」	2025年1月
	11 阪口翔太 助教	日本生態学会第 29 回日本生態学会宮地賞	「植物種分化における生殖隔離の研究」	2025年3月
	12 前田昌弘 准教授	一般財団法人住総研第 23 回研究・実践選奨	『歴史的街並みが残る過疎地域の「住み継ぎ」に向けた環境像の共有：岡山県瀬戸内市牛窓地区における実践を通じて』	2025年3月



國際交流

5. 国際交流

【資料 5-1】 出身地域別留学生受入数 (人間・環境学研究科)

(2024(R6)年5月1日現在)

地域	国または地域名	修士課程	博士後期課程	非正規生	計
アジア					
	インド		1		1
	インドネシア共和国		2	2	4
	タイ		1	1	2
	大韓民国	3	6	1	10
	台湾	1	4	1	6
	中華人民共和国	77	66	15	158
	パキスタン		1		1
	ベトナム社会主義共和国		1		1
	香港		1		1
北米					
	アメリカ合衆国	2	1	1	4
中南米					
	チリ		2		2
	ペルー共和国		1		1
欧州 (NIS 諸国含む)					
	ウクライナ			1	1
	ギリシャ共和国		1		1
	セルビア共和国			1	1
	ドイツ連邦共和国	1	1		2
	ベラルーシ共和国			1	1
	ポルトガル共和国		1		1
	ロシア連邦		1	1	2
大洋州					
	オーストラリア連邦			1	1
中東					
	イラン・イスラム共和国	1			1
アフリカ					
	エジプト・アラブ共和国		1		1
	合計	85	92	26	203

- ・在留資格が「留学」の学生のみを集計
- ・非正規生の内訳は、研究生 (22 名)、特別研究学生 (4 名)

【資料 5-2】 外国人研究者等の受入状況

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	計
外国人研究員 (客員教授・客員准教授)	1	2	5	3	5	16
招へい外国人学者	1	0	5	13	12	31
外国人共同研究者	1	3	2	7	4	17
計	3	5	12	23	21	64

【資料 5-3】 招へい外国人学者による国際交流セミナー開催状況

年度	2020(R2)	2021(R3)	2022(R4)	2023(R5)	2024(R6)	計
開催件数	0	2	5	3	6	16

年度	回数	講演者・所属・タイトル	受入れ期間受入教員
2021(R3)	第 77 回 2021 年 4 月 22 日	Prof. Wei Wang (西安交通大学准教授) "Brief introduction to the traditional customs in Xi'an" 「西安の歴史的慣習の紹介」	2019 年 12 月 15 日 - 2020 年 5 月 14 日 (小松直樹)
	第 78 回 2022 年 1 月 20 日	Prof. Md. Mahbubor Rahman (Rajshahi University (Bangladesh) 教授) Iron Oxide Based Magnetic Nanoparticles: Synthesis, Characterization and Biomedical Applications 「酸化鉄系磁性ナノ粒子の合成、キャラクタリゼーションと生物医療応用」	2021 年 9 月 1 日 - 2022 年 2 月 28 日 (小松直樹)
2022(R4)	第 79 回 2022 年 5 月 25 日	Prof. Marco Giovanni BETTINELLI (イタリア/Verona 大学教授、王立化学協会フェロー) LIFE AND IDEAS OF GALILEO GALILEI「ガリレオ・ガリレイの生涯と思想」	2022 年 4 月 1 日 - 2022 年 6 月 30 日 (田部勢津久)
	第 80 回 2022 年 6 月 30 日	Prof. Jean-Marc Leveque (University of Savoie, Mont-blanc, FRANCE) DISCOVERY OF SONOCHEMISTRY「音響化学って何？」	2022 年 4 月 1 日 - 2023 年 8 月 31 日 (小松直樹)
	第 81 回 2022 年 7 月 8 日	Mr. Irfan AKTAN (トルコ/ジャーナリスト) WHO are the KURDS?「クルドとは何者か？」	2022 年 4 月 16 日 - 2023 年 8 月 15 日 (岡 真理)
	第 82 回 2022 年 7 月 19 日	Dr. Haitham Mahmoud Sharqawy (エジプト/ジャーナル・アル・ワーディ大学専任講師) Stories of Travel in Arabic & Hebrew Literatures in the Middle Age 「旅と語り：中世アラビア語およびヘブライ文学を中心に」	2022 年 4 月 16 日 - 2023 年 9 月 30 日 (勝又直也)
	第 83 回 2022 年 11 月 30 日	Prof. Ali Volkan ERDEMIR (トルコ/エルジェス大学教授) 「トルコと村上春樹」	2022 年 10 月 1 日 - 2023 年 3 月 31 日 (小島基洋)
2023(R5)	第 84 回 2023 年 10 月 26 日	Dr. Mahzarin R. BANAJI (米国/ Harvard 大学教授) Blindspot: Hidden biases of good people 「ブラインドスポット：善き人々の隠れたバイアス」	2023 年 9 月 1 日 - 2023 年 12 月 1 日 (齋木 潤)
	第 85 回 2023 年 12 月 8 日	Prof. Li ZHAO (中国/蘇州大学准教授) Beautiful Suzhou: A harmonious blend of classics and modernity 「美しい蘇州：古代と現代が調和した都市」	2023 年 10 月 7 日 - 2024 年 2 月 6 日 (小松直樹)
	第 86 回 2024 年 3 月 19 日	Dr. Alejandro LÓPEZ-MORENO (スペイン/ IMDEA Nanociencia) Unveiling the Spanish Culture and Traditions「スペイン文化と伝統の秘密を明かす」	2024 年 1 月 16 日 - 2024 年 5 月 31 日 (小松直樹)
2024(R6)	第 87 回 2024 年 4 月 4 日	Prof. Angela B. SEDDON (Nottingham 大学教授、王立化学協会 (RSC), 国際光技術学会 (SPIE) フェロー) "The Beautiful Game"「ビューティフルゲーム」	(田部勢津久)
	第 88 回 2024 年 5 月 24 日	Dr. rer. nat. Christine Kaiser (米国/ Museum Koenig, Bonn Germany・客員研究員) Serpent Sentinels: Conservation and Coexistence with Venomous Snakes	2024 年 4 月 1 日 - 2024 年 9 月 30 日 (西川完途)
	第 89 回 2024 年 7 月 26 日	Prof. Lan Shi-chi (台湾国立政治大学) Study-abroad and Taiwan as a Silicon Island: a Focus on TSMC 「留学と「シリコン・アイランド」台湾：TSMC に焦点を当てて」	2024 年 6 月 1 日 - 2024 年 9 月 30 日 (森口由香)
	第 90 回 2024 年 11 月 15 日	Prof. Andries Meijerink (オランダ/ Utrecht 大学教授、オランダ大学院 フェロー) Rare Earths for a Sustainable Earth	2024 年 10 月 1 日 - 2025 年 1 月 31 日 (田部勢津久)
	第 91 回 2025 年 2 月 28 日	Dr. David A. Beamer (Research Facility Manager, East Carolina University, North Carolina USA) "Evolutionary History and Systematics of North American Salamanders"	2024 年 10 月 1 日 - 2025 年 3 月 31 日 (西川完途)
	第 92 回 2025 年 3 月 7 日	Dr. Alberto Bianco (CNRS (France), Fellow of the European Academy of Sciences) Exploring the Biomedical Applications of Carbon Nanomaterials 「炭素ナノ材料の生物医療応用」	2025 年 2 月 1 日 - 2025 年 4 月 30 日 (小松直樹)

【資料 5-4】 海外渡航研究者

	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
短期	256	0	8	77	155	204
中期	16	1	8	12	11	12
長期	0	0	1	3	1	1
合計	272	1	17	92	167	217

【資料 5-5】 部局間学術交流協定締結先一覧

人間・環境学研究科

国・地域名	大学・機関名	締結年
フランス共和国	フランス人間科学研究財団	2011
インドネシア	サナタ・ダルマ大学心理学部	
マレーシア	サラワク大学	2017
カザフスタン共和国	カザフスタン生物多様性保全協会	2017
台湾	国立台湾大学 文学院・社会科学院	2015 (2018 更新)
中華人民共和国	浙江自然博物館	2014 (2019 更新)
ロシア	ロモノーソフ記念モスクワ国立総合大学心理学部	2019
中華人民共和国	中国科学院成都生物研究所	2012 (2020 更新)
ミャンマー連邦共和国	ヤンゴン遠隔教育大学	2022
中華人民共和国	華南師範大学 地理科学学院	2024

総合人間学部

国・地域名	大学・機関名	締結年
台湾	国立台湾大学 文学院・社会科学院	2015 (2018 更新)
中華人民共和国	華南師範大学 地理科学学院	2024

【資料 5-6】 国際的な共同研究・研究ネットワーク・研究者交流

	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
① 共著論文数	39	35	27	12	13
② 共著書数	5	9	9	5	19
③ 外国人研究者の招聘・受入数	9	6	14	19	13
④ 外国からの被招聘数	3	8	11	7	11



施設・設備

6. 施設・設備

【資料 6-1】使用目的別室数と保有面積

(面積：㎡, 2016 (平成 28) 年度)

建物	教室*1		教員研究室*2		事務室*3		その他*4	
	部屋数	面積	部屋数	面積	部屋数	面積	部屋数	面積
吉田南総合館	7	287	170 [10]	5,822 [288]	0	0	24 [10]	954 [652]
吉田南 2 号館	3	216	49 [4]	1,382 [124]	0	0	4 [3]	196 [182]
吉田南 3 号館	2 [1]	162 [81]	31 [9]	840 [162]	1	36	3	180
吉田南 4 号館	0	0	0	0	0	0	2	50
総合人間学部棟	15	1,114	16	883	4	178	5	111
人間・環境学研究科棟	7	664	133	4,815	10	452	22 [6]	1,518 [622]
計	34 [1]	2,443 [81]	399 [23]	13,742 [574]	15 [0]	666 [0]	60 [19]	3,009 [1,456]

注) ・[] 内は、他部局利用スペース(貸借等)で内数

*1 講義室、実験実習・演習室、語学実習室を示す

*2 実験室、院生室、共同研究室が含まれる

*3 会議室(3室)が含まれる

*4 ボイラー室、電気(電源)室、ポンプ室、倉庫などが含まれる。また、吉田南総合図書館の使用スペース(14室)が含まれる

【資料 6-2】使用形態別室数と保有面積

(面積：㎡, 2012 (平成 24) 年度)

建物	講義室		実験・実習・演習室		語学実習室		合計	
	部屋数	面積	部屋数	面積	部屋数	面積	部屋数	面積
吉田南総合館	0	0	7	287	0	0	7	287
吉田南 2 号館	0	0	3	216	0	0	3	216
吉田南 3 号館	0	0	2 [1]	162 [81]	0	0	2 [1]	162 [81]
吉田南 4 号館	0	0	0	0	0	0	0	0
総合人間学部棟	10	800	4	203	1	111	15	1,114
人間・環境学研究科棟	2	353	5	311	0	0	7	664
計	12 [0]	1,153 [0]	21 [1]	1,179 [81]	1 [0]	111 [0]	34 [1]	2,443 [81]

注) ・[] 内は、他部局利用スペース(貸借等)で内数



社会との交流・公開

7. 社会との交流・公開

【資料 7-1】 公開講座開催状況

年度	開催日・テーマ	講師・演題	参加人数
2020 (R2)	オンライン授業を覗いてみよう 専門を他者に語る ～私たちの教育実践 WEB 公開 令和 3 年 2 月 15 日(月)～3 月 31 日(水)	◇ 中国書誌論(総合人間学部科目) ・ 松江 崇(人間・環境学研究所 准教授(古代中国語)) ◇ 有機化学演習 B(全学共通科目) ・ 廣戸 聡(人間・環境学研究所 准教授 有機化学)	
2021 (R3)	令和と宇宙時代 WEB 公開 令和 4 年 3 月 16 日(水)～5 月 31 日(火)	◇ 「古代日本人の言語空間へ予祝・言霊の基層へ」 ・ 佐野 宏(人間・環境学研究所 教授(国文学)) ◇ 「宇宙環境に適応する身体運動」 ・ 秋生 翔大(人間・環境学研究所 講師(運動制御学))	
2022 (R4)	世界情勢とエネルギー問題 令和 4 年 8 月 9 日(水) 13:30～17:00 対面とオンラインのハイブリッド形式	セッション1「グローバル化時代の「戦争」」 ◇ 講演 柴山 桂太(人間・環境学研究所 准教授(経済思想)) ◇ パネルディスカッション ・ 津江 広人(人間・環境学研究所 教授(有機化学)) ・ 中筋 朋(人間・環境学研究所 准教授(フランス演劇・思想)) セッション2「水素エネルギーと触媒技術～水素社会へ向かって～」 ◇ 講演 藤田 健一(人間・環境学研究所 教授(有機合成化学)) ◇ パネルディスカッション ・ 小林 哲也(人間・環境学研究所 准教授(ドイツ文学・精神史)) ・ 藤井 悠里(人間・環境学研究所 助教(天文学・宇宙物理学))	61 名 (対面 37 名、 オンライン 24 名)
2023 (R5)	幸せに生きる 令和 5 年 8 月 9 日(火) 13:30～17:00 対面とオンラインのハイブリッド形式	セッション1「幸せの二つの顔」 ◇ 講演 青山 拓央(人間・環境学研究所 教授(哲学)) ◇ パネルディスカッション ・ 石村 豊穂(人間・環境学研究所 准教授(地球化学)) ・ 幡野 恭子(人間・環境学研究所 助教(細胞生物学・藻類学)) セッション2「幸せに生きるために」 ◇ 講演 柴田 悠(人間・環境学研究所 教授(社会学)) ◇ パネルディスカッション ・ 角 大輝(人間・環境学研究所 教授(ランダム複素力学系・フラクタル)) ・ パッテ, パツラヴィ(人間・環境学研究所 講師(20 世紀史、日印関係史))	138 名 (対面 92 名、 オンライン 46 名)
2024 (R6)	AI 時代の教育と文化 令和 6 年 8 月 8 日(木) 13:30～17:00	セッション1「AI があふれ出した世界でわれわれは AI を AI するのか」 ◇ 講演 日置 尋久(人間・環境学研究所 教授(情報科学)) ◇ パネルディスカッション ・ 秋生 翔大(人間・環境学研究所 准教授(運動制御学)) ・ 合田 典世(人間・環境学研究所 准教授(イギリス・アイルランド文学)) セッション2「生成 AI は教育の黒船？」 ◇ 講演 金丸 敏幸(国際高等教育院 准教授(言語教育)) ◇ パネルディスカッション ・ 田口 かおり(人間・環境学研究所 准教授(美術史 保存修復学)) ・ 森山 真衣(人間・環境学研究所 助教(運動科学))	88 名 (対面のみ)
	『学問で平和はつくれるか?』出版記念 特別公開講座 「学問で平和はつくれるか?」 令和 6 年 10 月 31 日(木) 15:00～18:00	「学問で平和はつくれるか?」 私が総合人間学部と人間・環境学研究所で学んだこと ◇ 講演 藤原 辰史 (京都大学人文科学研究所 准教授(歴史学 特に農業史、環境史)) ◇ 書籍『学問で平和はつくれるか?』各執筆者からのコメント ◇ 藤原 辰史さんの応答 ◇ 会場参加者との質疑応答	90 名 (対面のみ)

【資料 7-2】本研究科関係発行元による学術誌

	タイトル	発行元 / 最新号 / ISSN /	URL
2	人間・環境学	京都大学大学院人間・環境学研究所 最新号 第 33 卷 (2024-12-20) 1 卷 (1992)- ISSN 0918-2829 NCID AN10409834	http://hdl.handle.net/2433/109772
3	総人・人環フォーラム (人環フォーラムの継続誌)	発行 京都大学大学院人間・環境学研究所 編集『総人・人環フォーラム』編集委員会 最新号 No.43(2025-02-28) 第 37 号 (2019)- ISSN 2434-9143 NCID AA12922608	http://hdl.handle.net/2433/240618
4	人間存在論	京都大学大学院人間・環境学研究所『人間存在論』刊行会 最新号 第 31 号 (2025-07-01) 第 1 号 (1995)- ISSN 1341-2698 NCID AN10540500	http://hdl.handle.net/2433/131937
5	あいだ／生成	あいだ哲学会 (人間・環境学研究所篠原資明研究室→武田宙也研究室) 最新号 第 15 号 (2025-03-31) 第 1 号 (2011)- PISSN 2185-9515 EISSN 2432-8758 NCID AA12516163	http://hdl.handle.net/2433/294840
6	文芸表象論集	京都大学大学院人間・環境学研究所思想文化論講座文芸表象論分野 (第 2 号-), 文芸表象会 (第 1 号) 最新号 第 10 号 (2023-01-13) 第 1 号 (2014)- ISSN 2188-0239	http://hdl.handle.net/2433/185271
7	MURAKAMI REVIEW	京都大学大学院人間・環境学研究所小島基洋研究室内 村上春樹研究フォーラム 最新号 第 5 号 (2023-12-25) 第 0 号創刊準備号 (2018)- ISSN 2434-5148	http://hdl.handle.net/2433/243765
8	言語科学論集 (Papers in Linguistic Science)	京都大学大学院人間・環境学研究所言語科学講座 最新号 第 30 号 (2024-12) 第 1 号 (1995)- NCID AA11467856	http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/modules/PLS/
9	ドイツ文学研究：報告継続前誌獨逸文学 研究 / 京都大学分校獨逸語研究室	(第 49 号-) 京都大学人間・環境学研究所ドイツ語部会 (第 39 号- 第 48 号) 京都大学総合人間 学部ドイツ語部会 (第 11 号- 第 38 号) 京都大学教養部ドイツ語研究室 最新号 第 70 号 (2025) 第 11 号 (1963)- ISSN 0419-5817 NCID AN0014593X	http://hdl.handle.net/2433/71157
10	社会システム研究	京都大学大学院人間・環境学研究所社会システム研究刊行会 最新号 第 27 号 (2024-03-21) 第 1 号 (1998)- ISSN 1343-4497 NCID AA11273113	http://hdl.handle.net/2433/179797
11	地域と環境 Region and Environment	京都大学大学院人間・環境学研究所「地域と環境」研究会 最新号 No.18(2024-12) No.1(1998)- ISSN 1344-0985 NCID AA11356174	http://hdl.handle.net/2433/197661
12	東アジア文明講座紀要歴史文化社会論講 座紀要の継続誌	京都大学大学院人間・環境学研究所東アジア文明講座 最新号 第 2 号 (2025-02) 第 1 号 (2024)- ISSN 2759-3487 NCID AB00027214	http://hdl.handle.net/2433/289000
13	英文学評論 Review of English Literature	(第 76 集-) 京都大学大学院人間・環境学研究所英語部会 (第 65 集- 第 75 集 京都大学総合人 間学部英語部会 第 1 集- 第 64 集 京都大学教養部英語教室) 最新号 第 97 集 (2025-03-17) 第 1 集 (1954)- ISSN 0420-8641 NCID AN00022521	http://hdl.handle.net/2433/134693
14	Contributions from the Biological Laboratory, Kyoto University	人間・環境学研究所 (旧教養部生物学教室・総合人間学部自然環境学科) 最新号 Vol.32(2024-07-12) Vol.1(1955)- ISSN 0452-9987 NCID AA00616874	http://hdl.handle.net/2433/288024
15	芸術文化講座論集：京都大学人間・環境学 研究所芸術文化講座紀要	京都大学人間・環境学研究所芸術文化講座編集委員会 最新号 第 2 号 (2025-03-03) 第 1 号 (2024)-	http://hdl.handle.net/2433/287277
16	東アジア文明講座紀要	京都大学大学院人間・環境学研究所東アジア文明講座 最新号 第 2 号 (2025-02-28) 第 1 号 (2024)- ISSN 2759-3487	http://hdl.handle.net/2433/289000
17	左岸：京都大学映画メディア研究	京都大学大学院人間・環境学研究所映画メディア合同研究室 最新号 第 2 号 (2022-10-31) 第 1 号 (2021)- ISSN 2436-6013	http://hdl.handle.net/2433/275877
18	いのちの未来	京都大学大学院人間・環境学研究所カール・ベッカー研究室 最新号 No.2(2017-02-18) No.1 創刊号 (2016)- ISSN 2423-9445	http://hdl.handle.net/2433/203143
19	ディアファネース：芸術と思想	京都大学大学院人間・環境学研究所岡田温司研究室 最新号 第 7 号 (2020-03-29) 第 1 号 (2013)- NCID AA12674073	http://hdl.handle.net/2433/216966
20	人環フォーラム【終刊】	京都大学大学院人間・環境学研究所 No.1(1996)-No.36(2018) ISSN 1342-3622	http://hdl.handle.net/2433/93000
21	歴史文化社会論講座紀要【終刊】	第 6 号 (2009)- 第 20 号 (2023) 人間・環境学研究所歴史文化社会論講座 ISSN 1344-4824 継続前誌 日本文化環境論講座紀要 第 1 号 (1999)- 第 5 号 (2003) 京都大学大学院人間・環境学 研究所日本文化環境論講座	http://hdl.handle.net/2433/281701
22	コンタクト・ゾーン【終刊】	006(2013)-011(2019) 京都大学人間・環境学研究所文化人類学分野 001(2007)-005(2012) 京都大学人文科学研究所人文国際研究センター ISSN 2188-5974 (電子版のみ)	http://hdl.handle.net/2433/198468
23	文明構造論：京都大学大学院人間・環境学 研究所現代文明論講座文明構造論分野論集 【終刊】	Vol.1(2005)-Vol.10(2014) 京都大学大学院人間・環境学研究所現代文明論講座 『文明構造論』刊行会 ISSN 1880-4152 NCID AA12055843	http://hdl.handle.net/2433/86166

【資料 7-3】出張講義・訪問受入状況

		年度	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)
訪問受入	講義	高等学校・中高一貫校・中学生対象	1	4	14	16	13
	講義	小・中学校・小中一貫校・小中学生対象			1	3	4
	講義数計		1	4	15	19	17
	施設数		1	2	11	12	13
出張講義	講義	高等学校・中高一貫校・中学生対象	5	6	9	15	11
	講義	小・中学校・小中一貫校・小中学生対象	4	2	2	2	4
	講義数計		9	8	11	17	15
	施設数		8	7	9	10	12
オンライン講義	講義	高等学校・中高一貫校・中学生対象	3	4	3	2	
	講義	小・中学校・小中一貫校・小中学生対象					
	講義数計		3	4	3	2	0
	施設数		3	4	3	1	
学内講師	講義						1

(出典) 大学院人間・環境学研究所 総合人間学部 ホームページ
 社会貢献 > 出張講義・訪問受入
https://www.h.kyoto-u.ac.jp/academic/social_action/delivery_visit/

【資料 7-4】学びコーディネーターによる出前授業

京都大学では、高大連携事業の一環として「学びコーディネーター事業」を 2013 年より実施。高校生を対象とした 60 分の授業を、「学びコーディネーター」として登録された博士後期課程の大学院生およびポストドクターが行っている。大学院生等が取り組む研究の最前線をわかりやすく紹介することにより、高校生の学びへの動機づけを高めるとともに、高等学校における探究活動、キャリア形成等を支援することを目的としている。学びコーディネーターには、教育現場の体験、研究の意義の再確認、教育経験の証明として「活動証明書」が発行されるなどのメリットがある。

令和 4 年度 (登録者数 6 名)

	実施日	学校名	授業テーマ	受講生数
1	令和 4 年 9 月 6 日	文化学園長野高等学校 (長野県)	「思考する」ことを思考する	68
2	令和 4 年 9 月 14 日	埼玉県立熊谷高等学校	「理解する」とは何か——本を、物事を、目の前の相手を理解することについて	30
3	令和 4 年 9 月 14 日	野田学園高等学校 (山口県)	神仏の造形～信仰の美術～	30
4	令和 4 年 9 月 21 日	宮崎県立高鍋高等学校	博物館のデジタル化と美術史	24
5	令和 4 年 10 月 18 日	東京都立世田谷泉高等学校	アイデア勝負！生物の「スゴワザ」、なにか製品に使えないかな？ ☆考察型☆	21
6	令和 4 年 11 月 16 日	京都府立南陽高等学校	人文学とは何か——文系は不要か？	11
7	令和 4 年 11 月 18 日	東京都立国立高等学校	世界三大一神教について考えよう～啓典をめぐる 3 つの宗教の共通点と違い～	80
8	令和 4 年 11 月 25 日	茨城県立牛久栄進高等学校	「思考する」ことを思考する	43

令和 5 年度 (登録者数 8 名)

	実施日	学校名	授業テーマ	受講生数
1	令和 5 年 10 月 20 日	広島市立基町高等学校	外国語を学ぶことについて	30
2	令和 5 年 11 月 1 日	千代田区立九段中等教育学校	自分の体がアリの巣に？！—アリと植物の共生系—	30
3	令和 5 年 11 月 8 日	愛知県立五条高等学校	文系と理系、社会科学系の近さと遠さ——「方法」への視座から	313
4	令和 5 年 11 月 9 日	北海道旭川東高等学校	「知識」とは何だろうか？——認識問題から考える	240
5	令和 5 年 11 月 16 日	兵庫県立伊丹高等学校	複数の言語を学んでみよう！	40
6	令和 5 年 11 月 30 日	兵庫県立伊丹高等学校	特別出前授業 (高等学校による企画)	40
7	令和 5 年 12 月 1 日	宮崎県立日南高等学校	孤独なエゴイズムと、成長——言語哲学が僕に教えてくれたこと	64
8	令和 5 年 12 月 20 日	京都府立峰山高等学校	外国語を学ぶことについて	20

令和 6 年度 (登録者数 7 名)

	実施日	学校名	授業テーマ	受講生数
1	令和 6 年 11 月 8 日	奈良県立奈良北高等学校	ミツバチが地球・生命環境講座環境問題を解決に導く？ —養蜂の文化人類学から	30
2	令和 6 年 11 月 11 日	静岡県立清水東高等学校	分子の世界を覗き見る	81
3	令和 6 年 11 月 28 日	兵庫県立伊丹高等学校	蜂蜜を食べながらラオスについて研究する—大学での勉強・研究とは何か	40
4	令和 6 年 12 月 3 日	山口県立山口高等学校	写真を撮るときのポーズにはどんな意味があるの？：19 世紀の肖像写真におけるポーズの流行に着目して	35
5	令和 6 年 12 月 4 日	埼玉県立浦和第一女子高等学校	道徳って何だろう？—道徳と社会の関係を考える	20
6	令和 6 年 12 月 11 日	兵庫県立明石高等学校	「思っていたより美人」な顔は覚えやすい？—顔の魅力の予測誤差が記憶に与える影響の脳内メカニズム	35
7	令和 6 年 12 月 19 日	兵庫県立伊丹高等学校	特別出前授業 (高等学校による企画)	40

【資料 7-5】 京都大学の卒業生と教育に係るアンケート実施結果 (令和 5 年) より抜粋

		総合人間学部 27	人間・環境学研究科 42	京都大学全体 217
I 京都大学を卒業・修了した学生の印象と備わっている能力について (Q8~Q23)				
Q08 総合評価	① 悪い	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや悪い	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	③ 普通	1 3.7%	3 7.1%	10 4.6%
	④ おおむね良い	10 37.0%	16 38.1%	66 30.4%
	⑤ 良い	16 59.3%	23 54.8%	141 65.0%
Q09 一般教養(大卒レベル)	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	1 3.7%	0 0.0%	1 0.5%
	③ 普通	2 7.4%	4 9.8%	15 6.9%
	④ おおむね十分	7 25.9%	9 22.0%	56 25.8%
	⑤ 十分	17 63.0%	28 68.3%	145 66.8%
Q10 専門知識とその活用能力	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%
	③ 普通	2 7.4%	2 4.8%	13 6.0%
	④ おおむね十分	9 33.3%	10 23.8%	70 32.3%
	⑤ 十分	16 59.3%	30 71.4%	133 61.3%
Q11 英語運用能力(文章読解、記述)	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%
	③ 普通	9 33.3%	9 22.0%	59 27.2%
	④ おおむね十分	10 37.0%	15 36.6%	91 41.9%
	⑤ 十分	8 29.6%	17 41.5%	66 30.4%
Q12 英語運用能力(会話)	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	2 0.9%
	③ 普通	11 40.7%	13 31.7%	78 35.9%
	④ おおむね十分	8 29.6%	14 34.1%	88 40.6%
	⑤ 十分	8 29.6%	14 34.1%	48 22.1%
Q13 国際性、異文化理解力	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	1 3.7%	0 0.0%	2 0.9%
	③ 普通	8 29.6%	9 21.4%	77 35.5%
	④ おおむね十分	9 33.3%	17 40.5%	84 38.7%
	⑤ 十分	9 33.3%	16 38.1%	54 24.9%
Q14 企画力、創造性	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	4 1.8%
	③ 普通	4 14.8%	6 14.3%	41 18.9%
	④ おおむね十分	11 40.7%	18 42.9%	93 42.9%
	⑤ 十分	12 44.4%	18 42.9%	79 36.4%
Q15 課題解決力	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	2 0.9%
	③ 普通	3 11.1%	2 4.8%	19 8.8%
	④ おおむね十分	8 29.6%	14 33.3%	83 38.2%
	⑤ 十分	16 59.3%	26 61.9%	113 52.1%
Q16 思考力・判断力	① 不十分	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%
	③ 普通	1 3.7%	2 4.8%	16 7.4%
	④ おおむね十分	8 29.6%	12 28.6%	71 32.7%
	⑤ 十分	18 66.7%	28 66.7%	129 59.4%
Q17 協調性、コミュニケーション能力	① 不十分	0 0.0%	1 2.4%	2 0.9%
	② やや不十分	1 3.7%	1 2.4%	8 3.7%
	③ 普通	2 7.4%	6 14.3%	45 20.7%
	④ おおむね十分	15 55.6%	16 38.1%	93 42.9%
	⑤ 十分	9 33.3%	18 42.9%	69 31.8%
Q18 リーダーシップ	① 不十分	0 0.0%	1 2.4%	1 0.5%
	② やや不十分	1 3.7%	1 2.4%	13 6.0%
	③ 普通	6 22.2%	9 21.4%	65 30.0%
	④ おおむね十分	14 51.9%	17 40.5%	86 39.6%
	⑤ 十分	6 22.2%	14 33.3%	52 24.0%
Q19 倫理観	① 不十分	0 0.0%	1 2.4%	1 0.5%
	② やや不十分	0 0.0%	0 0.0%	1 0.5%
	③ 普通	6 22.2%	7 17.1%	38 17.5%
	④ おおむね十分	10 37.0%	12 29.3%	91 41.9%
	⑤ 十分	11 40.7%	21 51.2%	86 39.6%

		総合人間学部 27		人間・環境学研究科 42		京都大学全体 217	
Q20 責任感	①不十分	0	0.0%	1	2.4%	1	0.5%
	②やや不十分	0	0.0%	1	2.4%	2	0.9%
	③普通	6	22.2%	4	9.5%	34	15.7%
	④おおむね十分	6	22.2%	12	28.6%	84	38.7%
	⑤十分	15	55.6%	24	57.1%	96	44.2%
Q21 多角的視点、広い視野	①不十分	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	②やや不十分	1	3.7%	0	0.0%	3	1.4%
	③普通	2	7.4%	7	16.7%	31	14.3%
	④おおむね十分	9	33.3%	14	33.3%	92	42.4%
	⑤十分	15	55.6%	21	50.0%	91	41.9%
Q22 説明力	①不十分	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	②やや不十分	0	0.0%	0	0.0%	2	0.9%
	③普通	2	7.4%	4	9.5%	26	12.0%
	④おおむね十分	11	40.7%	15	35.7%	92	42.4%
	⑤十分	14	51.9%	23	54.8%	97	44.7%
Q23 実行力	①不十分	1	3.7%	0	0.0%	1	0.5%
	②やや不十分	0	0.0%	1	2.4%	2	0.9%
	③普通	4	14.8%	3	7.1%	31	14.3%
	④おおむね十分	9	33.3%	19	45.2%	98	45.2%
	⑤十分	13	48.1%	19	45.2%	85	39.2%
II 博士学生について Q25 貴社・貴団体の(他大学も含めた)博士 学生採用実績についてお聞かせください。	① あり	20	74.1%	39	92.9%	171	70.1%
	② なし	7	25.9%	3	7.1%	73	29.9%
III 留学生について Q28 貴社・貴団体の(他大学も含めた)留学 生採用実績についてお聞かせください。	① あり	17	63.0%	33	78.6%	174	71.3%
	② なし	10	37.0%	9	21.4%	70	28.7%

全学版：

『京都大学の卒業生と教育に係るアンケート実施結果－ 関係者(主に本学が主催する企業フォーラムに参加または登録した企業等)へのアンケート－』

<https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/documentsr5-2-c4b08702a28ac6a3c77bfa7e0d3d72f4.pdf>

人環レビュー 2024

教育・研究活動に係る自己点検・評価報告書

2025年12月発行

編集・発行 京都大学大学院人間・環境学研究科
自己点検・評価委員会

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

TEL: 075-753-6599(総務企画室) FAX: 075-753-7908

<https://www.h.kyoto-u.ac.jp/>

印刷・製本 有限会社レイ・プリンティング

©2013 Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

本誌の無断転写・転載を禁じます。